

昭和四十八年度

# 部報

北海道大学馬術部



遠く盛りたる蒼空は

我等が天幕

我等愛馬を乗り行く時こそ

Binding

# 北大馬術部讃歌

作詩 三浦 清一郎  
作曲 滝沢 南海雄

はるきたれば だいちひかーる  
しろがねのえんざん ゆめほうほうたり  
たからかにいまぞいななけわれ  
らしんめのほまーれあり  
ほまーれあり ほうく だいほうく だい お  
お わがほこう われらしんめの  
ほまーれあり

## 北大馬術部讃歌

一、

春来たれば、大地光る  
銀の遠山、夢花々たり  
高らかに 今ぞ嘶け/  
われら駿馬のほまれあり

二、

時来たれば 旗をかざせ  
青雲の旅路に 意気軒昂たり  
高らかに 今ぞ嘶け/  
われら駿馬のほまれあり

三、

雲流れて 旅路遙か  
青春の孤杖 泥濘はげめど  
凜然と 進みて行かむ  
駿馬のほまれあるかぎり  
北大 / 北大 / おゝ我が母校  
われら駿馬のほまれあり



一年目 日高合宿



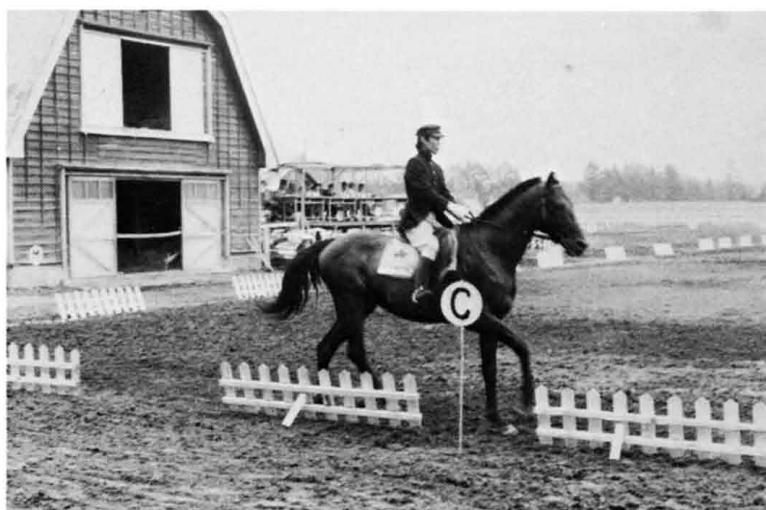
部内運動会



遠乗会 十銭浜



草刈大会



北日本予選 則近兄と北隼号



全日学 則近兄と北隼号



道体 則近兄と北隼号



道体 南部兄と千里馬号

## 目 次

○ 巻 頭 言 .....	部 長 河 田 啓 一 郎 .....	5
○ 主 将 の 抱 負 .....	主 将 景 山 博 文 .....	6
○ 役 員 報 告		
主 務 報 告 .....	主 務 本 村 洋 文 .....	7
作 業 報 告 .....	作 業 添 田 昌 一 .....	8
飼 育 報 告 .....	飼 育 吉 野 勝 之 .....	9
馬 具 ・ 備 品 報 告 .....	馬 具 備 品 水 野 豊 香 .....	10
会 計 報 告 .....	会 計 常 田 和 子 .....	10
馬 匹 報 告 .....	馬 匹 相 川 宗 毅 .....	12
記 録 報 告 .....	記 録 江 口 州 志 .....	14
戦 績 及 び 行 事 報 告 .....		15
○ 各 馬 調 教 報 告		
北 隼 号 .....	四 年 目 則 近 彰 .....	19
北 秀 号 .....	三 年 目 景 山 博 文 .....	23
北 武 号 .....	三 年 目 吉 野 勝 之 .....	25
北 勇 号 .....	三 年 目 江 口 州 志 .....	29
千 里 馬 号 .....	四 年 目 南 部 孝 一 .....	30
リ ヒ ト 号 .....	三 年 目 江 口 州 志 .....	32
天 龍 山 号 .....	二 年 目 添 田 昌 一 .....	33
カ ム イ 号 .....	二 年 目 尾 崎 弘 康 .....	34
疾 風 号 .....	五 年 目 西 村 正 二 郎 .....	35
羊 蹄 号 .....	六 年 目 榊 井 明 .....	39
ス タ ー ラ イ ト 号 .....	七 年 目 松 井 亮 .....	46
○ 「近頃思うこと」 .....	監 督 岡 田 光 夫 .....	48
○ 「馬とのつきあい」 .....	第 六 代 部 長 半 沢 道 郎 .....	49
○ 遺 稿 文 「黒 沢 先 生 の 思 い 出」 .....	昭 和 1 2 年 度 主 将 山 下 正 亮 .....	54



○部生活報告

練習について .....	一年目	荒井 隆	58
試合 .....	二年目	本村 洋文	59
試合 .....	二年目	若松 光子	60
当番の日 .....	一年目	佐野 淳之	61
当番雑感 .....	三年目	佐伯 久美子	62
馬術部の楽しさ即作業の楽しさ .....	一年目	横沢 敏夫	63
(作業)とその.....	二年目	柴 沼 俊	65
コンパ生活一年生の反省 .....	一年目	平野 雅裕	66
コムバについて .....	二年目	阪上 泉	67
日高合宿 .....	一年目	西田 篤司	68
合宿について .....	二年目	阿部 一哉	71

○卒部・現役部員 .....	自己紹介・他己紹介	72
----------------	-----------	----

○先輩諸兄近況報告 .....おはがきより

昭和30年卒	鎌田 正人	87
28年卒	吉本 正	.....
11年卒	脇田 代子郎	87
28年卒	斎藤 善一	87
40年卒	加藤 正昭	88
46年卒	梶村 啓世	88
43年卒	降旗 正忠	88
39年卒	荒木 伸也	88
9年卒	東園 基文	88

○同好会より

同好会近況 .....	同好会幹事	市川 端彦	89
○名簿.....			91

## 巻頭言

部長 河田 啓一郎

今年四月一日第六代部長半沢道郎先生が御退官になられ、私  
次の顧問教官をお引受けすることになりました。

私事にわたって恐縮ですが、私と馬術部とのいきさつを少し述  
べさせて頂きたいと存じます。私は昭和二〇年に北大予科に入學  
しましたが、かねてから北大に入ったら馬に乗りたいというのが  
大きな念願でありました。しかるに、当時は太平洋戦争の末期で、  
やがて敗戦、そして戦後の食料難時代で、馬糧の雑穀類はみな人  
間様が食べておりまして、馬を飼う余裕などなかったわけであり  
ます。したがって伝統ある北大馬術部も休部の止むなきに至った  
時代でありました。

切角大志を抱いて津軽の海を渡ってきたのに、念願の乗馬がで  
きず大変残念に思っていたのですが、農学部獣医学科に進学して  
からは、毎日臨床実習や解剖などで馬に接する機会があり、わず  
かに心を慰めていたのであります。そして第三代部長の故黒沢亮  
助先生の家畜外科学教室にお世話になり、大学院学生、助手時代

を馬の診療に明け暮れました。

昭和二六年から馬術部が再出発したわけですが、すでに私は学  
部を卒業していましたので再び入部のチャンスは失われました。  
ところが当時の部員の有力メンバーであった永井重翁君は私と中  
学（旧制）の同窓であったことから、ここに初めて馬術部の馬に  
乗せてもらうことができました。昭和二九年に太泰先生、半沢先  
生、松本先生などのお骨折りで北大乗馬同好会が出来、早速入会  
させてもらい、天下晴れて部の馬に乗る資格を得ました。当時斉  
藤善一兄に乗馬の手ほどきを受けましたが、今でも感謝しており  
ます。

馬術部再建時代の部員の大半は畜産学科と獣医学科の学生であ  
った関係で、またその後私が両学科の授業を担当するようになって  
から、今日まで多数の部員諸氏とお近づきになれたわけであり  
ます。なかでも大久保利彦兄（三〇年度主将）は私の教室に籍を  
置いていましたが、主将としての重責と猛烈な練習、副業のダン  
ス、学業とよくも頑張り通したものと今だに感心しております。  
以上が私と馬術部、部長諸先生および部員諸兄とのおつきあい  
のあらましであります。多年の夢であった馬術部入部が今年は  
じめて許可されたわけであります。まことに感激の至りでありま  
す。

幸い、前部長半沢先生の長年にわたる絶大な御努力と大学当局  
の深い御理解により、キャンパスの一等地に立派な馬場と厩舎を  
作って頂きましたので、部員一同非常に張り切って練習にまたア  
ルバイトに頑張っております。馬も次第に出来上がってきつつある  
ようで、諸大会の成績もまた逐次向上して来ております。一年生

部長としては微力ではありますが、名譽ある北大馬術部の一員として誠心努力して参りたいと存じておりますので、諸先輩、後援会の皆様のご指導御援助を切にお願ひ申し上げます。

巻頭言にふさわしい文章とは申せませんが、新任の御挨拶と致します。

## 「敢然とたたかい

### 敢然と勝利する」

主将 景山博文

現在我々は北軍号の一昨年、昨年の全日学生への出場ということを除けば、いやそれをさえひくくめてみても記録の上で華々しい戦績をあげているとは決して言えない。だが我々は悲観してはいない。北軍に続く北武、北勇、それにスターライト、疾風、千里馬などの新馬がまがりなりにも育ってきているし、また以前

に較べ部員一人一人の闘志が高まり、精神がふるいたち、強者たることに對する欲求、意気込みも強まってきたと思えるからである。

下級生は下級生なりに、選手は選手なりに、また部を側面から応援しようとする部員はその部員なりに、全ての部員がそれぞれ役割と責任を自覚し、確かに部員一人一人が動くことにより部も成りたっており、また動き活動していくことができるんだと自覚できる、そのような活動のもとで始めて個人は、己自身が弱者であることに我慢がなくなくなり、強者たることを強烈に願うようになるし、また部も当然そうであるべきだとして、部に對しても同様に要求し主張するようになるであろう。そして、そうして得られるであろう部の向上、勝利は全ての部員に大いなる感激と限りない充足感を味わわせるであろう。だが或いは時として我々は敗北の悲哀を味わわなければならないかもしれない。しかしそうであるにしても感情の振幅が大きければ大きいほどその激情のうねりがさらなる飛躍の爲のパネとなるであろう。

大きな目でみたとき我々は部が追求すべき目標として一つの確固とした理念、方式といったものを持つべきであると思う。だが理念、方式が実践の場まで降りてくるとそれは非常に具体的なものとして、そのひとつひとつは実践の場で検討され、解決されて行くべき問題として現われてくる。我々はこれらのひとつひとつを日々の練習において消化し身につけていかねばならない。そしてひとつひとつを体得し、それを再び結びつけることにより目標とする理念、方式に近づいていけるのだと思う。決して一足とびに理念、方式といったものを自分達のところへひきずりこ

んでいっきに丸がかえすることはできない。

我々は目標とすべき理念、方式を学んだら次に努力すべきことはその理念、方式を実行できるだけの技術を身につけることである。不足しているのはその方法、工夫である。近年戦績の面で低迷すればするほどその原因を自分達の努力がたたらなかつたのだとして、理念、方式のワクの中へと同じ込み、まだまだ方式が真に実行に移されていないとして、もっとももっとやらなければいけないのだといった、ある意味で精神主義とでもいえる状態に陥ってしまい、具体的などころでの技術のまずさの認識、その解決策の検討と実行といったことが、個人としてはともかく部全体としてなおざりにされていたように思う。

我々は今まで余りにも小さく肩をいからせ齒をくいしばっていたのではないだろうか。顔をあげ広い視野にたつて己の全てを素直に認識し、何が欠けているか、何を「よし」とできるかといった判断から出発せねばならない。具体的などころで我々の技術、感覚の不足しているものを認識し、いかにそれを克服していくかという方法、工夫を追求しなければならぬ。カラを破って外へ向って大きく伸々と活動しなければならぬ。我々部員にはそれを可能にする旺盛なる意欲と闘志があると思う。

先輩諸兄の日頃の御厚意を心から感謝するとともに一層の幅広い援助と御助言をお願いします。

## 主務報告

主務 木村洋文

昨年一〇月、名マネージャー 柴田兄よりこの職を引き継いだわけですが、約半年の間、形に残る仕事は何一つやりとげられませんでした。馬術部の裏方を担うマネージャーとして非常に恥かしい事でありますが、これから夏にかけ仕事が多くなる時期でもあり、若さを武器にどしどし動いて行きたいと思っております。

### 財政問題

会計及び飼料の係から報告があると思いますが、飼料の高騰がいよいよ気違ひ的となり、昨年の部報でエン麦一袋、一六〇〇円  
↓二一〇〇円に値上りしたと報告いたしました。今年はその  
二一〇〇円↓二七〇〇円↓三〇〇〇円↓三五〇〇円と将に天井知らずの状態です。現在一二頭を繁養している馬術部ですが、何頭か離脱させねばならないという最悪の時態に今将に直面していると言っても過言ではありません。学生部の援助ですが、柴田前マネージャーの御努力により四八年度より飼料代として一〇万円アップの七〇万円となりましたが、四九年度は大学の都合で少し複雑になり、エン麦一〇〇袋、フスマ五〇袋等、計三八万円相当の前渡しを受け、残りは交渉ということになりました。あとはこちらの腕次第、頑張るつもりであります。

## 備品関係

新しい馬場に移り早三年以上がたちましたが、いつのまにか馬場の砂が皆無という状態になってしまいました。今年の雪どけ時には是非砂を入れたいものだと思っておりましたところ、学生部より約五〇<sup>㎡</sup>、又東京〇B会より砂代として一六万円の援助をいただきました。この場をかりてお礼申し上げます。これで八〇<sup>㎡</sup>ほど購入でき、合計一三〇<sup>㎡</sup>の砂が新たに入る事となりました。馬場として良い状態にする為には約二〇〇<sup>㎡</sup>の砂が必要であり、それにはまだかなり不足しておりますが、今後とも学生部との交渉等、努力を惜しまないつもりであります。

又、飼料庫も重大問題です。昨年まで毎年一冬分の乾草を農学部わきにある古い倉庫に貯蔵しておりましたが、昨年取り壊され、乾草置場がなくなりました。今年の冬は厩舎の二階や現在使用していない陸上部の部室等になんとかおし込めはしたものの今度の冬の事が心配です。これに關しては打開の糸口さえつかめないのが現状であります。

## 半沢先生御退官記念馬術部四十年誌

後援会、加藤公敏兄の御尽力により、いよいよ半沢先生御退官を記念した馬術部四十年誌が完成いよいよ一歩になりました。加藤さんをはじめ、四十年誌製作に御協力下さった先輩諸兄に改めてお礼申し上げます。馬術部現役員からも阪上兄、阿部兄、荒井兄達が、加藤兄のもと大車輪で働いております。きつと立派な四十年誌を完成する事ができると確信しております。

そして……………

飼料の値上り、又最近畜産公害もうるさくなり、馬達にとって住みづらい世の中になりましたが、ぼくらを信頼して懐いてくれる馬達の為にも頑張るつもりです。

## 作業

添田 昌一

肉体労働を駆使して、馬のためクラブのために働らくこと。馬術部を支えている大きな要素である。活動の大きな側面だ。

一年生の時は作業を通して、先輩達や、部の生活にふれると言っても過言ではあるまい。夢中で働らく一年生、夢中で働らいた後は気持ちが良いものだ。生き物を飼うことを実感する時でもある。反面、反くことを許さず、有無をいわさぬものもある。考える前に行動しなければならぬ、行動によってクラブとの関わりを作り出していかねばならぬ。運動ではない部分が多い馬術部である。作り出した生活の中に馬が生きているのだ。皆で馬を飼っていかうとする以上、甘えてはいけない。いままではいわれたことをぬかりなくやればよかった。こんどはやることを見つけ、決め、人を集め一語にやるのだ。従が主に変わった。仲間同志でやっているはずなのに、やらしているという意識にかたよる。わずらわしさがあるからか。でも作り出さねばならぬ。

## 飼育

吉野勝之

昨年未よりの飼料代の値上がりは異状を極め、特に脱脂大豆は世界的な品不足で、年が明けた頃には品物が無く、もし買うとしても以前の三倍はかかるというひどさでした。フスマは三〇キログラムで九〇〇円だったものが、一〇〇〇円に。エン麦は四〇キログラム一五〇〇円だったものが、現在二三〇〇円になっていきます。外麦の値上げ当初は、内麦の質の良い物を安く購入していましたが現在は外麦よりも内麦の方が高いという、おかしな現象が起こっています。飼料代の単価のアップと共に、馬の頭数も一頭と多く、二三年前と比べても飼料代だけでも、倍加したのではないかと思われます。加えて今夏は、七十年ぶりだと言おう干ばつのため乾草が非常に高く、去年キログラム当り一六円と二〇円で買っていたものが、今夏は二三円と二五円と値上がりしました。又、二番草の刈り取りが出来なかつたとかで、乾草そのものの絶対量が少なく、乾草屋さん頼んでようやく必要量を買ひ込む事が出来ました。

今夏の干ばつによって真夏は青草が無くなり、当番による草刈りも、二番草の生え始めを刈る事は極力避け、キクイモ・ササなどによってなんとか食いつなぎました。もし帯広へ遠征していなかつたら、何頭か栄養失調になつたのではないかと思ひます。今夏はさながら綱渡りをした様な気がします。七月の大草刈り大会

では、岡田監督、八木さんに、市の空地内の草を刈れる様、御世話して頂き、又、半沢先生より草刈り機の寄贈を受け、佐合さんには営業車を草の運搬に当てるべく都合できる様御尽力を賜り、又小野さんの御協力も得て、二日間で千トン近く、値段にして十万円相当の乾草を作る事が出来ました。草刈り場所は少々遠かった様ですが、なだらかな丘の斜面で広い採草地が一望でき、天候にも恵まれて、突に楽しい、気分爽快な草刈り大会が出来たと思ひます。

堆肥は以前、北大構内の苗圃へ全部持つていて貰つたのですが一昨年より農家と契約して、寝ワラと交換に持つて行つて貰う様になっています。又、農場の方でも、特に農業機械学科の方でも堆肥が入用で、採草地の草刈りと、一番草乾草とを貰う事を、交換条件の一部を廻しています。なお寝ワラに関しましては、今春佐合さんより、相当多く援助して頂きまして、この紙面を貸りまして感謝致したいと思ひます。

とにもかくにも、馬達にはできるだけ快適な環境を作つてやりたく、努力したいと思ひます。

## 馬具・備品

水野豊香

馬具と言えはすぐに連想安易なものであるけれど、備品はなんともいたしがたし。馬術部のすべての物資を示す。女子部室の水道管の修理までお呼びがかかるほどで、雑然たるものどうして手をつけていたらよいかしはし沈黙である。だから報告といつてもこと備品については説明するには紙面不足で馬具について少々やってみようと思う。

現在使用可能な鞍は一四騎、二、三を除くと殆んどが馬具屋連いのおいほれである。鞍も予備が二組あるにはあるが、これも古い先短いようである。雑多なものに關しては同好会からの援助でなんとか切守している。

報告とは名ばかり、これぐらいにしておいて、備品の中には勿論障碍も含める、そこで我がイタリー式馬術、野外にありで、野外騎乗用の障碍もあって然るべきだがそれがない。幸い、ちまたの土地ブームをよそに、北大には恵畑裏の草地から、グランド、農場とまだまだ余地がある。そこを利用して、障碍を造ってみたと計画を練っている。

春、雪がとけたら、作業と連合して着手したいと考える。

部員生活も、かなり民力が上昇して、洗濯機、瞬間ガス湯沸し器、それから学内電話、原島さんのおかげで貯炭式ストーブまで完備しており古き時代と比すれば天と地であると先輩にやられる。

たとえ鞍は悪くてもしっかりやらなあ、あかんと肝に命じず。

本来は、薬品も含まれるのだが、どうしても手がまわらず、柴沼兄に一任している。

## 会計

常田和子

四十八年度の収支状態は別表の通りです。今年度は、主な収入である競馬場のアルバイトで約五十六万円入り、またその他のアルバイト、大学祭での売上げ金、各方面からの援助金など予算外の収入があったのですが、飼料代、蹄鉄代、及び薬品等の大幅な値上りのため例年のように苦しい状況となってしまいました。

赤字分としてたまっていた飼料代十数万円は、学生部から返済してもらいました。四十九年度は、速征費が相当かかると思われますし、さらに春には馬場に砂を入れる予定ですので、学生部その他のからの援助はありますものの二十万くらいの出費があると思われまます。臨時のアルバイトなども考えてなんとか乗り切ろうと思っております。

ところで、この馬場整備費として東京OJ会より十万円いただき、また北軍が十一月に速征いたしました時にも御援助いただきありがとうございます。今後ともよろしくお願い致します。

昭和48年度 会計報告

		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	
収     入	部費・入部金	77,340	62,548				160,255	25,675	20,360	8,750	13,265	9,000	377,193
	アルバイト				35,565	9,000	12,000	565,950					622,515
	学馬連					106,960		726,000			13,100		846,060
	体育会分配金									28,000			28,000
	後援会								10,000				10,000
	その他		21,660			173,325	121,776	10,000		45,830	10,000		382,591
	合計	77,340	84,208		35,565	289,285	294,031	1,327,625	30,360	82,580	36,365	9,000	2,266,359
支     出	飼料	27,000				11,200	235,372		373,210	202,700			849,482
	蹄鉄	146,750						267,700		119,400			533,850
	馬具備品		5,885	5,500	8,965	430	1,650	14,890	11,900		6,700		55,920
	薬品		65,490	7,840			9,080	28,182		3,500	650	12,070	126,812
	遠征	11,880			23,200	23,200		48,990	52,700		1,660		161,630
	事務・文化	24,880	174,175		2,655	7,015	21,350	9,920	10,155	4,515	4,485		259,150
	雑費	42,695	28,961	38,612	10,410	65,535	34,019	3,575	7,198	9,470	4,350		244,825
	合計	253,205	274,271	51,952	45,230	107,380	301,471	373,257	455,163	339,585	17,845	12,070	2,231,669



# 馬 匹

相 川 宗 殿

去る三月二十一日、田崎兄（四十七年度主将、獣医学部卒業）が札幌を去られるに当り、現役部員に対して自馬繋養に関する獣医学的諸注意を講義の形で残して下さったので、その時の内容ここに取り上げてみたいと思ひます。在札中田崎兄には獣医として並々ならぬ御努力、御指導に与りこの紙面を借りて改めて御礼の言葉を述べさせていただきます。

さてその時の講義の内容をみますと、外科的なものと同内科的のものに分けられますが、外科的なものにウエイトが置かれておりましたからこれから述べることにします。

○外科的な諸注意

まず患部の症状については

1. 赤くなること
2. 熱感
3. 疼痛
4. 機能障害……跛行
5. 腫瘍

のおおよそ五つのことについて注意する。これに対して診断の方法としては

- イ 視診…… 跛行とか負重の具合をみる等
- ロ 触診…… 熱感、疼痛（蹄であれば検蹄器の使用、関節であ

れば上げたり下げたり、伸縮したり、ねじったりして調べる等）

ハ 探診…… 刺傷と思われものが傷口から鉗子の様なものの中を探ってみると、案外中に空洞の様なものがあり刺傷ではなかつたりする等

と三つの診断の方法がある。要するに現役部員としてできることは、1と5のことに注意し、イ・ロの診断方法によりある程度の診断及び治療をする（ハの探診となると技術のないものではできないであろうからやらぬ方がよい）。そして治療の方法がわからないとか、手におえないものの場合には早目に獣医に連れて行って診断治療してもらおう。そこで日常しばしば遭遇すること余りよくわかっていないことは四の機能障害による跛行である（よくわかっていないというのは北大馬術部においては少なくともそうであるという意味である）。よって跛行診断の基本についておまかに述べてみる。

跛行には大きく分けて支柱跛（支跛）、懸垂跛（懸跛）、混合跛（混跛）と三つあるが、これらは痛みのある部位によって分けられる。支跛というのは蹄に関する疾患によく認められるが、四肢の下部（前肢でいうと膝より下）の骨、関節、腱などに異状のあるときに起る。この場合負重をすることが困難であり、ためにこの様な名称があるのである。又懸跛というのは肢を上げたり前進したりする時に困難が生じる場合で、四肢の上部の筋肉などに異状のあることがほとんどである。混跛というのは前二者両方の症状を呈するものである。要するに支跛か懸跛かどちらの症状を呈するかをつきとめることが大事であつて、そのためには一応

どういふことをすればよいのかというところ、まず駐立時にどちらの肢に負重し又負重していかをみる。次に直線運動により常歩、速歩の順で運動させてみる。この時場所の選定として軟らかい地面、硬い地面、じゃり道、坂路と色々違った場所で行なうことも必要である。つまり支跛の場合をとれば、軟かい場所ではそれほど目立たないものが硬い場所となると顕著になるし、又坂路の登降においては前肢后肢の負担の違いから、前後どちらに異状があるかがわかる。又點頭運動、腰角運動というものがありこれを見ることも大事なことであるが、経験が必要なので中々むずかしい。その次に円運動を行うことが重要である。即ち円周運動においては内側の肢は負重に、外側の肢は運歩に直線運動におけるよりも多くの努力を要する。

その特殊な跛行として、飛節内腫跛行及び種子骨跛行などあるが、前者は飛節内腫という骨瘤による跛行であるから、その特徴的なこととして運動をしてゆくうちに跛行の度合が弱くなってゆくことである。又その診断の方法として飛節を一分ぐらい曲げておいて放すと同時に速歩をさせ正常速歩となるかならぬかを見る。しかしこれ軽症のものではなかなかわかりにくいものである。又種子骨跛行は種子骨の位置からして、球節の沈下に注意してよく。

以上ざっと跛行について述べましたが、田崎兄が強調していたことは、跛行しているのが分かるというのは常日頃から正常な馬の歩様をみて、それが頭に焼きついていて初めてできる事であって、それが無ければいくら話を聞いても分からないということであり、その他一般外傷、骨瘤、腱炎など主な外科的疾患につ

いても触れられその治療方法（原因の除去や消毒、冷す、暖める等）の解説もありましたがここでは省略させていただきます。

内科的な注意というのは、これは実際目では見られないものでありますから、その目安として飼食状態、水の飲み具合、体温、体重などにいつも気を配っている必要があることとあります。要するにこの田崎兄の講義から得られた教訓としては、外科的にも内科的にも馬の異状に気が行くには、常日頃の馬の正常な状態を知ることが必要であり絶対条件であり、ともすると情性に流れ易い日常生活の中で、人馬共に健康であることの喜びを再認識してゆくことが必要なのではないだろうかと思っております。

最後に薬品のことについても触れられたので、それも少し述べますと、マーキエロこれは水溶性で消毒及び傷口の乾燥の効果あり肉のより上がり促進する効果があり、ヨーチンは劇及び希があり普通は希ヨーチンを使用、消毒効果は大で、永く塗り続けることは不可、又マーキエロとヨーチンの併用は不可、ヨーチンからマーキエロに変える場合及びその逆の場合には一日位おいてから変えるとのこととあります。又、リパノール（アクリノール）とヨーチンとの併用も不可とのこととあります。湿布液としてブロー、イ氏は液はミョウバン十グラムと酢酸鉛二十グラムを水五百ccから二千ccに溶く、又患部に傷のある場合には使用不可、冷す時は徹底的に冷し三日間位続け、もし効き目のない場合には別の方法を考えるとのこととあります。最も冷湿布中で一番経済的で効果があるのは流水によるものであるうとのこととあります。

# 記 録

江 口 州 志

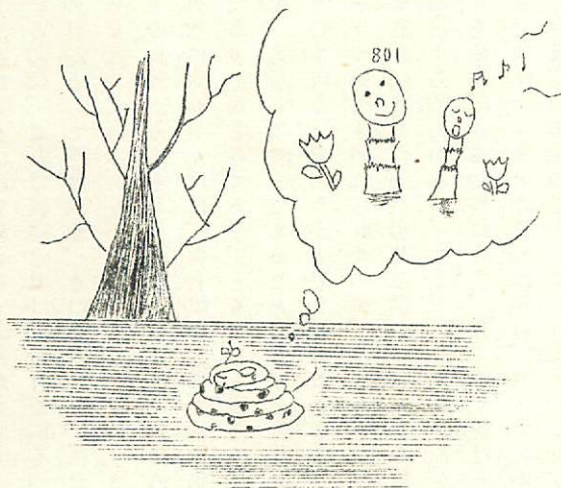
部の役職にはいろいろあります。その中で、重要性はさほど認識されていないのではないのでしょうか。多少、不満はありますが、それでもかまわないと思っております。しかし、部に対しては能動的に、大きな影響を与えていきたいと思えます。又、そのように努力すべきでしょう。

一つ一つあげればきりがありません。部の戦績、それに限らず試合における詳細な部分の記録は、あとにきつと役に立つ時があるはずでです。それは、上級生になればなるほどわかるでしょう。これは、ほんの一部で、まだまだいろいろな事があります。もっと重要な事もあります。しかし、それは部にとって認識されぬほど部の生活に入り込んでいると考えられます。

どの部にも記録という役職があります。それほど必要とされているのでしょうか。その仕事の内容はどれも違ってきます。又、かなり似かよった所もあるでしょう。しかし、馬術部としての特色を出していきたいと思えます。それほど、この仕事には自負があるし、これからの抱負もあります。

現在、部には種々の馬術書、馬の管理書があります。これを、もっと多くしていきたいと思えます。それを部員に活用してもらって、記録としても最大限協力するつもりでいます。さらに、馬術書に限らず、OB、現役部員の部生活の記録も数多く残し、部

員にとって有意義な部生活であったと思わせることも一つの抱負  
と言えるかもしれません。



昭和48年度 戦績及び行事報告

◎ 対帯大定期戦 S47 3/18 於 北大馬場

シニア  
北大勝ち  
ジュニア  
畜大勝ち

◎ 半沢記念馬術大会 S48 5/5 於 北大馬場

小障

本村洋文	北武	1位
水野豊香	北秀	2位
松井亮	スターライト	4位
添田昌一	北隼	失権
柴沼俊	ノースクイン	失権

バルクール・ド・ジャス

景山博文	北秀	1位
北同 半沢道郎	北武	失権
岡田光夫	北隼	失権

中障

南部孝一	北隼	2位
景山博文	北秀	失権
吉野勝之	北武	失権
江口州志	ノースクイン	失権
北同 小野忠	ノースクイン	失権

◎ 対酪農大定期戦 S48 5/20 於 酪農大

小障

柴沼俊	北武	1位
江口州志	北勇	4位
尾崎康弘	北勇	5位
相川宗厳	北秀	

複合

吉野勝之	北武	1位
景山博文	北秀	失権
	北隼	棄権

中障

吉野勝之	北武	1位
景山博文	北秀	失權
	北隼	棄權

◎ 北海道馬術大会 348. 6/30~7/1 於 北大馬場

複合

南部孝一	千里馬	失權
江口州志	北隼	"
景山博文	北秀	"
則近彰	北隼	7位

小障

尾崎弘康	千里馬	3位
添田昌一	北勇	6位
相川宗嚴	千里馬	4位
柴沼俊	北勇	9位
本村洋文	北秀	失權
水野豊香	北隼	棄權
北大同松井亮	スターライト	5位
半沢道郎	北秀	失權

中障

則近彰	北隼	6位
南部孝一	千里馬	5位
景山博文	北秀	棄權

◎ 北日本学生馬術大会 8/3~7 於 帯畜大

中障害

則近彰	北隼	6位
南部孝一	千里馬	失權
吉野勝之	北武	"
江口州志	北勇	"

総合

則近彰	北隼	6位
南部孝一	千里馬	12位
吉野勝之	北武	失權
景山博文	北秀	失權

B障害 (新人、新馬 障害)

荒川 尚也	北 勇	5 位
水野 豊香	北 秀	7 位
則近 彰	スターライト	2 位
南部 孝一	リヒト	11 位
相川 宗厳	疾風	8 位
若松 光子	北 武	12 位

◎ 北海道馬術大会 9/1 ~ 9/2 於 札幌競馬場  
複合

南部 孝一	千里馬	7 位
北同 加藤 正昭	北 武	5 位
松井 亮	スターライト	4 位

小障

阿部 一哉	千里馬	3 位
阪上 泉	北 勇	失権
景山 博文	北 秀	失権

六段

南部 孝一	リヒト	失権
北同 鎌田 正人		減点 8

中障害

則近 彰	北 隼	6 位
南部 孝一	千里馬	7 位
北同 加藤 正昭	北 武	失権
鎌田 正人	ジューリー	失権

◎ 道内親善馬術大会 10/7 於 岩見沢

小障害

景山 博文	北 秀号	失権
水野 豊香	"	"
尾崎 弘康	北 勇号	棄権
添田 昌一	スターライト	棄権

中障害

北同 松井 亮	スターライト	1 位
則近 彰	北 隼	

- 4月 1~8 合宿(新2年目対象)  
 13~19 新入生講習会  
 28 新歓コンパ
- 5月 5 半沢先生御退官記念馬術大会(於 北大)  
 13 遠乗会(十銭浜)  
 20 対酪農学園大学定期戦(於 酪大 第10回)
- 6月 9.10 北大祭  
 16.17 草刈大会  
 30~7/1 北海道自馬馬術大会(於 北大)
- 7月 15~21 3,4年目青草合宿・1年目日高合宿  
 23~ 帯広遠征 ~8/8
- 8月 3~7 北日本学生馬術大会(於 帯畜大)
- 9月 1.2 北海道馬術大会兼国体予選(於 礼競)  
 4~8 2.3年目合宿  
 22 役員交代コンパ  
 26~30 1.3年目合宿
- 10月 1 役員交代  
 7 岩見沢大会(於 岩競)
- 11月 全日本学生三大競技(於 馬事公苑)  
 23 部内競技会
- 12月 26 忘年会
- 1月 2 初のり  
 8~12 強化練習  
 26 新年会
- 3月 2.3 対帯畜大定期戦(於 帯畜大 但、酪農大も参加)  
 10 追い出しコンパ

## 各馬調教報告

### 北隼号騎乗を通して

則 近 彰

僕が西村さんから引継いだ時、何かせにゃいかんと思つたが、しかし何をすりゃあ……であつた。北隼の見かけによらぬ性質のおだやかなことと素直なところがフルに活かされた調教士台の上既に立っていたからである。O氏に『西村君の成功した調教を恐れては何もできず。次第に自分の馬にしてゆけばよい。』と言われて、僕は救われる思いであつた。

昭和四十七年の秋、全日学から帰つたばかりの北隼は、元気が良かつた。僕が全日学から帰つた時より、頭頸具合は元気の所以もあつて少々高かつた。悍威ある馬が、そのエネルギーを内に秘めてグイと落ちついた伸展せる首つきを示す時へそませしめねばならないことは言うまでもないが、初めて真の頭頸伸展の意味があると思うが、このことが後々、北隼の元気の有無のパロメータになつたのである。当時殊に気になることが一つあつた。それは生来のものと、競馬調教の爲の両方からくる、無骨なる速歩の様であつた。往々、我部馬が殆どそうであるように、馬の肩が

動かない速歩なのである。冬のある日、鎌田さんが騎乗された折その飛ぶが如く跳ねるが如き北隼の速歩をみてこれが一つの目標だと思つた。最後まで速歩に關して頭を悩ませられ又、これも馬のその日の健康状態、運動状態、精神状態を知る一つのパロメータになつていた。

ある事について、相手との時間や気持ちに隔りがあれば違つた表現形式があるべきだと思ひ、法然や親鸞の新興仏教に於ける表現形式の何と的を得ているかに驚くばかりなのであるが、自分としては所詮無理なことでボヤキに終始せざるを得ないと感ずる。

(秋から冬へ)

停止、駐立の動揺。これは主に馬の精神的安定度と關係あるように思われこのことを頻りに繰り返し馬の心に自分の心を強引に了解させようとする。何秒間の停止でも、騎手はあせり勝ちになるがじつとたえる。自分の性格の再発見と矯正である。馬に教えられるとはここにもあるのか？と思つたりする。落ちついた停止の完成は、たつた一つの事柄であるがこれに付随して他の動揺もだんだんなくなる。後退の際の焦り。これも前のことと同様馬の精神性に由来するもの。がまん、ゆっくり確実にしかも目のあたりによくなることを感得しつつ。又それよりも常に先にゆく自分の感覺的理想像を抱いて。

外乗、速歩になりがちになり、馬なりにまかせまいとするとはミを嫌がつて頭をあげる。速歩運歩の低さを感じる。跳ぶが如くを目指す。雪が積もつてからは時間的に障碍飛越を減らし速歩中心のいわゆる基礎訓練をやろうと計画。雪深い処を選んで歩くことにする。ここで注意を要するのは時たま馬が寝ころぶ気配を示



すことであつた。グラウンド・農場・サクに注意して朝まだき中央  
ローン（但し冬のみ。雪がないとここでは必ずポロを落とす。）  
の登降。反撞の大きいこと。四肢、肩を中心とする全身運動・肺  
心訓練と冬の馴致騎手の感覚療成等々、唯馬腹までつかる雪の中  
で走り廻るだけだから下級生の練習にとつても大いに役立つ云々  
練習が終われば首をうなだれて、全身から湯気をホカホカ立てて  
一息ついたという眼付である。続ける。時にグラウンド横で障碍  
練習。雪に肢をとられたりすべったりでバランスと踏切をまちが  
えるも、騎手は予期せぬ動きに慣れてゆく。馬も転ぶまいと神経  
を使っているのがわかる。後に全日学でのぬかるみの急回転で多  
くの馬の転ぶ中を、転びそうになりながら自身で立てなおつたバ  
ランス養成に役立ったこともあつたのではなからうか。

馬場では、円運動を中心に左右の回転の軟化と、押え手綱と外  
方脚に対して内方脚の強い支えの常歩による頭頸固めを目指す。  
前者に関して、後肢が外側上クロスする程でないと意味がなく、  
又その時の拳が硬化しがちになるし、それに加えて前進させる脚  
作用があるそかになるが、それは騎手が下手なことであり直すべ  
きことと努める。脚で前進させられないならば、相互的な拳はも  
う少しゆるめてやらねばならないはずであるが、僕はゆるめたり  
留めたりで次第に自分の脚と拳の中で動き得るようにならした。  
後者について、逆鞭の使用は一つのキッカケに過ぎなく、一たん  
試合でどうにもこうにもならなくなる頭頸なら逆鞭使つた意味は  
まるでない。練習中のほんの瞬間に於けるまに合ませの意味しか  
ない。有機的に拳や脚がそのキッカケを生かしてやらねばならな  
い。僕は試合の為に、拳の位置と手綱の張り具合とで頭頸位置固

定のキッカケを作ろうとした。試合上に於ける興奮状態の因には、  
馬の精神性が大きく影響しているのであるが、それを含めて外か  
らも一つの矯正を企てようとしたのである。そして幾分キ甲の中  
心部寄りに拳を構え、少々ゆるみ手綱で円運動を特に速歩で為す。  
この時高い頭を下げるのに拳を外からみえる程下げたりするのは、  
前述の単発的ツケヤキバの逆鞭使用と全くかわりはしないので、  
なるべく使わないようにする。なるべくというのは使わないとい  
うのではない。タイミング良い脚の使用によって、例えば右回転  
なら先ず右手綱に馬口を依らしめ、その瞬間右をほんのちよつと  
ゆるめ外方手綱に依らしめ、それを持続させ、その時間をなるべく  
長くするように努めた。というのも右回転の時右手綱が主動機  
になり易いのであるから馬口の右は非常に敏感におかねばな  
らず、又柱々右回転だと右ばかり手綱を引っぱつておくという騎  
手の無意識の操作によって、馬口が硬くなるということを意識的  
に無くそうと考へたからであつた。馬口が硬いと試合上で必ず苦  
勞する。ミューゼラーも読んだりが説明が実に明細で当を得  
ているのに驚くばかりであるが、僕の（あくまでも僕ひとりの）  
感じ方からでは、大ざっぱに言つて、通常地上を歩いている時単  
純に感ずる運動感覚の逆を考へることがうまくゆくことが多か  
たのである。冬、殆んどそういつたことに終始する。

（春）

手首折る。半沢盃大会の前日、それまでのやつてきたことが水  
の泡とまでゆかないも矢張自分に腹が立つ。南部君騎乗して出場。  
北半にとつてみれば今期最初のみとまりある試合。幾分ゆるやか  
なハミ受でうまい随伴。落下あるもスムーズな誘導と馬の落ちつ

きに、南部君の技両を多少羨みながら、まずまず順調と自負の念を抱く。南部君に後でいろいろ聞く。あとは落下がある。

その後半月対駱駝。騎手は良いものを、馬、左前肢球節部化膿跛行ひとし。この時以來ひさ以下の傷はどんな小さなものでも細心の注意必要と胆に命ず。以後マイシンゾルの効現あらたかであり、ひとかたならぬ世話になる。これにて再度のくやし涙流す。未だ彼と組んでの晴れの舞台は踏めず。この前後より調教審査の

為の練習を本格的に為す。矢張円を中心に。北軍に於ける、斜横歩の効用を考える。馬を外見上、斜めに歩かせることが最終目的でなく、そう為さしめると学生分際で考えている時、往々にとっている馬の肩や腰が騎手の手からすっぽ抜けたかっこうは、今の北軍には全くといっていい程意味がない。殊に走行中の右回転の腰振り、停止に於ける動揺同様、精神的共同作業にならんと考え、自分の感覚の焦点を肩と腰の抜け具合に合わす。その頃より外方脚の極度の流れが自分でも目立つようになる。冬に鎌田さんより教授されたその時の外見上の理想を頭に描きつつ為す。往々、前進意欲をそぐことになり勝ちな自分の脚のタイミングの全体に於ける不分離をなけきつつ感覚だけ妙に焦る。前肢旋回に於ても然り。蓋し、その運動があらゆる運動を有機的につなげた意味あるものならばよいが、よく単一的なものになりがちであるまいか。

駢歩発進の合図。僕の場合は、手前の前方より気持ち全体をゆかせ、丁度歌舞伎役者が、腰を落としてツツとすべるように歩む感じで、むしろ内方の脚で合図した。駢歩は案外反対でも持続できたのでこれを固定させることに熱中したが、この時騎手

は常に手前を気にしているのだということ馬に分らせねばならなかった。練習時の障碍飛越の走行中では非常に迷いがあつた。というのは、左手前の駢歩では右回転が非常に悪くなる。ところが左手前発進をしておいてから右回転をやると馬は、ほっておくとかかって右手前になる。障碍走行だから手前を気にすることはない。といって合図の後の逆運動では調教審査の時でも馬が何のこともわからんようになるのではないかと考えた末、一飛越後に、大ざっぱにいて手前変換をするので、右手前で飛越した後右回転するという、馬自身に換えてもらってしかもその弱点を直すという方法にした。繰り返し反覆。確実に。

唯、前述の速歩と、それから又それへの移行時のデタラメさがあつた。ある程度出れば後は速歩一つだから脚と拳のタイミングがあえば何とか肩をも動かし得るのであるが、第一歩目がかんじん要なのである。馬体全体のバランスのとれた伸暢速歩ができれば、ある程度その騎手の伎両はあると鎌田さんに言われたが、馬体各部を一番使う速歩がうまくできることは、調教過程に於て非常に重要であると思つた。何故ならば他の歩法に較べて馬は体の各部をまんべんなく、ゆるむことなく使うし、騎手はその間微妙な変化を感じようとすれば極めて奥深いし、又特に拳と脚のバランスがうまく為されねばならないからである。従つて馬の運動課目を果たすことと、馬の騎手への精神的協調度といったようなものを解らうとするには、まんべんなくこれを試してみることであると思つた。そしてこれなる速歩を試すことは、次の段階を考ふる基盤になつた。その日の速歩の中に何か欠けていたり徹底さが為されていなくたり精神的に馬がひとり勝手だったりするのを

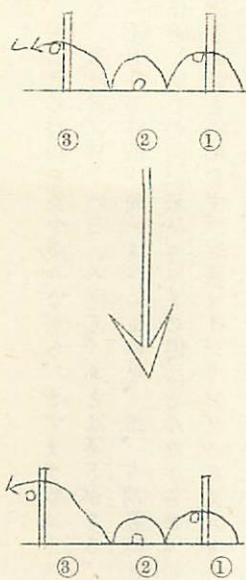
感じるのである。そうになるとその為の基礎訓練とでも言い得ることを考えねばならなかった。それが常歩停止駐立であつたり、駈歩と常歩の交換だつたり……で速歩で悪いから速歩でなおすというだけでなかつた。要するに北軍にとって速歩は致命的欠点であつた為に尚更速歩の効果と又騎手の自覚(馬の状態並びに自身自身の技術への)の上に非常に役立ったのである。馬への印象づけの効果の多少は馬の苦楽に相關するといふ論であるが但し苦痛を与えることわ目的とする野蛮な方法ではないと思ひ。

六月三十日道自馬大会。

右回転で右肩の内奥の筋肉ねんざ状態になる。跋行。自虐的となる。田崎兄春田兄に注射してもらふ。押して出場。ところが馬場内に入ると全くその気なし。しごく快調。北軍の男らしさ(？)を感じた次第。

(夏)

北軍の飛越の欠点である踏切の近さは、前肢のひきつけの弱さ同様バー落下につながるかと考えたので何やかやと工夫してみた。踏切点にバーを置くとするのは馬の足の運びの調整に役立つがそんなに有効でなかつたと思ひ。可能にしても覚える時間とその固定が長い。障碍二個とバー一個による組み合わせを例えばつくる。



③の障碍を飛越する際の踏切を様々に変えて馬自身に歩巾の調整と踏切の延長を企てさせた。(簡単な例で恥ずかしいが……) ②と③が極端に長すぎたり、急に長くしたりするともう一步入つてしまふ。最大の関心事は踏切点を普通の飛越時に於て長目にする事なのであるからある程度騎手の作用が必要であると考えた。調子良く障碍に向かつていき一步入るか入らないかの時で、拳と馬口にある緊張がある時、脚の合図によってその一步を入らずに踏切るといふことを誰しも経験で感じたことがあると思ひが、そのことを消極的な面と作為とで以てその幾分長い踏切を固定しようとした。

バー障碍ではこの踏切固定は以前より為されたと思つたが、箱固定障碍に於て、未だ一步入る状態だつた。最後の試合でまさまざと現われた。

(北日学予選まで)

調教という具体的事実 自身の思惑や性格との主観的カントウに頭は、主幹を離れ枝葉へ移っていくような焦立ちを感じていた。例えば人馬が共同してやる為には、先ず人が馬に何かを為さねばならない。その上で馬がそれを了解するようになっていくが、その過程で一つの運動課題をこなし得る力量の有無、多少によって調教の度合がはかられねばならない。馬の力量以上のいわゆる突飛なことは、マイナスである。しかし調教者は意識的に現段階より先を見越して為す術をもっていないなければならぬ。どこまで先が為され得るか？ 今また何程のことか為されているか？ 疑問であつた。

又、運動部の一存立要件たる試合に於ける勝敗は、日頃の(方

法や理念や考えや行為等による)打ち込み方から来る単なる結果として受け取るべきであろうが、当事者は、それこそが目的であるということはどうしても頭の大部分で考えざるを得ない程自分自身への自分自身による激励と、刺激と、苦悩を含む掟として持つておるはずだ。結果至上主義に陥ることはないが、逆に、過程のみを重視してその結果を軽く見ることは、又甘えなのかもしれなく。

北日学前、根拠が不明であった為に焦立ちはつのである一方だった。馬の監視と、注意との極度の神経過敏が、自分の立場や他の部員への迷惑を考えた上でとる態度の中に押し殺され、馬匹諸君に胸くそ悪い沈うつ感を与えたと思う。そうでなくとも本質的に神経質なのに……。大体試合前の選手たるや、何やら知れぬ焦立ちがあるのであるが、馬匹諸君への希望としては、その焦立ちをわかれノというのではないのである。日頃と同じように、少しばかり骨を折ってやる事を単にやることとしてかたづけられるのが何よりの慰めになるのである。当時は、それでも、手際よく、黙々と成馬と馬の世話をしてくれる馬匹諸君に、大変感謝していた。自分の顔はとてもじゃないがブスッとしたままであったろうが……。正に生念場であった。後の全日堂はこの日の再演出であった。

## 北 秀 号

### デコのこと

景 山 博 文

僕が入学したとき北秀はクラブの中で一番若い馬でした。今では部馬の中で一番の古顔です。今年で十歳、すっかり貴祿もつき、馬場へ放してやるとボス振りを発揮し、純真な羊蹄、ふてぶてしい千里馬、センで、もとオトコのはずなのに憶病でダメな北勇等を従えて悠然としています。でもやはり乙女なのでしょうか、オトコの北隼がパドックに出ていると、ときどきそちらへ大きくてデンとしたお尻を向け、腰をひねっておっほを左右にせわしげに振り「ドォ？」と期待に満ちたそのくせ不安な目付きでオズオズと北隼を誘ってみたりしています。でも北隼はボケーとたるそうに首をうなだれてボンヤリと満腹しゲップが出そうな表情でデコのお尻を眺めるばかり。ところがスケベで好色な千里馬がほんの気まぐれからパドックに媚を送ると眠そうに眼をトロンとさせていた北隼はもうパドックに行ったり来たり、目を真ッ赤に充血させ鼻をブービーならしいたく興奮の程、千里馬白く「パッカみたい」とお尻を振って悠然とその場から離れていきます。何のことはない、北隼はからかわれたのです。彼は頭を高く上げ、まだ血走った目でその姿を追い無念愕然の表情、ややしばらくしてやっと思いなおし、自らをなくさめているのか口すさびに柵をまたか

リカリと一生けん命かじり始めます。

そんな欲求不満なデコですから馬場内では他の馬につらくあたり、為に北勇なぞ齒形の生キズが絶えません。が、非力を彼はひたすら耐えております。食事のときなど自分の飼桶の燕麦だけ喰い終るとすぐに耳を伏せ首を低くして羊蹄の飼桶に突進、憮然とした表情の羊蹄はそのまわりでワロウロ、ややあって残っている北秀の飼桶を見つけれやれやれと喰い始めると「コラノそれはオラの飼桶ダベノ」とデコ猛然と怒り羊蹄のお尻をガブリ。

斯様に忌憚なく、デコは中年女のいやらしさを發揮しております。

××××××××××××××××××××××××

さてふざけた文章はこれくらいにして、昨年一年間、主に北秀に乗った者として、その騎乗報告を記さねばならないわけですが、どうも筆が進みません。簡単に記します。

則近兄から引き継いでしばらくすると障碍に突進するようになり、また踏み切りが近くなり、きれいな飛越弾道を描くことが少なくなりました。回転時、肩から逃げる、障碍前でまさに飛ぶという瞬間左に逃げるなどのクセも顕著になってきました。これらは騎手の脚力不足の所以だと反省しています。騎手が上手になろうと焦って機械的に障碍飛越を繰り返したり、また外乗などで馬をノンビリさせてやることも少なかつたように思います。

試合においては入場すると大層興奮し硬直し、騎手も馬が突走るので手綱にぶら下がってしまい、障碍で切られるのを恐れ、手綱を引っ張ったりという状態でした。デコにあやまりたいと思います。

デコちゃんよ、まだまだ若くて丈夫なんだからいじけないで試合に、下級生の練習にこれからも頑張ってくれよな。

#### 当番日誌より

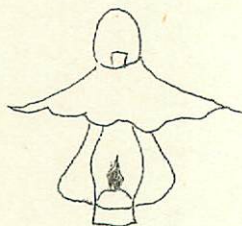
10月8日(月) 夕方、吉野さんが、赤いチリトリを持って馬場

を走っていた。

ブッチもいっしょに走っていた。

ブッチは元気になった。

ブッチはかみつかないとかわいいのになあ。



## 吉野勝之

北武号に騎り始めてはや一年であります。実にいろんな事がありました。試合の経過に沿って書いていきたいと思ひます。

今は大分スマートになりましたがとにかく良く肥えた馬で、なかなか、馬というよりは牛にまたがった様な感じだった。重くて重くて障碍を飛ぶのかと思ひましたが、三月の畜大との定期戦の際には、シニア戦で無事満点でゴールした。手入れの時などは、かんだり蹴ったり大暴れだが、本当の根は素直な馬だ。その頃すでに気がついていたが、障碍前でバタバタとつまる癖があり、これでは中障碍の大きいものや連続障碍の大きいものは難しいと思つた。これはひとつには障碍前で焦らせる事が一因だろうし、もつと根本的には、口と拳との関係がまずく、ハミに突っかかった状態で運動を続けていた事が主因だろう。なめらかでソフトな拳とそのハミをなめらかにソフトに受ける口。そしてそのハミ口を押し出す所の、強力なる脚が必要なのである。四月中頃から馬事公苑の講習会に参加し、むこうで下半身の力を抜く事を覚えて帰礼し、翌日五月五日さっそく半沢先生御退官記念馬術大会の中障碍に出場したが騎坐姿を起こし惨敗した。五月二十日には対酪農大定期戦があり、それには複合と中障碍に出場した。複合の馬場については反対駆歩、アピユイエなどいい加減な所があったにもかかわらず、定期戦という事で採点がかなり甘く、障碍を満点で

ゴールした結果一位になった。中障碍については、驟・バンケットなど前月馴致したとはいえ不安の多い箇所があったが結局最終障碍で一拒止・一落の末ゴールしこれも一位だった。最終障碍は一三〇の斜三段でこんな大きなものを飛越するのは始めてだった。ただ終始必死になつて脚を使っていただけで、馬を興奮させその勢いで飛んで行った様なものだった。しかし、うれしい事には北武で小障碍に出た柴沼君がこれまた一位だったので。三種目とも北武号で制覇し、団体優勝と、三コの毛ブラシを獲得できたのである。その後しばらくして右前の肩に異状をきたし、一月余りも休ませなければならなくなった。この際、ちょうど札幌競馬場へ来ていらした春田先輩にはいろいろとお世話になりました。そして六月の道自馬大会の出場は見合わせる事にした。八月十二日、十六日北日本学生が帯広で行なわれ、中障碍と総合に出場したがともに失権。中障碍は乾燥平行高さ一〇〇巾一三〇であった。

総合の馬場では中クラスの成績で、野外騎乗は落馬をしてしまった。それでも余力に賭けたのだが、走行ストップのベルを聞き洩らし、結局乾燥バーでの馴致失権を取られた。無念だった。九月には道体が札幌競馬場で行なわれ、加藤さんが騎って出場された。中障碍では失権したものの、複合では見事五位に入賞された。その後しばらくして、今度は左前肢の端に熱が出、三日三晩、水のみ場で冷やし続けたが、切蹄の末跛行はなくなり一ヶ月余りの休養の後練習を始めた。その間岩見沢乗馬クラブ開設記念馬術大会があったがこの出場も見合わせた。激動、激投の後、突如として故郷が出るので今年には馬体管理に留意したい。春と秋の季節の変わ

り目が危ない様を気がする。今後の北武の課題は柔らかい口の確立であり、騎り手として、柔軟な栄養成のため努力したいと思う。

さあ、これだけ書けば義理は果たせただろう。部報委員殿よ。

これから先は書きたい放題の事を書かせてもらいまっさ。これより先は、北武号に調教してもらった僕の「己れ自身の調教報告」だ。

自然馬術の理想として掲げられている「コンタクト」とは愛馬精神の別名ではないだろうか。馬をいたわり、いとおしむ気持ちがある。逆にならぬのは自然馬術の奥儀を極める事は出来ないのではないか。伊式を極めようとする者は、毎日毎日、自省の繰り返しではないだろうか。試合に勝るとガツガツしているだけではダメな様である。もっとリラックスして馬と戯しい中にも楽しい生活を送らなければ。リッターワの論文の中に「タバコに火をつけよ」という文章がよく出てくるのは、このあたりの事ではない。しかし馬場の中で、馬と人間がギスギスし始めた時、それを実行したとしたらどうなるだろう。例えば部班の最中、どうも馬も人間もハッチャキになりすぎて、余裕が無くなったと判断する。「さあ全員並歩にしてタバコを吸え」と言い、全員が吸い始めたとしたらどうなるだろう。馬鹿が顔を見合せて、ヘラヘラ笑い出すのが落ちだろう。精神的にも技術的にも未熟な者が、リラックスしようとしても、出来る訳はなく、ダレルのが落ちだ。リラックスする事と、ダレル事とは違うので、この辺がヘタクソな人間の陥りやすい穴だろう。我々の近辺にはどうしてこの様に、似て非なる事象が多いのだろうか。だから馬鹿はいつまでたってもホンモノをつかむ事が出来ないのだろうか。馬鹿でも熱意のある人間はまだ救われるのだが、馬鹿で熱意

の無い人間は、どこへ行っても、何をしても救い様が無いだろう。馬術というものはやればやる程奥が深い。まさにライディング、イズ、フィロソフィなのである。打ち込めば打ち込む程に、得る物は大い。馬鹿な奴に言っても判る訳は無いので、馬鹿な奴は、なんだ馬術なんてこの程度のものなのかと思つて途中でやめてしまふのである。世の中に馬鹿程、救い難いものは無いので、馬鹿は死ななまや治らないのである。小生、若干ハミに突っかかり気味の様です。失礼してここでタバコを一服。

伊式の調教が単なる理論のみ知つてもうまく行かないのは、それが単なる理論じゃないからだろう。理論というものは、そんなものなにも知れないが、例えば、札幌オリンピックを熱狂させたあのジャネット・リンと、優勝したシューバ選手を比較してみればよく判る。あの規定において、正確無比な図形を描くシューバの自由演技を見たか。どこがどうと言う事は無く、なんとなく軽快な印象を受けない。ところがあの自由演技では世界一といわれるジャネット・リンのスケートはまさに、華麗、軽快、優雅、大胆かつ繊細。あの華麗さ軽快さはどこから生まれたのだろうか。要するに訓練形態等々というより、心の奥底から溢れ出したものなのである。しかし彼女は規定はあまりうまくこなさない。あの優雅さ、華麗さはある図形の中に閉じ込める事の出来ないものなのである。我々は馬をジャネット・リンの様にしようというのである。まさに、おおらかに、大胆に育てようというのである。我々の目指すのは人馬一体では無く、天地人馬一体なのである。だから例えば逆鞭ひとつの使い方にしても、もっと考えなければならぬのである。あれは馬の頭を打ちたたたく物ではないの

である。頭を下げなさいよ、その方が楽なんですよと教えてやるものなのである。本當に何故こりも似て非なるものが氾濫するのであろうか。ジャネット・リンにしたって、血の気の通わない鞭でもって、もつと足をたかくあげるとか、手をもつと大胆にもつと楽しそうに動かせとか教育されたら、あんなに華麗な舞いを演じる事は出来ないだろう。要は鞭にしろ、拍車にしろ、手綱にしろ、血が通ってなければならぬという事である。しかし、かく言ひ僕も馬にまたがると、目じりは吊りあがり、頬はこわばり思うにまかせないのである。四年間でお互い、頬に微笑みをもって馬に騎れる様になりたいたいもんだ。が、馬鹿はニタニタする事がホホエミだと思ひから処置がない。あーお先真暗。

馬の純粹なる魂は騎っている人間の人格を投影する鏡である。馬はその調教者の性格によく類似してくる様だ。目つき顔つき体つきまで似てくるのではないか。その意味でも、ある人の馬術技術を詳細に分解・分析するのもいいが、タマネギの皮をむいていたら最後になにも残らなかつたのを事にならない様にしなければ。むしろその人の人格に直接に接し、ガバッと大づかみにしてしまふ事の方が重要だろう。その人の馬に対する接し方、例えば、手入れの時に馬をどつき倒したり、怒鳴り倒したりしているか。それとも鼻唄まじりにさも楽しそうに馬とたわむれているか、そういう事が實際へミ受けなどの技術として現れているのであるから。その際、馬に対して厳しいと言ふ事と、冷酷であるという事は違うのであるから、そういう似て非なるものを誤またず判断しないといけないだろうが。さあ自分の性格を馬が反映するんですよ。油断もスキもないよ。毎日自省のくり返しですよ。

イタリー方式なんて、別に難しく考える事は無いんで、要するに馴致するという事と、馬の運動を肉体的に束縛するなという事の二本だけなのだ。驚く事、狂奔する事を知らないのではないかと思ひ程、大胆な馬を作るのである。そのために馴致馴致の繰り返して、あらゆる物、あらゆる場所に慣らすのである。そして運動の際には、肉体的自由を保証してやるのだ。騎っている人間がこうしてやろう、ああしてやろうと馬をいじくり回さない事だ。馬の脳ミソの容積を見た事あるか。あの巨体に脳ミソはわづか両手のひらにすっぽり納まる程しかないのだ。騎手のいろんな要求を馬はへミと騎坐からしか伝達されないのだ。その信号を、悪い頭でなんとか解そうと馬は必死なのだ。その信号が人によってまちまちであったり、同一人物でも場所と時が異なると信号の出し方が異つたりすると馬ならずとも混乱するだろう。混乱は狂奔に通じ、拒止に反抗にと発展する。人間でも一度に多くの要求をされると頭が混乱しなにかわからなくなり、人によっては怒り出したり泣きだしたり、怒鳴り散らしたりするのではないか。馬は人間よりかなり馬鹿なのである。プーよ許せ。僕は今御前の代弁をしてやっているのだ。新入生を馬に騎せた時の事を考えてみる。ああしろ、こうしろと下から指図されて、なんとかやっではいるものの自分で今何をやっているのかわかっていないのである。馬よりも脳ミソの多い人間でさえ、ちょっと興奮するとなにかなんだかわからなくなるのだ。馬だったらなおさらだ。興奮させない様にしていかに、そして要求は簡単に適確にする事である。馬場馬術家は馬を自分の意のままに動かしているつもりだろうが、實際馬がすべてを了解してそうしているのかどうかは



疑わしい。いや、僕は馬場馬術を知らないから、ただそう思うだけの話だが。とにかくあおしてやろう、こうしてやろうと馬をいじくり回さない事である。馬はガキのオモチャじゃないんだ。ヘタクソなガキがインテリぶって、エラそうな能書きを並べるな。ちゅうんじゃ。朝に夕に、僕は北武号にそう言われるのである。

北大馬術部が日本一の馬術部になる方法は簡単なんです。まずやる気のない奴は全員やめる事でしようなあ。例え最後の一人とすなわつたとしても学生馬術界における自然馬術の先駆者たらんとする熱き情熱をもってすれば向かう所敵無しだろう。別に馬術に限らず大学には他にいくらでもクラブがあるのだ。自分の体質に合ったものを選ばにゃあ。しかし、もし自分は運動神経の鈍い方だと思つたら馬術部を選ぶ事だろう。馬術に運動神経の鋭敏さはあまり関係ないのだ。自分の周りを見てみる、「鈍さの権化」の様なのがデカイ面して馬にまたがっているから。馬術を選ぶ限りは、たつた一度の人生のたつた一度の青春をこれにぶっつけなければいけないでしょう。大学生活四年間でできる事など、たかが知れているのである。それだけにこの青春時代における素晴らしき天からの授かり物である所の、燃えあがる様な情熱を、酒に、バチンコに麻雀にブスブスブスと不完全燃焼させておく事はもったいないのです。僕も残り少ない青春の事を思うと少々、焦り気味の様であります。情熱、情熱、燃えあがる情熱。それから次に必要なのは「ひとつの頭」だろう。頭が二つも三つもあるのは混乱のもとだ。あるひとつの頭が生み出す完璧なプログラムが必要だろう。そしてそのプログラムをよく理解し、現場でよく指図実行できる所の現場監督が必要だろう。これが同一人物ならなおさらい

いが。それはちょうど建設現場における、建築技師と現場監督の様なもの、現場監督は信望厚く現場における状況把握の適確なる人で、事故のない様に心を配ったり又労働者一人一人に密着した人物でなければならぬ様に。もちろん優秀なる、ひとつの頭と優秀なる現場監督だけではダメで、それを支えるものは、各人の創意工夫だろう。本当に日本一になるなんて簡単な事なんて、やらないから出来ないだけの話である。さあ、この事を知っているがら何もしようとしない僕に天罰のくだる日は近い。しかし↑↓もしも、馬術をやっていく事に熱き情熱を抱く事が出来たなら、そつと僕に耳打ちをして下さい。待っています。

前号の部報で調教報告を書いてから、一年が過ぎてしまいました。再び、北勇号の事を書けたことを喜びであると共に、小生に對する部員諸兄の寛容に感謝します。

当初、北勇号に騎乗し初めた頃は、全国大会での活躍を夢見てあれもやる、これもやるかと考え、がむしゃらに乗ってきたように思います。そして、それから一年、北勇号と試合に出た事もありましたが、その多くは良い結果がえられませんでした。騎手の気負い過ぎがあつたのでしょう。その度に、おのれの非を反省することをなしに、その責任のすべてを馬に押しつけてきたような気がします。それはちょうど、初心者が悍馬に乗って、馬がかつてに暴走し、騎手がただ青い顔をしてすがりつくが如く。そして、これは馬が悪いのだと初心者がこぼすが如く。馬にとっては迷惑だつたでしよう。今、北勇号に對してとてもすまないと思つています。

でも、一年過ぎました。再び調教報告を書くことによつて、新たな決意がわいて来ました。もう一度、基本に戻つて、否、それより原点に戻つてと言つた方が良いでしょう、やってみたいと思つています。具体的を事はいろいろあります。

北勇号にとって不足していることをしつこく、根気強く、何度も何度もくり返すこと。馴致がなされてないといつたら、馴致を

やる。左手前の駆歩がへただつたら、それをくり返しくり返しく行つた。今までは、左手前が悪いとすぐに右手前をやってしまいがちでした。さらに、馬の調子が良いと思つたら、人間がすぐに安心しきつてしまつて、馬に對して何ら新しい要求を課さなかつた。そればかりか、馬の欠点をみすごしてきてしまいました。そして失敗するといふ結果です。やはり、緊張が必要です。

上げればきりがありません。これ以上はただの羅列となつてしまいます。しかし、一つだけ言つておきたい事があります。それは余裕をもつて馬に乗ることです。人が興奮したり、変に考えすぎると、馬の気持ちを読み取ることがまったく無となります。馬の気持ちを大切にしたい。そして、人馬一体の妙技をきわめたいと思つています。やれるかどうかはわかりません。でも、やってみたいと思つています。

いろいろ書いてきましたが、思つている事をすべて書きました。あとは、馬上で馬を良くすることを考へて乗つていきたいと思つています。きっと人馬とも何かを得るでしよう。今、期待で胸が一杯になつています。

#### 当番日誌より

5月1日(火) 馬房がきれいになりました。お馬さんたちもうれしそうです。

昨年の一〇月から二ヶ月間、骨による跛行の為、馬房に入ればなしてあった為、小生が引き継いで騎乗しはじめたのが、二月の半ば頃からでした。何せ二ヶ月も馬房に入れっぱなしであったので、馬がボケたというか、鈍くなったというか、駆歩でもある一定速度以上は出ず、まるで、安全運転をしている車に乗ったようなものでした。足元がまだ不安でありましたので、障碍は全くやらす、速歩での巻乗り、半巻き、前肢旋回ばかりを、一日に二五分位と、恵庭寮裏の草地で、駆歩を五、一〇分位のみをやりました。まるでスタミナとスピードがなく、他馬と比較して焦燥感にかられた毎日でした。以前の駆歩でヒッカケル程の威勢の良さを取りもどそうと、心はアセルばかりですが、如何ともしようがなく、毎日が足元と相談ししいの泣きたいような日々でした。年が明けて、二月の初めから、ようやく六〇〜八〇cm位の単一を駆歩で通過しはじめ、一日に一〇個〜一五個位、それと駆歩を五〜六分行ないました。三月の畜大との定期戦に、他馬より障碍を一段下げて使用しましたが、相川、添田両君ともヒッカケられて突っ走ってしまいました。障碍を逃げたりはせず、とにかく飛ぶことは飛びますが、猛スピードで走りまわったという感じでした。ただ、畜大の石川君は流石に上手であり、要所をきちんと締めて経路を回ったのは、感服するばかりでした。技術の差を

感じました。このころからようやく調子が出てきたというのか、少し程度を上げて、一〇〇〜一一〇cm位の単一や平行も入れましたが、三月の合宿で、少し無理が出たのか、今度は、左前肢に骨窟が出てしまいました。また、一ヶ月近く休ませるハメになりました。安易に馬に無理強いをしたことが悔やまれてなりません。この為、酪農大定期戦など使用出来ず、六月の道自馬大会ぶっつけるハメになりました。今年から、畜大も参加し、否応なしに頭張らざるを得ませんでした。馬の調子もよく、大体一二〇cmまでは、人馬の状態はどうであれ、全然距止もなく、練習時に一四〇cm程の斜三段などもなんとか飛び、これならば、と顔には出しました。見ましたが、心中、秘かに期するところはありました。複合と中障とにエントリーをしました。第一日目の複合でも調教審査でメッタヤタラと走りまわり、あげくの果て、場外失権のうき目を見てしまいました。一年振りの試合でもあり、又、他馬を怖がり、準備運動もろくに出来ず、騎り手の未熟さと相まって、アッという間に飛び出してしまいました。午後の障碍でオープン出場させてもらい、なんとか二落下でゴールをし、二日目の中障に期するところとなりました。この日は馬も少し慣れたのか、相変わらず他馬を怖がり、準備運動中も他馬が側に来ると逃げ出す有様でしたが、なんとかかまともに運動が出来、入場の運びとなりました。千里馬君、スタートするや、ものすごく前進氣勢を示し、小生は押えるのにせいいっぱい。脚も何もあったものではありません。障碍に向けると、グッと出てゆき、首をいっばいに伸ばし、ピョンピョン飛越してゆきました。H一一〇cm・W一五〇cmの平行と、一二〇cmの垂直で、それぞれ落下しましたが、あとは見事に通過

し、二落下と四秒のタイムオーバーでゴールしました。この試合に於て、千里馬の欠点と良い点がすべて出た気がします。

欠点①準備運動中に他馬を怖がり、とくに、相手の馬が走っても飛んで逃げようとします。できるだけ他馬から離れてこちらへ向かって来たりしますと、二〇cm位離れていて準備運動をした方がよいでしょう。

②障碍飛越後、すごい勢いで突っ走ること。

小生は、この後、飛越したら停止させることを繰り返しました。練習中はこれでもうまくゆくようになりましたが、試合ではまだ充分ではありません。

③拍車に反抗すること。とにかく拍車を入れると、ピョンピョンはねるのです。調教審査のとき、とくにこのことが出ます。

④右回転がスムーズにゆかないこと。これは口向きよりも、馬自身、右駆歩がニガテな点に問題があるようです。どんなに小さな円を右回りでやっても、千里馬君はケロリとして左駆歩でやりのけてしまうのですから。右駆歩を発進する為に、左の拍車を入れ、右のアブミに全体重をかけるようにして、右回転をしつつ、何度も行ないました。時にはサーカスマがいに、右に体をかたむけ、鞍からはみだして馬のバランスをくずすようにして行ないました。今では、こんなアホみたいなのをしなくても割と出せるようになったとは思いますが、どうか、ていねいにくり返して下さい。

良い点①性質はおとなしいが、試合になると、気合が入るとい

か、ヤル気になって来ること。

②障碍の尊重と、飛越技巧のたくみさ。

その他、口では表わせない点に、この馬の良さ、可愛さが沢山あります。

この道自馬のあと、北日本学生、道大会と出場しましたが、北日本学生でのステイブルの第二障碍の濠パンケットに埋まってしまい、一度下馬して、馬を無理矢理ぬかみから引きたくおすようにして出し、再度走行し、ゴールしたことなど、このとき程、この馬を愛しく思ったことはありません。このただ一度の不運の為、全日本出場は出来ず、残念でなりません。前任の横山兄から引き継ぎ、自分なりに一年間頑張ったつもりではあったが、所詮自己満足を得る程にしかやれなかったのではないかと反省しています。

我々は、たかだか、四年間の技術で試合に臨まねばならず、その為、試合場では騎手の精神力と、それに何よりも、馬との日ごろのつながりが大きく物をいうように思われます。技術の未熟なもの、試合に於て少しでも良い成績をあげようと思うならば、馬と仲良くなるしかないのではないだろうか。と考へ、学生の特長である、暇を大いに利用して、できるだけ馬と接するように努めたつもりではあります。結果は御存知のとおりであります。しかしです。後輩諸君にこれだけはやってもらいたいです。よ。三時間バチンコをやり、麻雀をやる暇があったら、そのうち一時間は曳馬や青草を喰わせに行つて下さい。出来るだけ馬の側に居るようになって下さい。強いといわれる他大学の結果や現象面のみをみないで、彼らがそこにいたったまでの努力、い

や、もっと身近な、栄えある成績を残された先輩方のその努力の跡をじっくりと考えてみてほしいのです。自分達の不足している点が、よくわかってくると思います。自己満足は進歩を止めます。他人は自分以上に努力しています。苦勞しています。四年間を終ってやっとこのことに気がつきました。遅すぎました。

景山君をはじめ、四年目の諸君に一言。

我々旧四年目は、様々なきさつから二人になりました。それ故、諸君にも多大なる負担をかけましたが、二人故に、腹を割って話し合ふことが出来ました。諸君は四人います。どうぞ、英知を出し合つて、部をより高い目標へ向かつて引っぱって下さい。一つの決定事項が思いもかけない波風を巻き起こすことがあります。それ故、慎重に、かつ学生の特権を大いに利用して大胆に部員を引っぱって下さい。自信のない決定は、下級生に沈滞を引きおこします。鉄面皮といわれる位にやして下さい。しかしです。エ、礼儀だけは失わないで欲しいんですよ。小栗コーチの件、一体どうなったのか、誰も知らないんですよ。どういうことですか。これは。葉書一枚も出さないとは、笑われますよ。おしまいに小生の罵声と皮肉にもかかわらず、千里馬の世話を一生懸命にやってくれたW嬢に感謝しております。どうもありがとうございます。

## リヒト号調教報告

江口州志

リヒト号が我が部に来て、早や、二年目の春を迎えました。馬術部に入観した時が一二才ですから、もう明け一四才になります。昨年の状態は、かなり、調子も良さそうで、調教もうまく進んでいたようです。しかし、秋ごろから、体調をくずしてしまい、体がやせ細るばかりでした。さらに追突をやつて、今年の一月、二月は休ませる状態が続きました。すべて、人間の責任で馬をこのような状態に落とし入れたのを反省しております。

そこで、まず馬の体調を整えようと考え、運動量は軽くして、かつ全身を使う運動を考え、飼料も多くやることにしました。この努力が効を奏したのか、あるいは馬の気分が変わったのか、春になって、馬の筋肉もつき始め、毛並みもつやが出るようになりました。この調子なら、なんとか馬の体調を昨年のレベルまで戻す所が、右前肢の間で、傷口はふさがりましたが、骨瘤を作ってしまった。足の方はベストとは言えません。

これから、本格的な調教を始めるのですが、なにぶん、馬の体調を考えながらやっています。そして、昨年の冬のよるな状態はもう作るまいと心に留めております。これからは馬の自久力もつけなければならぬし、いろいろやる事がいっぱいです。でも、それをていねいに、克服してゆかなければならぬでしょう。

彼の手入れを初めてもう半年になるつきあいである。去年の夏に入厩した時には、いかにもみすぼらしく、どここの馬の骨(？)とも思われる有様であった。

だが今では近い将来必ず北大馬術部のエースになるだろうと思えるほどりっぱになった。彼に僕の感じた事を思うままに書く。

まず思うのは、すなおであるということ。新馬ということもあるのかもしれないが、何に対してもすなおである。だがこれはほっておいても持続するものではないと思う。やはりいやがることもたくさんある。その時、彼のことを考えて、時間をかけることが必要。手入れの時、水のみ台の上へ絶対に上らなかつたのであるが、後ずさりしようとしたら横へ向けてまた横から向かうという風に何度も何度も試みてやっといかせたことがある。それ以来全然いやがらなくなつた。初めてのことで僕も驚ろいたが、彼は知らないものでためらっていただけなのである。

次に人の感情には敏感であること。いかにもポケットとした風なのだが、僕がうわついている時など手入れはものすごくいやがる。人間に冷静であることを要求する馬である。この時などどっちがうわつかわからなくなる。競争馬であつたことなどみじんも見せない(？)超越しているのだろうか？

次に索き馬がむずかしいこと、外を歩く時は、すぐに驚ろき、

はねまわる、立ち上がったたりもする、カッコはイイが恐ろしい。こういう時は背中に乗るとおとなしい。人が乗っていた方が安心するらしい。驚ろいてはねずに鼻をならしてじっと見つめているのだ。朝の索馬の時、歩くのがおそいからといって鞭でたたくと極端にきらう。たくさん歩かせることが有効だと思ふ。

次に大事なことは、蹄の形が悪く、内側が立っているため、蹄が伸びると内側に負担がかかり、跛行することがある。早めに改蹄することが大事である。

最後に思うこと。彼のことを考え、思つてやればやるほど、それに答えてくれる馬である。

当番日誌より

5月24日(木)      ザッ      ザッ      ザッ(草刈りの音)  
                               ワシ      ワシ      ワシ(馬が草を食う音)  
                               ザッ      ザッ      ザッ……………  
                               ワシ      ワシ      ザッ……………

## 尾崎弘康

部内では、なんとなく皆から敬遠されがちな馬です。カムイから落ちたことのない者は、馬術部員ではないと言われるほど、ほとんど大抵の人がカムイで落馬の経験があります。それに曳馬の時、厩舎へ帰ってくるまでに、必ず何回かは飛びはねられることになっていきます。そんな訳で、特に一年生からは非常に恐れられていました。

性質は、どちらかと言うと鈍い方で、手入れの時など、腹に金ブラシをかけても何も感じないのかおとなしくしているので楽だったので、最近少しうるさくなりかけてきています。手入れをしていて蹴られたことのある人はいないようです。手入れをする時の動作も、如何にもめんどうくさそうに、足をゆっくりと持ち上げるので、逃げる時間は十分にあります。自分で反対側の足をふんづけあわててみたり、幅の小さな溝をじっくり観察しながら、ようやく渡ったと思ったら後肢を落としてしまったり、ドジのカムイと言われる由縁です。

朝は、背中までポロまみれになりながら、当番がそばへ行っても何くわぬ顔で横になってる事もあります。ひどい時には、顔じゅう、目のまわりから、鼻から口のそばに至るまで、ポロがこびりついていることもあるのですからたまったものではありませ

カムイの自慢できる事は、四肢とも骨密がないということです。今まで骨瘤のなかった馬の何頭かが現在出来てしまっているという事を考えると、カムイは先天的に骨瘤の出来にくい馬なのかも知れません。カムイは、以前から左回転で跛行するのですが、左肩が悪いということで、別にそれが悪化するわけでもないので普通に練習に使っています。しかし僕が思うのは左肩ではなく右肩のような気がします。蹄跡だけを見ると左後肢のふみ込みは、時には数十櫃も右後肢より悪いのですが、馬の動きを良く見ると、左後肢ではなく右前肢が左前肢よりも前へ出ていない事が分かります。その為、特に左回転では外側になる右前肢は、左前肢以上に前へ出なくてはならないのに、それができない為、跛行となって現われてくるのだと思います。しかし、前にも書きましたように、悪化する徴候は見えませんが、気にしてもしかたのない事なので、そのままにしてあります。

よく怪我をする馬です。ので、早期発見、治療を心していかなくてはならないと思います。

## 当番日誌より

9月10日(月) 雨の中。農道で草刈り。みんなビショビショ。

西村 正二郎

二千mのダートコースを疾走するサラブレッドも重労働には違いない。然し車道の片隅をうつむいて重い荷を引くペルシユロンの方がずっと哀れを誘う。なだらかにうちなびく日高の丘陵で草を喰む軽種よりも、天塩の山狭の些かばかりの草原で氷雨に濡れて佇立する重種の方に遙かに心ひかれる。実際彼等は個性溢るる実にイイ顔をしている。軽種の顔は端正にすぎる。ひがみたくなる程に整っている。それにひきかえ重種の顔は何とも把みどころなくヌーボーとしており、又時として瘦せたソクラテスよりもっと瞑想的である。華大の脳髓に透谷ばりの思想をバンドラの函の如くに詰め込んで、盲目なる世眼を盲目なる儘に睨ましめて一人心を高くして世俗を睥睨して居るの感がある。書類上アングロアラブなる種に属するくだんの疾風君は（正に書類上だけであって実は偽登録とか何とか、彼の過去は木枯紋次郎と同程度に定かでない）どう云う訳かこの手の間伸びした哲学者の顔を有して居るのです。然し乍ら、よし人は彼の小さな鼻腔を厭い、利発を感じさせぬ輝きに乏しい眼に落胆し、全体としてしまりのない顔に感心せずとも——これは数ヶ月前の僕の心情に外ならぬのたが——僕は知っている。彼の意志はトーマス・マン語る所の聖セバステイアンにも比すべき高雅な自制——生物学的衰弱を最後の瞬間まで世人の眼から隠しおこせようとする高雅な自制に満たされてい

ることを。そう、彼は数々の肉体的苦痛を摺々と甘受してきたし、もって生れた貧弱なる肉体と薄弱なる運命を良しと認めた。皮相の言葉を持たぬが故に、それは恰もナザレの人の、運命をあるが儘に認めたその高貴さすら感じさせる。

能書きが饒舌にすぎた。不熱心な日誌を参照に、彼の四歳時の運命の系譜を振り返って見よう。

1月〜3月

1/20 速歩、駢歩信じられぬ位歩度が伸びない。ある点を境に押せども引けども、鞭で叩こうが全く伸びない。馬であることの片鱗すら垣間見せてくれぬ。

この頃が彼への騎り始め。とにかく動かなかった。動かせなかつた。常歩からして小歩を刻み、駢歩は僅かに首肯出来る様なものをしてくれる。緊張とは云い難い。軽い程度の興奮のせいであろうか。ひっかける程の興奮は絶無。然しこの調子を馬場の中に持ち込めない。一旦馬場に戻ると馬が変ったようにのらりくり。鞭を持って曳いても同様。情なくも、常歩は今に至る迄この調子である。

4月〜6月上旬

そんなことをし乍らも拍車でこづいているうちに、速歩、駢歩は幾分前になるようになった。尤も左駢歩は非常に出てくかったが。と同時に色々な損徴も目立って来た。左前肢骨瘤、常歩時の右後肢跛行、歯の抜け変り。

4/13

獣医に連れて行く。白く、右後肢跛行——右臀筋削瘦、右前肢跛行——右側鎖骨乳突筋炎。両方とも治療の施し方がないそりで、たまにたまに騎れとのこと。



そんな訳で四月下旬は運動らしい運動はしていない。馬休に等しい。

5/8 獣医病理の山極さんの診断によると神経がイカレテ居るそうなの。

然しその簡単に断じられても、虞や虞や汝を奈何せん / やたら注射を射つたのもこの頃——副腎皮質ホルモン剤ブレドニゾロン、サルコン注等々。が、いともたやすく重大な宣告を申し渡された割には、将来に光明が見えるような日もあった。一喜一憂の日々。速歩は良くなったが、駆歩と飛越が全く駄目。強引に頭頸を下げさせるべく折り返しをつける。然しこれは両刃の剣。頭頸を下げた駆歩のきっかけは把めたが、常歩で巻き込むことも教えた。前進氣勢乏しい馬には仲々考えもの。

5/25 先天的にどこかおかしい(常歩跛行、飛越等)。全くの若馬で未だ筋肉が出来ていない為だ。日々この思いのドウドウ巡り。仕方がないから強いて後者だと思いつつも、ハイセイコーの後軀の蹴りはもの凄くそうだが、疾風はこの後軀の蹴りが全く感ぜられぬ。これも筋肉の未発達のためだろうか。然らばこの訓練に何をすればよいか、諸々の速歩運動、氣勢飛越でなく後軀で立ち上がる様な飛越常歩飛越(然しこれをやるには前進氣勢が乏しすぎる)、速歩飛越、連続した兎跳び、常歩での不整地殊に坂道の登降騎乗、それに根拠なく漠然と思うのたが歩度をつらた駆歩。一朝一夕にはダビデの様な肉体は、疾風には具備されぬであらう。一年、二年、単調な dody building が彼を馬にするが………しないか。若さだよトキヤン。

6月の前半は所用で騎れず。この間、つなぎの腫れとか右後肢跛行とかで馬休か常歩のみ。阪上が随分苦勞している。

9/21 獣医で右後肢飛節肉腫との診断。酒井先生云はれる所の特效薬を塗布して、6月一杯馬休。

7月、8月上旬  
まあまあ順調な季節。唯だ飛越は全て不可。踏切が安定せず、大方近すぎる。頭頸を全く使わない。極端なバスキュールを描かせるべく、一・五m位に間歩を揃えた四・五本の地上横木の端に出来る丈少なく置いて置いた一m程度の単一を速歩通過するのだが、確かに頭頸は使いが近い踏切を教える様なもので、結果的には良くなかった。これはもっと踏切の安定した馬に、時々試すべきものであろうか。低い幅障りがある程度のスピードで飛ぶこともしたが、いざ障り前になると頭が高くなり、力が斜上方に抜けるような感じでこれも上手くないかなかった。そんな訳で、飛び方に関しては不信の塊り、赤面の至りではあったが、8月の北日本学生(於帯畜)に連れて行くと云うので、厚顔無恥を顧みず小障りに参加。この割りの悪い騎手の役は相川が蒙ってくれた。結果としては平素の調教その儘に、全くギコチなく踏切りの安定しない飛越であった。殊に前半がひどかった。思うに、飛越走行にはバチンコ同様、やはりリズムが必要である。だから騎手としては馬のペースに巻き込まれることなくこのリズムを把むには、競技場裡に於ける第一障り、第二障りは、親の敵にも似る怨念もて推進し、尊者への礼にも勝る柔軟な前傾で随伴してやらねばなるまい。新馬の場合は殊更に。環境に恵まれた畜大にいたせいか、肉体的にはこの頃が最高潮。

右後肢の跛行もほとんど気にならず。

8月下旬〜9月

一冊の本の些か数頁の御蔭で疾風の飛越が随分改善されたと思  
っているのだが、傍から見れば如何とや見む。スタインクラウス  
の Riding And Jumping の一章 The Foundatio-  
ons for Jumping がそれである。キャバレッティ及び連  
続障礙を使つての馬の飛越技巧の演練・獲得がその目的とする所  
である。詳細は拙い訳文を見て貰つた方が早い、自分なりに要  
約すれば、中障程度のダブル及びトリブルの短い方の距離はあ  
だに一間歩をはさんで、トリブルの長い方の距離及び六段等は間  
に二間歩をはさむ丈で飛越すべきだ、と云う意味のことと、キャ  
バレッティのアレンジの仕方が書いてある。斯くすれば、馬に、  
助走の安定化、正確な踏切り、精神的冷静、肉体的機敏を付与で  
きる。とはリッターワーが別の本(「馬の調教」大阪の伊藤さんの  
訳による)の中で述べている。勿論、両者とも飛越に關してはこ  
れで充分だ杯とは決して云っていないが、もっと北大にとり入れ  
られても良い考え方であろう。少くとも現状より以上の成果は、  
スタインクラウスが保証してくれるだろう。

とにかくこの演習は半月ばかりで、幾分なりとも疾風に大きな飛  
越をもたらしただ様に思う。半月と云うのは、9月の上旬、一一〇  
か一二〇の単一を前肢でひっかけ馬転、右膝を捻挫してそこで途  
絶したから。そして、右膝の腫れがひいた頃左頸に射つた消炎剤  
が化膿して、結局9月は馬休。

10月〜11月

膝と頸の故障が癒えたこの頃が、乗馬疾風君としては絶好潮の

時。前進氣勢のある大きな速歩を見せてくれた。彼は正に馬だと  
思った。彼の可能性は、浅薄なる善人の洞察力では窺知し得べか  
らざる領域にある。我々の観察眼の埒外にある、と思つた。この  
頃の飛越練習としては、先のスタインクラウスの方法と並行して  
個々には、レンジ、平行を多く飛んでゐた。一二〇位までなら、  
ある程度幅があつても何とか飛んでくれる。然し滑らかさとい  
う点では先ず落第。飛越と云うより。何とか越えろと云う部類だ  
ろ。それでもやはり、順風満帆を一時期であつたことは確かであ  
る。

12月〜現今

その得意な時期も隣の間、またぞろ例の右後肢跛行、とは何と  
情ない乗馬感覚。この跛行は右後肢だけにやるものではなかつた。  
8月の末に既にあつた左前肢管骨瘤の再発である。8月の時点で  
は、熱も感じられず痛がりもせずケンからも遠い処であつたので、  
ほとんど高をくくつていた。今にして再発しよう杯とは思わな  
かつた。一週間ばかり休ませたら、曳く限りでは跛行しないが相変  
らず痛がる。田崎君や小池先生に相談したら、だましました騎る  
よりも今なら治る見込みもあり焼烙した。熱はあるが腫れも次第  
にひいて、今の処(一月四日)経過は順調である。

これから

回転は大體問題ないと思う。曲がりなりにも一m程度の障礙な  
ら、越えて(飛越に非ず)ゆけるようになった。然し、本末転倒  
とは思ふが、肝心を扶助教育は何一つ満足には出来ていない。そ  
もそも扶助教育と云う大それた概念は自分にはなく、唯だ前肢旋  
回が機敏に出来、斜横歩が滑らかに行われるならば、扶助教育に

類することは障礙馬にはそれで事足れり、と信じているのであるが、それが誇れる程には出来て居らぬ。要するに、側方運動はこれからの課題の一つである。

伊式ではスピードを出した時には、以前に増して馬口との連繫は強くなる。さもなければ、大きな飛越弾道は描けない。これは北軍で試合に行った時、佐伯さんに注意されたことである。小栗さんにも、もっとスピードを以て飛ぶ様に再三云われた。これが未だに出来ない。スピードを出すと頭が上がり口との連繫が軽くなる。寧ろ障礙前で一担控え気味にして歩度を落した方が、後駆に力が感じられて飛びもイイように思う。これは理想を外れて居る。

これではイカンのである。にもかかわらず何ら具体的展望はない。常歩の改善についてもさらさら解らない。背中を、体を使って歩かねばならぬことは事実である。疾風は足さきだけで歩いている。遅くても、ゆっくり歩かせることに気を付けているのだが。

杉山さんが柏勝でやられる常歩が何故疾風に出来ないか……

まだまだ問題はあるだろうし、これからも出て来るだろう。然し、それが疾風の可能性を潰えさせることにはならない。いや、そうした貧困とそれ加ふる無名と若さこそが、彼の将来の飛躍を約束してくれてはいないか——毛沢東はそう保証してくれないだろうか？

部員諸兄の奮気を期すのみ。

末尾乍ら

田崎君には、「こりゃもう駄目だよ」と云い乍らも親身になつて治療して貰ったり、高い薬を都合して貰ったり、色々と面倒を掛けました。潑ぐべき愛情の対称を異性に見出し得ぬ反動(??)

を、神かけてトキカゼ大切と慈しむてくれたのは坂上です。

疾風が今生きて居るのは、全く二人の御蔭です。

むなしき空にくれなるに立ちのぼる

火炎のごとくわれ生きむとす

疾風

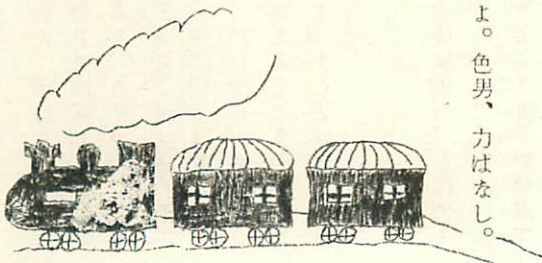
一月四日

当番日誌より

6月2日(土)

本日、午後一時半より、部内ソフトボール大会。関東勢に分かれて試合を行なう。関東勢の勝利。(9対6)

あつたりめえよ。色男、力はなし。



まえがき

羊蹄号の調教報告を書くにあたって、調教日誌的な内容で書く事が出来なくて、この一年間の大きっぱな経過を述べるに留まつた事必らずしも要求通りの内容とできなかつた点あやまつておきます。

## 羊蹄号との一年間

前号の部報において報告後の経過について述べます。

三月下旬まで馬場の使える間は五〇〜六〇センチの低いものを通過する事と駈歩で歩度が安定する様に遅いスピードで馬場を大きく使って走っていた。勝手にスピードを速めてくる事が多く、その度に馬口を引っぱってしまった。拳を控え様とすると却って重ってくる仕末であったから輪乗りに入って速歩にしていた。障害飛越については速歩飛越の少ない割に駈歩での飛越が多かった。駈歩運動にまだ不馴れだったのか飛越に際しては精神的に不安定な様子で、速歩で十分通過できそうに思えた障害においても時折逃げようかな、と云った態度がみえ逃がさない操作を必要とした。駈歩飛越については、もう少し時間をとつた方が良かったのでは

なかりうかと反省している。雪が消える頃には落ち着いて外を歩く事にも馴れ、馴致の効果がでてきた。羊蹄は外を歩き始めた頃すぐ好奇心が強くて、自分の方からどんどん色んな物件に近づいてゆき、びっくりしたり、ごみ箱の中を荒したりで変てこな奴だなあという印象が残っている。街乗中には恐怖させる様なことを絶対に避けた方が良かった。だから意識して何かに馴らそうとはせず嫌がりそうなものを初めから避ける様に物静かに歩いた。時として避けてゆけない状況に陥つた場合へこの様な状況にならない方が良いのだが、でも騎手の要求を馬に判る様に示しつつ強引さを避け静かに待つて居ると必らず切り抜ける事ができた。調教を進めてゆくことに何故か苛立ちと焦りを感じつつ毎日騎乗を続けなくてはならなかつたのが、この時期で一番辛かつた。夏頃には現役の誰かが乗って小障害くらいの経路を帰って来れる程度にしておかなくては、と云つたムードが何か自分を追いつた原因となつていたのである。小栗コーチからは「急がずに、のんびりやれ」と何度も注意を受けておりましたが仲々落ち着けなかつた。羊蹄は簡単な障害のコースを回れる様になつてはいたが、部馬として練習に使ってゆけるかについては、まだまだ種々の運動を軽快にこなす事ができずにいたから部班運動での簡単な要求に応じることのできる様にしておきたいと思つてはいた。五月になり、酪農大での定期戦にオープンで出場した。初めての試合というところで不安をかくせなかつたが、練習中での経路回りの延長だと気楽に考えて出場する事にした。試合内容から考えてみると、試合前の調教状態を適確に把握できなかつた未熟さを大いに反省させられる。第二笹箱で一拒、第三ダブルのりで二拒、失権。試合後

の卒直な印象は「早すぎた。連続障害物に全く不馴れであった。脚に対してどんだん前進してゆく氣勢がなかった。」といった事。新馬が最初の試合でゴールを切れなかった責任を安易に考えてはならないと思う時、部員諸兄に弁解の余地は全くなかった。後日に備えるためには試合内容を検討し失敗の原因を今後の訓練において克服してゆかねばならず停滞している事は許されなかった。障害飛越訓練は障害馴致訓練である事。高さ・巾・障害の形状、組み合わせ等いつも気を払う事。変化をもたせる事で人と馬の集中力を養えない、どの様な障害物に出会っても精神的にゆとりをもって、これを突破してゆける様に普段から訓練しておかなくてはだめなのである。精神的緊張状態に長く耐えられないうちは馬の方が少しづつ馴れてゆける様を工夫を騎手の側で考えておかないかと思つた。あちらこちらで草が伸び始めた頃から恵地寮の裏や野球場のぐるりの草地を選んで乗る時間を多くとる様に努める。僕等の場合、総合馬・障害馬をつくりあげようと努力しているのだから場所的に可能であれば野外を走り回つたら効果があるだろうと単純に考えたからだ。学校構内は年を追う毎に建物立が混んできているから、めっきり草地が減ってしまったけれども、また野球場の辺は野原が残っていてうまく利用すれば小規模ながらも騎乗できそうだ。起伏地を駆け回っているだけでも飛越馬の訓練になるのだから馬場における集中的な訓練(合理的な障害訓練)と合わせてやれば結構、苦勞少なくて総合馬をつくり上げる事ができるのではないかと考え、始める事にした。草地には空ビン空カンの類が落ちていて蹄を痛める恐れがあったので索き馬で草を喰わせに行った機会によく調べておいた。簡単なコースを

一度決めてから、コースの中を皆で整備すれば誰でも安心して使用できて素晴らしいと思うのだけれど諸兄や如何？ グランドの土手や溝を除いては平坦なので小さな固定障害物を四々五箇所に設けた方が更に好都合で効果も期待できる。すぐにコースの設置は無理だったから倒れた自然木や電柱などを最大限に利用していた。外で遭遇した障害物にはかなり注意を払う。草地ではとにかく伸び伸び走り走らそうと思つていたから体の疲勞と肢の故障に特に注意した。初めは体力をつけてゆくつもりで運動量を控え週二回を予定し、馴歩の持続時間を短かくとり、走り終えた後はそのままプラブラ外を歩いてから馬場に戻る事にしていた。運動中に危険を予測できる様な状況が起らない限り丁寧に、大胆に脚を使って前進意欲を促していたが、馬場内での如く勝手にグングン出てゆくうとする様子はなく緊張しながらもゆつたり大きく走って居た。初めのうちは引かかってくるのではと恐る恐る乗っていたが、その様な心配がなくなってくるにつれて緊張のうちに余裕が出てきた。いつも単騎で走っていたが出来たら蹴り合わない鈍そうな馬を集めて一緒に走つたら鈍重な馬の良い訓練にもなると思う。草地騎乗と平行して馬場では速歩の輪乗りを利用しながらハミを噛まそうとするが重り出しているのか拳に頼り始めているのかよく判らなかつた。キャパレティヤパンケット不斉地を使った運動で馬の方からハミに頼つて来させる事が出きず迷っていた。不斉地を常歩・速歩でゆくり走っているうちに口向きが出てくると教わつたのだが自分では徹底さに欠けたのか、時間が短かすぎたのか、うまくゆかなかつた。馬場内においてはハミの感じがどうだとか脚がこうだとか気にしてしまふ事が多いのだが一度草

地を駆け回って土手や溝を飛び越えてゆく時には全くといって良  
い程その様な細かいところに気を使わなくなってしまう。外を走  
っている馬の感じからすれば人の行ないうる操作は止めるか出す  
か、まがるかという単純なものしか通用しないのではなからうか。  
騎手の乗り方に見ても同じ様なことが云えるかも知れない。  
馬場の中に居ると馬のもっているダイナミックな動きを忘れてし  
まいそうになる。古今東西の馬術家と呼ばれる人達にあってはそ  
の様な事はないが僕等の場合、利用できるものは何でも利用して  
色々な角度からつくり上げよう。酪農戦がすんでからは連続した  
横木障害を多く通過したが飛び方にむらがあり大きかったり小さ  
かったり、つまる様な時が多かった。羊蹄の歩巾に合わせたも  
ので、まず馴らす事を先にやっておいた方が良かったかも知れな  
い。個々の障害については踏切をつけて飛びが小さくならない様  
にしているとき々踏切をつけなくても飛び易い。馬が飛越する際  
に干渉する事と飛越の状態を注意しながら改善しようとする事と  
は違うと思う。やはり弾道を描ける飛越の方が見ているだけ無理の  
少ないものだろう。踏切場所の判断は馬の意志によるのだけれど  
も踏切が近くて飛びにくい状態にならない工夫を日頃から注意し  
ておく必要がある。馬委せだから近かっても遠かっても良いとは  
思えない。あるテンポをもって障害に接近しながらも馬の意志で  
歩巾の調整（歩巾をつめるよりはむしろ伸ばす様な）ができる様  
にさせる訓練法について更に考えてみる必要がある。羊蹄の場合、  
踏切一つ前に後肢が着地する位置が半歩でも速のくと近くから踏  
切ってしまう歩巾の伸展で調整しようとしえない。この事はスピー  
ドとも関係あるかと思われるが馬に障害飛越意志が旺盛であるに

かかっていると思う。飛びを大きくしてゆこうとする事を通じて  
飛越意欲を発揮させる工夫をもっと考えてゆく課題が残る。馬に  
よって程度の差はあるが、いずれにしても障害馬の飛越中の姿勢  
は、背を隆起させ、頭頸は伸展低下しつつ騎手の拳を苦痛なく受  
け入れている姿が最も理想的なものに違ひはない。飛越時に限ら  
ずその様な姿を最大限に生み出すことの可能な動き（言うなれば  
自然馬術馬の動きとでも云えようか）をつくり出そうと研究努力  
するのは、僕等、自然馬術をやろうとして居る者にしてみれば当  
たり前の事なのであるが、まだまだ不十分な現状であると思われ  
る。大阪市乗馬協会の佐伯氏所有ルヴァイヤサン号の動き・飛越  
は僕等にとってこの上もない参考になると思う。大学祭の休みを  
利用して日高に居る小栗コーチに会いに行く。種馬のダイシング  
ボルガードに乗せていただいた。前にいたヤシママンナには劣る  
かも知れないが、それでも素晴らしい柔らかな動きをする馬だった。  
その晩、札幌の相川君から「羊蹄が怪我をした」という知らせが  
入る。電話だったから詳しい様子までは判らず、その後は気がか  
りて小栗さんとゆっくり話も出来ずに早々と休む。翌日の急行で  
夕方観舎に着くと羊蹄は馬房の中で痛そうな顔をしていた。怪我  
は左前肢の繋のところ、小池先生に三針ほど縫ってもらったと云  
うことであった。馬繋台につないであつた処、誰も気付かぬ内に  
張り綱に足を引っかけて金具の部分で切り込んでいたのが直接の  
原因であつた。張り綱のやり方にミスがなかったのか詳しく判らな  
かつたけれども避けようのなかつた事故とも思えない。かつて北  
飄号を事故で失なつた時の状況とは異なるにしても、事故の大半  
が不注意や気のゆるみから生じることを思う時、僕等は馬体の管

理にいくら氣を払っても過ぎる事はないだろう。馬は僕等が集團をつくっている上で、その前提になっているんだという事を何時も忘れないでおこう。僕等は上級生から馬を引き継ぎ、それを下級生に引き渡してゆく一種の義務みたいなものがあると思う。その意味でも不注意から生じた事故については、どんなに些細な事であっても語り継いで自らの戒めとしておこう。些細な事であればある程それを指摘してお互いに注意、批判するには大変勇氣のいるものだと思われる。しかし、その処は馬を大切にしてくいという心構えでもって、うまくやってくかなければならぬと思う。幸い羊蹄の事後処置が適切でありましたから約一ヶ月後には再び騎乗できるまでになりましたものの、傷のところが運動する上で気になる部分だったので獣医に残っていた田崎君とよく相談し、しばらくはブラブラしながら腿の柔軟性をとり戻せる様にした。約二週間、これといった運動をしては戻せないのに速歩で右前肢の跛行をみると、すぐに家畜病院へつれて行ったところ右前肢内側に管骨瘤の兆候を指摘される。次の日から馬休にして早速ブロー・湿布をやり始める。夕方手入れ後一時間程はホースの水をかけて冷やしていたから水不足の折、何だか気の重い毎日でありました。夜は十一時頃に肢巻を外しておき翌朝早く湿布をやり直す手順にしていたが短期効果をねらって一晩中湿布することに変更、折から大羊の部員が試合で帯広へ出かけていたので留守番役の当番と交代で消耗する日が続いた。鉄をはずして蹄内側を少し低く削ってもらっていたが八月に入っても好転する気配はみえなかった。真夏の日は肢巻きの乾きが早いため、当番の一年生も仲々大変だった事だろう。彼等と一緒にやっていると現役

時代に逆戻りした様な錯覚にとらわれる。九月の声を聞き遠征人馬が帰ってきた頃には熱も大分おさまっていたので小池先生に診てもらいに家畜病院へ行く。今年の夏は天龍山もカムイも家畜病院でお世話になりましたから僕の顔まで覚えられたんではなからうか。僕等は馬体を管理してゆく上から獣医学的な知識が必ず必要になってくる。獣医にいたる部員をよく利用して(失礼)自分達も体験的に怪我や故障の診断、簡単な治療に慣れておいた方が良いに決まっている。馬の様子がおかしかつたりしたらすぐに家畜病院の先生の診断を受けに行き、色々専門的な話もよく聞いておくは何年も居るうちには馬体の様子をよく注意できるものと思う。足繁く折有らば行った方がよい。自分でも考え病院での診断と比較して見る目を養なって欲しい。羊蹄の診断は、骨瘤が腿に触れているので跛行は続くだろうが、騎乗しても良いと云う事でしたので急激な運動と障害飛越(通過は別)はしばらく避ける事にして約二カ月ぶりにやっと騎乗できる事になった。まず常歩での停止・発進を繰り返して、拳に重なる事からなくそうと決める。重なる気配を見せた瞬間をねらって、鞭又は拍車によってピリッと刺激を与えて彼女の注意をうながした。刺激が強すぎると怖がってしまふ事があったので恐怖させずにハッとさせる様になっていると常歩からの停止は急に良くなり出し、三・四日もすると、ゆっくりとした速歩からの停止も重なる事なく出来る様になってきた。拳については威力をもつてしては却ってマイナスの効果しか出て来ないと教えられていたから相手が理解してくれるまで消極的に待っていた処・仲々良くなってゆかないしどうしたもんだらうと、あれこれ迷ってしまいました。今夏、羊蹄をはなれてカムイ号に騎乗

中、先に述べた様な事を試みたら驚くほど騎手の要求に良く答えてくれる事が判ったので早速羊蹄にも、と云う事で始めるや先の如く僕にとっては思ってもみなかった位の効果があつたものと嬉しくして仕様がなかった。騎手が自分の要求を明確に出しつつ、それを理解してもらへる様を工夫をあれこれと試る積極性が無い限り相手の方からの答えもと出せないものなんだと改めて反省させられると共に、単一扶助は単純なるが故にあくまで徹底的に矛盾なくたたき込んでやる責任を人は持たなければならぬと痛感させられた。馬が混惑する前に人が混乱しているのが実際の状況なのではなからうかと思つた。脚がはつきり使えていなかったのか速歩運動での歩度伸縮がでない。伸ばそうと脚を強く使つとスピードは増すかも知れないが歩巾は小さく歩様も乱れ軽快さと大らかに欠けてしまふ。歩巾・歩様の乱れについては急に早く走らせる様に強く脚を使い、馬の方が急いでいる状態なのかも知れないとすれば歩度伸縮の運動を長期的なものとして考え、ほんのわずかな歩度の変化の積み重ねでやっていた方がよいと思ふ。脚の馴致のためには、発進を利用して反応の度合いを高めてゆくと共に片方の脚でそれと反対側への後肢の移動を促す事で側方への脚を判らせる訓練も合わせると効果があると教えられていたので羊蹄については歩度伸縮より停止し発進を多く行ない前肢旋回も利用して脚の積極的な働かしかけをしたが時間の割にまだ軽快に反応するまでには到らず。脚については鈍ければより強く使つてゆくしかないと思われるが、あくまでも軽く済めばそれによつて越したことはないのだからそのために色々な方法を人から聞いた見たり考えたり積極的に工夫を講じてゆかないことには

壁は突き破れまい。馬がどんどん歩いてゆく時には、脚は静かに使ひながら拳との約束を確認し、少しでも歩きが鈍くなれば鬣髪を入れずピリッと刺激を与え、それでも反応が不十分とみるならば恐怖させない様に一層強く（古馬ならば段階を上げて強く）脚の積極性を維持しないと、いつまでたつても軽快に動く馬は出来にくいのではなからうか。だから脚は馬の前進意欲を発揮させるに當つて必要とみるならより強くしなないと初めのうちは判らなと思ふ。威力に頼る事が減つてゆき軽い合図がそれにとつて変るのは馬の理解度が進んでゆく度合いによるものと思ふ。頭頸の伸展は妨げてはならないが、伸展と弛感とを混同してはなるまい。馬体の伸展は運動の伸びやかさ、動きの活発さ、大らかに結びつけなければならぬもので、だらりと弛みきつた状態に陥入つてしまわぬ様に見える人の注意や感じをよく聞いてみる心掛けが大切だし乗っている感じを覚えることは更に必要となる。羊蹄はリッター方式に云えば seat collection の段階でハミの受け方を覚えて居た。巻き込み気味の時もあるが脚を強くして前に出せば拳の手強さも判る。釣り竿の糸先に錘を下げて居る感じで拳の方を持つていつて欲しいと思ふ。これまで飛越回数が少なかったので常歩・速歩飛越を多くして後駆トレーニングと踏切訓練を極めてノタノタやつて居た。春に比べると飛越や接近において大分ゆとりがみられる。春の反省を通じ、障害物に不安を感じさせない様に簡単に安心して通過できるものを情性的にやらない注意をしてのんびり飛ばしていた。妙に落ち着いているなあと気がした。山奥から引びつて来られてから随分と變つてきた理由は僕の知る処ではないが色々彼女の方でも心境の變化



があつたものと推測する。毎日毎日の練習に出ていく事は山の生活からすれば窮屈だったかも知れない。故障のため三カ月近くなびりした事が却って良い効果を与えたという事も考えられる。僕自身にしてみても、それ迄の張りつめた、出る処のない様を、不安で切つぱつまつた状態からしばらく解放されたと言うのが本音であつたのだから、彼女にしてみてもきつとそうだったに違ひなからう。新役員が決まつた時期でもあり現役との交代についてはもうしばらくこのままと云う事になりました。これからは楽しくやろうと人馬共に再出発のつもりでありました。十一月に入り、全日本学生の試合に出場していた則近君北隼号の応援に東京へ出発。総合馬術の部で十二位の成績は立派に誇つて良いものである。鏡上げのない練習で象徴される僕等の中から育つていった則近君と北隼号のコンビが馬事公苑で堂々と立派な成績をあげた事実にもっと自信を持たなくてはならない。彼等が続く部員の輩出せんことを祈つて止まない。集団的な教育馬術を行なう処に大きな意義があると思われる。日本に於ける自然馬術の考えが定着するには大きな流れ、大きな一つの力として評価を受けた時に初めて可能性が出てくるものと思う。札幌に戻つてみると羊蹄は骨瘤の部位に熱があつて休んでいた。九月の段階で跛行も止む得ないと云われていたが十月頃の様子では跛行が判らなくなつていたので田崎君に頼んでレントゲンを撮つてもらつたと、腫のまわりを被う様に骨瘤の影がうつつていた。現在も進行中なのかはよく判らないので三―四日休ませて様子を見ることにして、冷やしたり、マッサージしたり出来るだけの事をやった。骨瘤が進行中でないなら跛行覚悟で乗るつもりでいました。乗つてゆくうちに運動障

害が生じてきたら離脱も考えておかざるを得なくなつた。新キャンテンの景山君と小栗コーチにその様な相談を口に出さなければならなくなつてきて非常に責任を感じた。これまでの部員諸兄の苦勞を考へてみると自分の責任の重さを痛感させられ大きな過失を犯してしまつた様な気がなりユウツであつた。運動後はマッサージをよくやり、てきばきと運動をすませる様にして、ゆっくり歩く時間をとる様にしていると跛行がひどくなつてゆく事なく乗つて居られた。運動量を時々多くして跛行の様子をみるが変化が出てこないもので少しづつ量を増やしながら駈歩もやってみた。特に痛がったり発熱してくる事もなかつたが跛行は治らなかつた。運動内容を以前に戻し、時間を短かく切りあげる事にした。障害飛越は駈歩で飛越する様にし、時間終りに経路を必ず回つて終える様にすると一週間ぐらいのうちに随分落ちついたペースで経路を回れる自信ができた。駈歩の飛越は少し踏切が近い様を感じがするが以前よりスピードもついてきたので巾障害を飛越するにつれて大きく飛べる様になつてくるものと考えられる。ペースをゆつたりとれる様になつてきたのが特徴と云える。以前より長い目に鞭を持ち、鼻柱の先端で支えるつもりで脚は積極的に用いて居ると拳にネバリ気味の以前の感じがなくなり、スピードを勝手に速め様とする時には少し控え目の拳で更に脚をはっきり強く使つていと元の歩度に戻つて落ち着く、その際又拳を元に戻してやると次第に同じペースを守れる様になつて来た。小栗コーチの話では経路走行中の問題は無いが、もう少し飛越に意欲が感じられる様という事であつた。障害を一つ通過する度に必らず一度控える感じで情性的に突っ走る事は絶対に避けた方がよいと思

う。岡田監督と鎌田先輩が馬場に見えられた折に羊蹄の跛行をみていたのだらう、若い馬だし……鉄を外して乗ってみれば……”と云う事でした。馬場に放している動きから左前肢(骨槽は右)の方も痛そうな感じを受けたので家畜病院でみてもらおうと膝の辺の踵の端が痛がっていて熱もあることが判る。原因は判らなかつたがよくマッサージして少し冷やしてみる。踵の方は、はつきりしていたから少し休ませ様子を見る。十二月二〇日過ぎから歩いて乗る。年もおしつまって来て何となく一年が終ってしまいそうを寂しさがふつと感じられた。この一年の間に果たしてどれ程まで良くなってくれたものか、怪我と故障で何だかんだと云っているうちにもう一年たってしまった。僕等は自分の技両を高めてゆかなくてはならない時期に新馬をつくり上げてゆかなくてはならないという困難な状況に在るけれども、困難なればこそ、それを乗り越えて新たな段階へ進まんとするところに若き日の情熱を傾むけて悔い無きものと信ずる。と、こんな言い訳をしながら低迷する我、馬術部不振の責任を回避してしまひのは許されぬ事かも知れないが……。部員諸兄の中に図々しくも割り込んで居た事が、現役部員の自主的な活動を大きく妨げる結果を招いてしまった様だ。北大馬術部のO・B諸兄(自分も含め)に比べると彼等は求道者の如くみえる。

羊蹄号は幸運にも相川兄に引き継がれる事になり一安心です。順調に来たなどは恥かしくて云えないが何とか精一杯やってきました。これから先は相川兄みずから、羊蹄の中に自分を表現して欲しく思います。いつまでも可愛いがってくれ。

\* \* \*

……レキオ大慰(トレベッコ号)、ボルサレーリ中佐(クリスバ号)、ベットーニ中佐(アラディノ号)、リッチイ少佐、フォルケ中慰(カビネラ号)、フィリップポーニ大慰(ナセロ号)……北大馬術部にとって……

フェデリコ||カブリリー  
 EGGITAZIONE "NATURALE" は"幻想"だったの  
 だらうか……

当番日誌より

6月3日(日) 吐息だけが残る。私の人生はこんなものだったのか。スターライトの鼻汗に映る私のつぶらな瞳。今日も又、当番が終わった。



## スターライト調教報告に

換えて一言

松 井 亮

調教報告というテーマにそぐわぬ内容になるかも知れないが、現役諸君の今後の活躍に何らかの参考になれば結構である。

今年、目標の中障レベルまでもってきたのであるが、無論これですたわけではない。およそ新馬で反抗も知らぬうちに障害の訓練がある程度つめば、まがりなりにも中障害程度の経路をまわることには簡単である。

この状態を如何に安定させるかが重要なのであって、最初の調教者が中障までいけたら、二番目の騎手が同じ程度あるいはそれ以上のことをあせて馬に要求するということが、馬ができてゆかぬ原因の一つであろう。従って次期の調教者は一段も二段もレベルを下げて再調教してゆくくらいのつもりでやる必要がある。

毎日の練習は忍耐のくり返しであり、「馬が理解する。」のを待つのである。自分の思いどおりに反応しないからといって腹をたてて怒っては、どんな立派な馬でも前途は絶れてしまう。このような例は我々のまわりにも実に多いことはすでに承知の通りである。

逆に学生馬術ならば馬の能力はまず問題にならぬ。これは帯畜大をみれば明らかである。さほどの技術をもたなくとも、工夫と

研究により、ごく並の馬を名馬にしたてることもできる。馬に多少の癖があろうとも、気にする必要はない。素直な馬であっても調教中に一度や二度の反抗はたいいていあるものだ。勿論細心の注意を払うことは必要だが、失敗はたいいてい騎手の判断の誤りによることが多い。要は、たいいていの馬が調教次第で十分試合に通用するということである。

軽い馬、能力のある馬のみを入れて調教しようという意見がないのではないが、これは誠に情をい考えある。自分の技術の未熟さをたなに上げて、馬を選ぶような巾の狭い選手にはなってもいたくない。

「どんな馬でも自分がその能力を発揮させてやる。」という気が構えが必要である。

日本のオリンピック対策をみてみよ。オリンピック前にきまつたように、高い金を払って、既調教馬を購入する。一部の恵まれた選手がこれに乗る。しかし結果はいつも同じである。これこそ、まさに、「人のフンドンで相撲をとる。」典型である。このようにドウナツ式のやり方でオリンピックに勝つをどとは、誇りあるスポーツマンのやるべきことではない。中華人民共和国や、朝鮮民主主義人民共和国に於て例えば、卓球が強いわけは、誰でもが日常的に卓球を楽しめ、厚い選手層の中からすぐれた選手が輩出するからである。

自力更正という言葉があるが、自馬制とはそもそも自分で調教した馬によって技を競うものであるはずである。すぐれた人馬を数多く生み出す為には、「貧乏人でも馬に乗れる。」場を馬術界の要人たちが設定することである。オリンピックのたびに如何

千万という金で全国各地に安く乗れる乗馬クラブを沢山つくり、学生馬術部への援助を増すべきである。とかくニセモノやインスタントがはばかる時代だが、数多くの青少年馬術家が技を磨き、真の自馬制が普及しなければ、日本の馬術界の発展は望めまい。勝負は競技の結果である。既調教馬で目先の勝負を追うよりも、苦楽を共にした自馬でいかにすぐれた競技を展開するかということの方が、遙かに大切ではあるまいか。

当番日誌より

12月18日(木) サブイ。

12月26日(水) 今朝の馬場は、雪が30cm〜40cmも積もり、曳

き馬している人は、雪の中を泳いでいるみたいだった。



## 近頃思う事

岡田光夫

毎年、部の役員交替の挨拶状に、選手監督としての名前がのつている。これが、私にとって最大の苦痛になりつつある事は、部の会合の都度部員諸君に訴へているが、どうしても名前を削ってもらえない。しかし、今も馬を愛し馬に乗りたい気持は変わらない。先づ第一にこの様な事を書けば、まだお元気に馬に親しまれていらっしゃる半沢先生に申訳けないと思いつつ敢えて私の気持を文字にしたいたいと思いついた事は一つの原因があります。それは最近、私の乗馬姿の写真を見せられる度に我ながら身体の固さ、お世辞にもスマートと云えぬかっこうにありそをつかす気持になる事がしばしばある事でありませう。馬場馬術をやっている写真では、まるで丸太棒が馬に乗っているようにしか見えません。柔軟な身体、柔軟な拳、そして適確な扶助、流れる様なスムーズな運動、正にどこをたればその様を言葉が出てくるのかと云う有様、又、障碍を飛んでいる写真は必ず手綱を引いて前傾を助けている様なもので、少くも飛越する馬に随伴しては、ただ放物線を描いて飛んで行く馬の運動方向に飛び出さない為に、無理に手綱に頼って身体を曲げているにすぎない姿としか見えないう有様です。脚力がおとり曾て学生時代に鎧を上げ、手綱をはなして障碍

を飛ばされ随伴の要領を教えられた事を思い出すと、今その様な訓練に耐えるだけの体力はないし又、鍛練する機会もない事が今や私に馬を語る資格がなくなつた事に思われる今日此頃であります。しかし少しく、心の慰めになります事は、先般、市川君の結婚を祝して行なわれた部内対抗戦に、二年目の諸君に破れたとは云え〇Bが二位となり私自身もそんなにチームの重荷にならなかつた事、乗馬団体対抗障害競技で北星大学の女子チームに負けたりと云つても二位になり、この時もぶつつけ本番で三ラウンドの戦いの中でも、とにかく下馬する度にカラワラにかわいたのどをうるほしながらも頑張つた事を考えますと、又新しいファイトが盛り上ってきます。しかし、この二つの相反した思いにかられつつ、やはり閑があると馬場に向う気持は、雀百まで踊り忘れずのたとえのとおりであるうと自ら慰めている次第であります。

## 馬との付合

私が北大に入学する頃まで札幌の街には馬が多く見られ、馬車や馬極が荷客を運ぶ重要な運輸機関であった。馬極の鈴の音や雪融け路の馬糞、春先の馬糞風、誠に懐かしい思い出である。私の幼年時代に札幌の街には馬車鉄道があり馬鉄と呼んでいた。札幌市史によるとこの鉄道は明治四十二年に札幌石材馬車鉄道会社が石切山から石材を運ぶために石切山穴の沢から石山街道（南一、西十一―南一、西七―北五、西七―札幌駅前に至る石山線（六、九マイル）を敷設し石材の運搬と定山溪方面への旅客輸送の便を図ったが、明治四十五年市内運輸を計画し社名を札幌市街軌道株式会社に改めて、札幌駅―中島遊園地、札幌駅―苗穂駅、南一、東二浦河通―南一、西十五師範学校前、間の市内線（大正六年に五、九マイル）を敷設し、客車三十台で営業していた。大正七年に開道五十年記念博覧会が札幌で開催される機会に電化して電車を走らせることになり、その工事にかゝるまで十年近く馬鉄は札幌の交通機関であった。私は幼い頃から馬が好きで、この馬鉄に乗る時は一番前の座席に座って御者に追われて懸命に歩く（速歩が多かった様に思う）馬を見て喜んでいた。時々尻尾を揚げて歩き乍らする脱糞の状況など詳しく観察したものであった。

## 半沢道郎

またその頃は札幌の街のあちこちに装蹄所があって、其処も面白く通学の途中よく道草を食った。今の円山の総合グラウンドの場所は種苗商をやっていた私の伯父の採種農園であって、農耕馬が一頭うす暗い馬小舎に飼われていた。兄弟や従弟達とよく遊びに行っていたが私一人馬小舎に行つて、草をやったりして馬と遊んでいた。

現在の札幌競馬場がまた札幌競馬会のもので、今外厩のある辺り稗田寅伊氏の厩舎と並んで河原厩舎があり、其処の奥さんが黒崎建設の老主人の姉さんであった関係でよく遊びに行つた。殊に競馬の開催日には朝早くから厩舎の前の牛舎の屋根裏に屯して、その馬が出走する時に馬の準備運動の曳き馬について廻り、馬と一緒に馬場に行き、応援して馬と一緒に帰つて来て、競馬後の手入れを見たりして、終日厩舎と競馬場の間を歩いて暮した事も懐かしい思い出である。馬房の馬塞棒（厩栓棒）ブラ下つて落ちて気を失つたこともあった。小、中学校の頃は遂に馬に乗る機会が無かった。

昭和二年に北大予科に入学し、早速北大乗馬会に入会を申込んだが、申込者が多く、翌年の一月に愈く入会を許された。北大乗

馬会は大正十四年に創設され、当時第七師団の歩兵第二十五聯隊が月寒に駐屯していたので、その将校乗馬（十数頭）を借用し、土曜の午後と日曜の午前、隊の行事の暇に調教師を先生として練習をしていた。待望の乗馬ができた喜びに一入であった。其処の馬で一番よく乗った岩風号は私によくついて、厩舎に入る時に声をかけると側に行くまで見て待つ様になり、広い練兵場に出て下馬して韁を、離しても側から離れないようになった。長く世話になった馬が満州時変に出動し、無事帰還したのに鼻疽病の疑で全馬、菜殺された。愛馬岩風号も同じ運命であった。涙を流しやケ酒を飲んだ悲しい思いもまた懐かしい。

春休みには旭川の騎兵第七聯隊に二週間位管内に合宿して、将校や下士官を教官として、学科と乗馬練習をした。当時騎兵第七聯隊には良い馬が揃っていて、将校下士官の馬術のレベルも高く、この合宿は非常に有益であった。一日三頭位に乗せられ、手入れも大変であった。覆馬場での練習の味は忘れ難い、古城軍曹の「本別号」で一米六〇の単一横木を飛越した思い出や、支那事変で戦死された須田藤吉曹長の熱心を指導、騎七に配属されて来て居られた城戸俊三先生に障害馬調教と障害飛越の講義や障害飛越の實際を習い、城戸先生の馬（多分照天号）にも乗せて頂いた。緊張し過ぎて城戸先生の眼の前で障害を去避し叱られた事や、御自分で乗って障害の前でお鞭の使い方や、障害の上で馬の首に合せて手綱を親指と人差指の間で巧に伸ばしたり縮めたりされる神技を見せて頂いた事など学生時代に名馬術家に接することが出来たことは誠に貴重な体験であった。

最初の合宿の時であったか隊長が岡田光夫君のお父様であって、

以来ずっとお世話になった。当時旭川には大学が無く、北大生は非常に優遇された。管内では下士官待遇で、一、二等兵は向うから敬礼することになっていたし、入浴時間も下士官と一緒であった。街に出ても優遇というか珍らしがられてか、いろいろ楽しい思い出も多い。

第七師団が主催して北海道馬術大会が毎年夏に開かれ、学生の時も、出てからも度々参加した。或る時は騎七の下士官の特別のからくりで、余りにも良い馬が当り、障害に向ければ飛んで呉れて調子に乗って経路違反で失権したこともあった。

私の学生時代に札幌愛馬会という乗馬クラブが南四条西二十丁目であって武田忠幸氏が世話をして居られた。北大乗馬会の会員や後になって馬術部の部員の熱心な者が入会して乗っていた。私も入会して予科の三年の夏休みには六十日の休みの中五日通ったが、これは連続して乗った私のレコードである。人を三人殺したという勇軍号という往年の悍馬がいたが、老馬になって骨と皮の様になっていて、乗るとフワフワしていたが、尙悍威が残っていて、よく動いて面白い馬であった。

昭和五年に河崎、岩垣、松本、酒井の先輩諸兄と私の同級生の武田、九鬼両君等と北大乗馬会を発展解消して、文武会馬術部を創設し、会則を作ったり相談を私の家で集まってやった。昭和八年卒業するまで三年間部員として、卒業後は先輩として顧問役をし、昭和三十七年からは顧問教官として第五代の部長を勧めたので、部のことや北大馬術同好会のことであるいろいろ書き残し度い事もあるが次の機会に譲ることにする。

昭和十年頃であったと思うが、当時スキーをはいて馬に扱かせ

信長氏が多大の社を建てて今の南極費が足りなくなつた中止して、さうする  
のには、(同日迄) 昭和十一年十月三十一日迄

松平 池田 石川

昭和九年二月二十九日  
11月13日  
8月10日

所謂馬スキーは少数の人が個人的に楽しんで来たようであった。北大でも松本久喜先輩達が竹製の拽具に雪よけの布を張って作った簡単な手製の装具を馬につけて拽かせ、長い手綱で御すか、馬に人を乗せて拽かせてやって居た。当時北海タイムス社の社会部のスポーツ担当の伝法貫一氏と松本兄と私とで馬スキーを奨励し競技会をやるという相談をし、馬スキー倶楽部を作り、会員を集めて市から円山の綜合グラウンドを借りて、トラック一周のコースを馬二頭走れる位の幅に雪を整して作り、前記の様な装具でタイムレースをやった。グラウンド内だけでは興味が少ないというのでグラウンドから神社の横の道路に出、第二島居を廻って来るロードレースも加え、一冬に一回、三度競技会をやった。最後の年には歩兵二十五聯隊のスキー部隊の雪上の演習の参加もあって、なかなか盛会であったが、戦争時代に入り続行することが出来なくなつて、馬スキー倶楽部も自然消滅してしまつた。北大の第一農場に置いてあった拽き綱も何処かに紛れて無くなり、馬術部の部員には馬スキーをやる者も無く切角始めた競技会も再開するに至らなかつた。最近札幌競馬場で雪の降り初めの頃走路で楽しみにやつて居るが、スキーが上手で馬を御せる者でないとしてスピードを競う競技は難かしく、馬も馴致、調教が必要であるが、北国のウインタースポーツとして競技会を再開されるようになることを願っている。

乗せて貰つた。日曜日に単独で乗ることが多く、馬場で乗ったり、街乗をしたり、全く気儘に乗り廻した。中でも宮武号にはよく乗つた、桑園駅近くで溝にはまって落馬したり、暮の三十日に北四條の西二十丁目まで車に驚いて放馬して、先に厩舎に帰つていたり、凍つた道路で動けなくなつたり、深い雪路で立往生したり、独りで困つた思い出も多い。騎兵第七聯隊の合宿で乗つた大正号が農場に移管されて来たので、この馬にもよく乗つた。スペイン常歩をやる馬場馬術の調教が出来た馬であつたが、私が乗つてやるとスペイン常歩を二、三步で止めてしまふのに、下馬して肩のところを手綱をうまく使つると五、六歩やるのには、自分の技倆の下手さにガツカリしたものであつた。

昭和二十九年に第九回の国民体育大会が札幌で開かれることとなり、その貸与馬競技用馬二十頭が二十八年末から札幌競馬場に暴養され、元橋、荒川両氏が調教師として来られ、在札の乗馬経験者が調教のお手伝をすることになつた。私もその仲間に入れて貰つて早朝から競馬場に通つた。いろいろ馬を替えて乗せられたが、後で北大に来たエリザベス(北翠)に一番多く乗せられた。何かの都合で一番遅く入既したのが洋孝号で、丁度街乗をする日出发間端に到着した様に記憶しているが、早速乗ることになり、未だ何んな馬だか解らないのに、元橋、荒川両氏が「君なら余りいちぢらないで乗るだろう」という事で、私が乗る事になつた。おとなしく素直な馬であつた様に思つたが、後で日本の馬術界の

原中元  
同日、札幌競馬場の馬



朝請

功勞馬になつた名馬になるとは思わなかつた。洋孝が我々の仲間になつた最初に乗つたことは光榮であつた。

団体終了後使用馬の処分に当り、北大、畜大、乗馬クラブ等に  
力下げる事になつた。当時の鳥学長、太秦部長、松本先輩等の  
尽力で、六頭〔エリザベス（北翠）、ヨシタカ（北嶺）、ミスト  
クシマ（北標）、ミスアップテール（北楡）、シラカワ（北澤）、  
金花（北斗）〕が北大の馬術部用馬として繋養されることになり、  
農場の調情、幸運を入れて八頭を持つことになり、充分、当時の  
大学馬術部としては最も多い方で、その後の馬術部の飛躍的發展  
はこれらの馬のお蔭であつた。私もこれらの馬にはよく乗せて貰  
つて思い出が多い。

今から十五年前私は一年間アメリカのマサチューセッツ大学に留  
学した。その大学はアマストにあるが其処から二哩位離れたところ  
に、私達の世話をし呉れた先生が小さな農場を持って、其処  
から通つていた。農場には鶏と乳牛とモルガントロスターの五才  
の牝馬一頭が飼われていて、その馬に先生や奥さんが乗つていた。  
半歳位経つてから乗りに来ないかといふことで晩秋から翌春三月  
頃まで土、日、自転車を通つて乗つた。初めに奥さんのキロット  
と靴を拝借したが、後でニューヨークに出た折にミラーズの店に  
行つてキロットとゴム長靴を買つて帰つた。先生は正式に馬術を  
習つて居られないようで、調教は不充分であつたが乗つている中  
によく動く様になつた。細いハミで口角を傷めていたので太目の  
小鞆を買つたり、蹄又腐爛になつていたので蹄油を買つたり、帰  
国する頃にはすっかり馬と仲良くなつた。一年間アマストには何

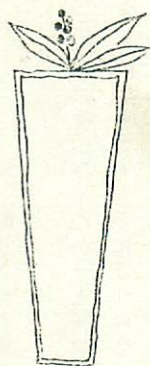
も残してこなかつたが、私のことを「よく馬に乗つていた奴」と  
いうことで覚えられた。当時のアメリカでは乗馬熱は女性の方が  
高く、男子学生は車で何処かに女友人を誘う方に忙しく馬に乗る  
人が少ないようであつた。アマストからバスで三十分位の処にノー  
ザンプトンという小さい町があつて競馬場があり、夏其処で郡の  
お祭りでホースショウが三日間開催された。ニューヨークランド  
にはモルガントロスターが多く飼われ、殆んどトロスターの品評  
会の様をショーで、年齢別、性別等でいろいろクラス別に体型、  
歩様、調教（乗馬又は繋駕）を審査し、馬術競技は付け足してあ  
つた。私は学校を休んで三日間連続見物に行つた。集つた人達は  
毎日交を日本人が居ると不思議に思つたらしく、話しかけて来た  
り、写真を撮り易い様に便宜を図つて呉れたり親切に扱つて呉れ  
た。大学の獣医の教授が審査員で来て居られた為にショーに来て  
いた事がバレてしまつた。

ニューヨークのマジソンスクエアガーデンにナショナルホー  
スショーが開かれた時も、学校を休んで三日間見物に出かけた。  
朝から夜の十二時頃まで、盛沢山のショーと競技（障害飛越が主）  
があり、毎日イギリス、カナダ、メキシコ、ドイツ、アメリカの  
チーム対抗の国際競技（大障害）やドイツの女性の馬場馬術（音  
楽に合わせスポットライトで輝す）のショーもあつてなかなか大  
がかりのものであつた。

長い馬との付合で乗馬連盟の仕事をしたり、競技会の役員をし  
たり、現職を退いてからも連盟の事務局の手伝いをして、馬を離

れた人生は考えられない有様で、競走馬の育成の保健の仕事を友人と一緒に始めて、長年世話になった馬に恩返しをしようと考えて目下種々準備を進めている。

札幌競馬場の西村前場長の発案と競馬場の厚意で、札幌楽馬会というロートルの団体を作り、月に一、二度の騎乗会や食事を共にし乍らの放談会を行ひ会の会長に納まって乗馬を続けている。最近庄内氏の調教しているアラブの六才の牝馬に下乗り役で乗せて貰い、週に三回位馬術の本を読み乍ら、勉強をして居るが心身の健康上誠に快適で、馬と付合った幸福をしみじみ味っている。



## 黒沢先生の思い出

山下 正亮  
現 酪農大學馬術部 部長

黒沢先生は昨年一月一三日午後四時八二分を以て急逝されました。

先生は大正四年東北帝國大學農科大學畜産學科第二部（現在の北海道大學獸醫學部）を卒業以來北大に長く教鞭を取られ、初代獸醫學部長として御活躍、停年後は酪農學園大學に迎えられ、獸醫學科の創設に心血を注がれて居られました。先生の功績は申すまでもなく大きなもので、我國獸醫學發展の爲に貢獻された大元老であります。又御亡くなりになる前日迄講義をされ、其の一生を學者として、教育者として、学生の教育に、獸醫學の發展の爲に御尽力下さいました事は誠に感謝の極で御座います。

先生が馬術部の部長をされて居られたのは昭和九年から昭和一四年の満五ヶ年間で、其の時代の主将は昭和九年、高杉直幹氏、昭和一〇年、脇田代子郎氏、昭和十一年、滋賀秀明氏、昭和十二年、私、昭和一三年、池内武夫氏、昭和一四年、西村雅吉氏でした。先生は教育、研究の外に軍用犬協會の会長や、軍獸医部との關係、全道獸醫師の講習会等、更に家畜病院長として寧日のない御多忙の時代であつたと思われまします。それにもかゝらず、私達が家畜病院の横を通つて講義に行こうとすると、「その馬術部

の学生、この競馬馬のどちらの肢がびっこか」と問われ、「何処かびっこか分らん様では馬に乗つても上手になれぬぞ」と云う様に何くれと氣をつかつて御指導して下さいました。農場の馬は畜産學科の授業以外に使用しないとの規則があるのに、馬術部の同期の者達とこっそりと乗つて居た所を松本久喜先生に見つかり、大目玉を頂きましたが、其後黒沢先生の御圧力により、言わば公然と朝六時半から練習が出来る様になりました。當時の馬術部の練習は専ら軍馬に頼つて居た為、滿州事變、支那事變と戰爭の拡大と共に歩兵第二五連隊も出動、練習の少くなりつた時で本當に先生の御骨折に感謝し乍ら練習致しました。この事が後の昭和一二年の第一回全國帝大馬術對抗戰の優勝、昭和一四年の管間威君の全日本學生馬術選手權の優勝、同年のインターハイの優勝に結びついたと云つても過言ではなと思います。

昭和一二年度、全日本學生軍が朝鮮遠征を行う予定の処支那事變勃發で急遽北海道遠征に変更になり、全日本學生對全北海道の對抗馬術大会が北大農場馬場で花々しく開催し得たのも黒沢先生の御力による事が多かつた事と思われまします。

先生に馬場で実地に指導頂く機会はありませんでしたが、部の

馬事思想宣伝の映画会や、部の新入生歓迎会、送別会に出席され、温顔に笑みをたゞえながら、温い御指導を頂き、部全体を和やかな空気に包んで頂きました。いつかの送別会の折でしたか、先生に御酒を注ぎに行つた所「そんな酒の注ぎ方があるものか、御流れを頂戴致しますと云つて来るもんだ」と私達学生に欠けて居る一般常識を御教へ頂いた事も未だ記憶に残つて居ります。又部長をおやめになつてからも馬術部の後援会長として、OBのシンボルとして長く御指導頂きました。

第一回の全国帝大馬術對抗戦で優勝して一同で御挨拶に上つた時は先生は非常に喜ばれ、其の時撮つた写真（東久邇宮杯と今総長、黒沢部長を中心として松平、石井、高井、楠本、石井、小生の面々）を長く記念として先生の御部屋にかざつてありました。私は昭和一四年冬より満州、支那、仏印（今の南ベトナム、カンボヂヤ）、泰、緬甸、印度と転戦し、印度のインパール作戦に敗れ、敗走に次ぐ敗走し昭和二〇年八月、終戦となり、翌二一年六月生きる希望もなく、しょんぼり帰国致しました。そして御挨拶に上つた時、御部屋の内に私をにこやかに迎えて、激励して下さいました先生と壁にかけてあったあの写真は私に生気を甦えらせてくれました。それ以来、公私共に先生に御世話になりっぱなしです。あのやさしい先生はもう帰つてはこられません。あの写真も昭和三九年の畜産二部の火事で焼けてしまいました。

今の部員の方々は先生を御存じない方もあろうかと存じますが、先生の御教へ頂いた事は部員より部員へと伝えられ、今も脈々と感ぜられる事と存じます。益々部が技術のみならず、先生の常に唱えられた「和」を基として大いに発展されん事を願つて止みま

せん。

こゝに拙文を草して謹んで御冥福を御祈り申上ります。  
昭和四九年一月三〇日、先生の四九日の目に記す。

当番日誌より

7月5日（木） あるアツイ夏の日のでき事

ボロ上げ、シンドかった。（桑田）

荒井。感想ないか？（吉野）

えーと。今日は乾草切らなかつたですね。

（荒井）

バカ。（吉野）

みんな、暑さに負けるナ。



部  
生  
活  
報  
告

## 練習について

一年目 荒井 隆

私はクラブの練習について、何時に集合してどんな内容の練習をやっているか、という客観的な著述をしようとは考えていません。練習内容の客観的評価というものは、一年目であり馬にはじめて接した私には不可能に近い事であると考えますので、この点については相川兄にたよるより他ありません。私はあくまでも主観的を見方で、練習中に感じる事を書いてみたいと思います。クラブの練習に対する見方、考え方は各学年によって大きく変わっていくものであると思いますし、同じ学年の中で違っているのも当然でしょう。したがって私は、私自身の私だけの見方を書いていくよりしかたありません。

現在、この部報の原稿を書いている十二月、私たち一年生は鞍数において、百鞍を中心としてプラスマイナス三十程度の幅に、ばらばらに存在しています。人数九人ですからかなり幅がある様です。一年生だけにかぎっていえば、現在の練習は部班を中心に常歩速歩での定跡運動、巻乗り、半巻き及び歩度の伸縮を内容としています。まず馬を前に出さなくてはならない。それはやはり第一歩として必要不可欠であるでしょう。しかしただ馬をけつて

いれば前へ出るといふものでないと思います。もし、ただ馬をけつて、その強弱だけで伸縮をやるうと思ってもむずかしいと思います。馬術は脚もありそして拳もあります。この二つが合わさってはじめ、馬術と言えらると思えます。ここで考えてみたいのは一年生の訓練における一つの方向として、脚、左よりも脚をそれこそ徹底的に強くして、そしてはじめてハミをいじらせる。つまり、たづなをなげて拍車をはずし、歩度を伸ばすという練習を徹底的にやる、という事です。またもう一つの方向としては、馬に対する悪影響はがまんしてある程度一徹密な考察をすれば、このある程度が問題なのですが、馬になれたらハミを受けさせる様に練習させ、脚と同時に並列的に運動を行なう。聞く所によりまずと畜大は前者に属する様で、我が北大は後者に近い様です。

一年生の前期には、脚を入れる時上体が動き拳も動くのは、ある程度しかたのない事だと思えます。これは百鞍を起しても数多くあります。この、脚を入れるたびに拳が動く、なにかあったたびに拳が動くのでは馬に対してよい影響があるはずがありません。しかし幸運にも私たち下級生に与えられた事は、なんでも言われた通り極端になるまでやる事です。ハミをもっと強く受けると言われれば、いくらでも強くしてよいのです。自己規制する必要はまったくありません。私たちは夏休みが終わってからは、ハミという事を言われはじめ前述後者的な練習をしていると思えます。当然騎手の姿勢等についても注意はありますが。ある先輩は、一年目はハミをいじらないで脚だけにすればよいのだ、とおっしゃいます。私はたづなをなげて出来るだけ強くけれ、と言われれば力のかぎりけり続け、どんなに重い馬でも時はかかるかもしれま

せんが前へ出せると思っていますし、拳を気にしなければ、かなり強く馬をける事は出来るつもりです。でも私は拳を気にして、ハミを気にして、拳を動かさない様にして使える脚が問題だと思いませんし、またハミを受けてその状態で使える脚がたいせつだと思います。そうであつたら、馬たちに対しては私たちがハミをいじる事を許してもらふより他に道はない様に思います。そしてそれを、つまり一時悪くしたものを、上級生にもどしてもらふより他ないと思っています。ある大学のO・Bの方が来て、一年生の練習を見ていただいた時、ある一年生が「馬が重いので」といいました。すると言下にその人は「馬を重くしているのは君たちじゃないか。馬などほんとうはそんなにけらなくても動くのに、けてそしてハミを引いて。それでは重くなるのは当然なんだ。重くしたものを動かすにはそれ以上強く脚をつかうより他ないだろう」と。我が北武号は非常によい馬でこれからも北大をしょっていく馬なのですが、私たちの練習によく使われます。もともとすこし鈍いのだと私は思いますが、最近はとくに重くなってきている様です。それは前記の事の例として、びったりとあてはまります。この馬をこうしたのは私たちなのかもしれません。しかし私たちは少なくとも私は、無責任にこの馬をけり続け拍車を入れ続けています。そしてたづなをしっかりと握っています。これしかないのだと信じながら。

## 試 合

一年目 木 村 洋 文

只今、北大トレーニングセンターに缶詰にされ、鬼の部報委員より原稿を催促されております。十二月初め、西田兄より「本村さんは試合について書いて下さいネ」と言われたが、何を書いたらいいかサッパリわからず一カ月余が過ぎてしまいました。こちらで一発奮起して、思いつくまま書きをぐってみます。

昨年の僕と試合との関係はと言えば、シーズン初めの半沢記念道自馬等の大会でマネージャーの柴田兄や渉外の景山兄について開催準備に駆けまわり、クラブの裏方の重要性を知らされた。また、この頃、小障にも二度程出場し、一度幸運にも勝った事があった。夏の北日本学生、道大では、リヒトや北準の馬匹に終始し、そして秋の全日本学生では北準の馬匹として東京遠征に参加した。こうしてみると昨シーズンいろいろの立場で僕は試合に関係したが、一番思い出に残ったのは何と言っても全日本学生での北準とのつき合いである。

十月二十六日北準貨車積み、同行者は僕と一年目の佐藤君。夜出発までの時間、暗い貨車の中でただひたすら差し入れを待つ。しばらくすると、やって来る、やって来る。男子部員が次々にや



って来た。食糧もある。酒も雑誌も現金も、そしてパンツまでも……みんな、なんて心がやしいのだろう。吉野さん、相川さんはなんとポットに熱いお茶を入れて持って来てくれた。うれしかった……が、しかし、女子部員からの差し入れは、一人を除いてなし。佐藤と共に我が身の不幸を嘆く。このように「晴れ後曇り」位で出発。道中いろいろあったが、とにかく三十日の晩渋谷着。北隼を貨車から出した時、長旅で疲れたのだろう。渋谷のネオンに輝いて彼は少しやせ、足下がふらついているように見えた。彼は果してこれからの辛い試合を知っているのだろうか。たぶん何もわかるまい。何も知らず、ただ狭い貨車から開放され、ホッとしている彼の目を見ていると無性に彼をいとおしく思った。その日の夜中、農大の厩舎に一人寝ていた僕の所に則近兄が到着翌日から東京で北隼―則近組の生活が始まった。十一月一日、農大より馬事公苑に移る。試合が近づくにしたがって、次第に緊張が高まっていった。則近さんはどう感じていたか、それはわからない。しかし、馬匹である僕でさえも、すぐ隣でゴロゴロしている畜大勢、特に団体、オールジャパンを転戦して来た余裕ある石川さんや柏村さんの温和な寝顔を見るたびに、いやおうのない寂しさに襲われ、又北大では今ここに北隼―則近兄のコンビしかないのだという事実が、僕の体に緊張感をみなぎらせた。その緊張感、北隼にも自然に伝わっていった……と僕は信じている。試合で彼と則近さんのコンビはすばらしかった。障害を次々に飛び越し、飛べない障害はぶち壊してでも進んで行った。もちろん落下がよいとは言わない。しかし、止まる気配など全くなく、ただ前進あるのみという彼にたまらぬ頼もしさを感じた。中障が終わ

り、僕は馬匹を阿部兄にバトンタッチした。僕の役目は終わった。虚脱感が全身を襲った。総合でも北隼―則近兄のコンビはあいかわらず活躍していた。僕はただそれを遠くから見ているだけだった。

## 試 合

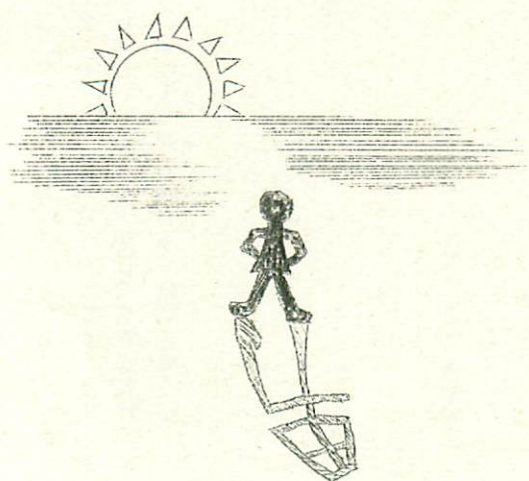
一 年 目 若 松 光 子

大きな動きの連続であるというのに、なんと繊細な世界であるか。技術はもちろんのこと、それ以上に心理的なもの、精神的なものは、ひともうまも、よほど敏感でなければやってゆけないようだ。そういうことは、ふだんの練習でも感じられることではあるが、最も凝縮されてくるのは試合のときであろう。

今年、畜大との定期戦から全日本学生馬術まで、大小含めて、八つほどあったけれども、全体的にも、瞬間的にも、そういう一瞬ととうま、ひととひと、又、それぞれの個人の中のとえば感情と理性、の間のはりつめた関係が感じられたものは、やはりあまりなかったようだ。“やはり”という副詞を入れざるをえないのは、結果をみてのことであって、今、あらためてそう思う

のである。

ひととらま、一人の人間の内、の場合は、完全に個人の問題である、ひととひとの間の緊張は、クラブであるがゆえのものである。選手と馬匹、選手と部員、部員と部員、ここにおける微妙な世界が、試合という微妙な世界にはいりこんでくる。意識が大事じゃないかと、ふと思う。大胆な動きの中に、そんなものがひそんでいる、ということは、心底、おそろしいと思うけれども、本当は、すばらしいと思っているのかもしれない。ちょっと、この一年をふり返ってみて、そんなことに気づいて認識した今、一さて、やってゆくのは私たち自身です。



## 当番の日

佐野 淳也

馬が食を喰むこと、昔と変わらず。当番の存在すること、またしかり。当番の始まる四時半にパッと目の覚めるものから、自分の蒲団で眠るものを。二日酔い、愛する馬たちのしとの臭いのこのときほど苦痛に感ぜらるる時はない。許せよ、我もまたひとなり。昨日の「もう一杯」を悔やむのは、上げそりになる、まさにこの時のみ。昼の当番は馬の顔を見に行くようなもの。教室で顔をあわせた友と何方が好男子か、などと考える。なるほどやつはもてないはずだ。仮眠を食るのは、朝の当番と昼の当番との間がよいか。はたまたま昼の当番と夕方の当番との間がよいか。これはバイオリズムを考慮に入れなくてはならぬ重要な問題である。つまり、人間を形づくっている肉体と精神とのバランスに関係する根本の課題なのである。こんなことを考えながら眠りに付く。日誌を書き、火元を確認したら、夕方の当番は終わり。指の運動に行く者あり、アルゴールを補給しに行く者あり、即蒲団につく者あり。とにかく先ずは晩飯を食いに寮へ、生協へ、下宿へ、足

を運ぶ。人影の消えた部屋に残るものは、短く吸った煙草の燃えさしと床を照らす螢光燈の白い光。扉の向こうで、乾草を喰む音、馬の、満足げに鼻を鳴らす音が聞こえる。翌日の当番が投げ草に來る夜九時まで、彼らは暗闇で、無心に自らの鋭気を養う。

## 当番雜感

三年目 佐伯 久美子

私の住まいは部屋から遠い。愛用の自転車にガタが来て、歩いて通りようになってからどれ程たったか、もう忘れた。

朝の四時半から当番は始まる。三時半にガバと起きて、急いでしたく。三十分くらいかけて、早朝の街を歩いてゆく。

今迄、風とともに通りすぎていた風景が、ゆっくりと親しいものになってきた。北大構内を縦断する、この早朝散歩。四季のうつりかわりがそのまま静かに感じられる。

春の夜明け頃の水銀灯はなぜかおぼろだ。夏は緑の輝きに驚き、秋は湿る黒い木々の紅葉の鮮やかさをひとりじめする。冬には足あとのない雪が広がり、キラキラ光る。犬コロみたいにはしゃいで走って今日も来た。遅刻すまいと走るときは両眼に迫ってくる風景。わーっと叫びたいほど美しい。

きっと気が散りやすいのだへ思う。夏の草刈りで偶然みつけたキンポウゲに夢中になった。別名「ウマノアシガタ」、金鳳花と書く。艶のある金色の花びらに陽の光をうけて群れて咲く。風に揺れて咲く。馬は食べない毒草だけど、捨てるのが惜しい。刈られて捨てられた花をかかえて帰った。ぼうぼうにどっさり生けると光を放つ。強い花だ。花器の水を三度ほど吸いとり、水のある限り咲いている。枯れても惜しくて押し花にした。春の土筆、タンポポ、踊子草……夏に金鳳花、野バラ……秋の燃える木の実、アキノキリンソウ……まだまだある。まだある。すべて草刈りの手をとめた眼にとびこんでくる。リャカーを押して帰る心に残る。当番のあいまの部屋でのまどろみ。風に香りを感ずるときがある。ポプラの綿毛が雪のように舞いこんでくる。息をふきかけると身をかわしてふわりと降りる。そうして秋も暮れ、やがて、寝ワラを入れる頃、雪虫の舞うを見る。一番おそいポプラが色づき、葉を落とし、落としきらぬままに雪が来る。夕餉時は紫に染まる。ぼくぼくと雪は降り、飼桶に積もる。馬場に放ちて馬は雪を食む。北海道の冬はまだまた序章。しかし冬至をすぎると気持ちも軽い。早く来い春、私の好きな緑の季節。

## 馬術部の楽しさ 即作業の楽しさ

一年目 横 沢 敏 夫

入部して一週間、四月下旬より夜の投げ草、朝昼夕の当番に我々も組み込まれた。作業とは呼ばないが、新参の我々にとってはつらかったです。夜九時投げ草そのまま宿直（夜は男性のみ）そして朝四時半起床（夏）練習後八時半解散、昼十二時より二十〜三十分間、夕方四時頃より五時半まで、これが当番の義務なのです。週に一度ではあるが日に六時間（うち当番三時間）もクラブの為に費すのが惜しかった。が、半月もすればクラブの生活に慣れ、それまでのように時間に遅れたりサボったりして、パット（罰当番）を（中には一週間もというキビシイ罰もあった）くらうことも少なくなる。本物の馬術部員となると共に、本物の作業に加わるところである。

我部では（他の大学等でも同様だろうが）馬十二頭を部員三十人前後で養い調教している。生き物を飼っているため飼糧、排泄物、寝ワラ等に関する作業、又クラブ活動として遠征、試合の準備、競技施設、馬場、部室、厩舎等の整備など、諸々の作業が山とある。その作業を処理する恐しい作業係がいて、各人の作業回数（月平均三四日）をチェックし、作業の割り振りを行う。時に

は回数が少過ぎ、強制労働に服さなければならぬこともある。過去を見てみるに、自分の空き時間のできる仕事を選んでいて充分で、鬼、いや作業係も恐しい方ではないのであった。

まだ草木も芽を出さない春先、天気の良い日の楽しいニンジン掘りが最初の作業であった。ニンジンには特に必要というものではないが、ある農家の好意で馬のオヤツとして数回に渡りいたいて来ました。これが楽しい作業の始まりであった。其の後五月早々の、半沢先生退官記念馬術大会を北大馬場で開いた。我々に始まり始めての試合であった。その準備に、放課後と土曜日曜に全員作業をした。障子の修理、塗り替え、補充（借入）又審判席（用物見台）の建築。枕木を半分以上埋め込んで柱とする。「まだ足りませんか？もうスコップがとどきません。」（現場監督兼土方）「まだまだ掘るんだヨッ。」「オーイノ 水が湧き出したぞ。」「ダメだぞ、そんなとこでやっちゃ。」「違います。本当に地下水ですヨ。」（爆笑）結局十数個の穴を、地下水が出るまで掘り柱をたて終わるころには皆汗と泥まみれ。ワイワイと騒ぎながら台ができるのは六時過ぎ。疲れたが楽しい日曜日だった。そして試合当日を迎え、各自役割を果し、順調に大会は幕となる。各試合は全て、部員が運営するのである。もう一つ今年北大で催された競技会は夏の初めの道自馬大会、このときには帯畜等からの遠征馬のための仮厩舎を作った。やはり、ワイワイガヤガヤ。又、北大以外の地での試合に遠征するのも一苦労である。近辺の馬合は数時間かけて馬を歩かせて行き、飼糧、馬具等トラック一台に納まる。しかし、遠隔地の場合は貨車によらねばならない。今年は、八月上旬帯畜での北日本学生馬術大会に八頭送り、又十

一月上旬の全日学生馬術大会には北隼号を送っている。どちらとも一週間ほどの余裕をもたせて送り出す。貨車積みは全員作業であり、飼糧、馬具、薬品等をそろえ、桑園の貨物駅でいやがる馬へ（中には胆が太いのか、はたまたまにぶいのか平然としたやつもいるが）を貨車に押し込め一両につき二名ほどが世話のため、貨車での旅行をする。貨車が出てから開催地も含め帰って来るまではパンとマーガリンと水の食事、馬の足下の寝床という耐乏生活が続く。（ちょっとオーバーだったか）帯広のときには、残る馬の世話をする数人を除き、全員がこの耐乏生活に挑んだ。各人馬が健闘した後の（あらゆる試合の後に開かれる）レセプション（親消コンパ）。エガッター。生気を取り戻した。飲めや歌えやの大騒ぎ。それまでの疲れも吹っ飛ばうというもの。作業の中で最も重要なのがこの試合準備の全員作業なのです。

もう一つ楽しい楽しい全員作業。乾草作りである。一番草の伸びきる六月中旬から下旬にかけて、厚別へ月寒でそれぞれ二日ばかりで草刈りをし、其の後数日（三〜五日）間天日で乾燥させるのである。草刈り機三台、六トン積を筆頭にトラック数台を動員する他は全て人海戦術。鎌を振って縦横無尽に刈りまくるのである。腕と腰がおかしくなるころ、冷たいコーラとパンで一服できる。汗も引き、広々とした緑を前に、ああ気持ちいいなあ、思うもつかの間、「草刈りカインシーノ」の声がかかり、今度は広過ぎる（二百×三百平方メートル）草地が恨めしく思われてくるのであった。どうにか刈り終え今度は、フォークでもって集めねばならない。足を引きずり引きずりやと終えて第一日目暮。テントを数張り広げ、野営する輩十数名、そして一〇名ほどが（ナイン

ヨですよ）トラックの荷台に臭いシートをかぶって息をひそめるのです。家に帰れば、「さあ明日もだノ」などと思わなくなつて、ボタン、グー。明くる朝より草刈りを続ける一方、デカイトラックが青草を山と積んで厚別と北大を往復する。運ちゃん（先輩ですが）は上半身素裸。北大にいる数名が北大内のありとあらゆる空き地に青草を広げて行く。こうして二日目も終了し、しはし休憩。翌日より毎日当番制で、朝に広げ夕方方に固める。又、北海道の初夏で雨が少ないとはいえ、降らないわけではない。それと走っていき、大急ぎで高い山を作り、シートをかぶせる。こうした努力の効あって、数日後にはできあがり、この乾草を梱包して、既舎の二階に納め乾草作りの作業は終了した。（この乾草、十二頭分としては一月ともたないのです）

更にきびしいのが一つ。道営競馬のアルバイトです。どうしても足りない部費を少しでも補うために全員交替で稼ぐのです。一月ちょっとで五十数万円、大したものでしょう。

他にも飼糧、寝ワラの運搬、格納。たまには部室、既舎周囲の大掃除、修理等又、冬になると雪かきと、作業は尽きるところを知らないのですが、紙面が尽きてしまひそうです。

作業はつらいかもしれない。でも、オンマの為ならエーシンヤコーラ、ワイワイやっつりや楽しいものです。そして、どんな作業の後でも慰労会があるので。菓子とお茶、オチャケとツマミ。部室でワイワイガヤガヤとやっつれば疲れなんぞ吹き飛ばしてしまふ。我々は若い（十八〜二十と二・三・四？）。こんなすばらしいことを体験できる作業無くして、何の馬術部ぞ。

「作業」とその……。

二年目 柴 沼 俊

六月。天気晴朗、水いまだ清冽なれど、何もかもが、幸せをゆっくりと咀嚼するよりな日、部屋に一片の紙が無造作に、しかし、その重要さを誇示するかのように堅固に貼られた。その紙白く、「大草刈大会、時云々、場所云々、行き方云々、その他云々。」

その紙を見つめる目。何も知らぬが由の好奇の一年目。今年もかと苦々しく、しかし、僅かの希望をも捨てきれない未練がましい悲哀の二年目。嫌悪と責務の葛藤に埋もれる三年目。慣れがそうさせるのか、一見冷静の諦めの四年目。解放され外見は、現役を憚ってか無表情を装うも内心ほくそえむOB。

草刈大会。それは、馬術部とは夫婦の絆よりも強い。離婚することがないからである。この当然存在するべきもの、遂行を余儀無くされているもの。ソクラテスを登場させようが、デカルトを逆立ちさせようが、結果は、一つ。やらなければならぬ。

しかし、それでも、これからの逃避を考えてしまうのは、何処であらうか。

その答えの一つとしては、「苦しさを越える時、人間として飛躍的に成長する。」「労音は、理性を磨く。」等という労苦を幻

想の快樂へと導き、妥協させてしまおうという言葉に象徴される誤魔化の連続という我々の人生の本質ということでは、ないであろうか。よって、逃避を考える、逃避できない、黙々と作業をするという三つの当然が生じるのである。だから、逃避は、人生の道草であり遊びである。少々酷に言えば、憩の一時慰めの一時ということになる。そして、道草に飽きた時、それは、居直りへと転化され、拒絶と従順の両極端へと分かれるのである。

「終るぞー。」と天使の一声。

この時、一体全体、誰が来年もあると考えるであらうか。これぞ、全文を網羅するところの、ここでの人間の本質である。

当番日誌より

10月16日(火) きょうは変である。六時前に、全部帰りやが

った。淋しい!!

## コンパ生活一年生の反省

一年目 平野雅裕

月例の総会によく使われ、コンパとも最も馴染みの深い会場の一つにクラ館の和室があります。今、コンパについて書こうとするにつけ、先づ思い起すのがこの和室であるというのは、今年ここで行なわれ私達のコンパとの始めての出会いであった新入生歓迎コンパへのノスタルジアからかも知れません。御存知のようにこの和室の壁には、内村鑑三の筆になる「禁酒労働」という言葉が掛けられています。当時はこの言葉の下で酒宴をひらくことに皮肉を感じて笑ったものですけれど、一年を経て省みる今、そこには私達の経験するコンパの中の、或は大学生活に於る矛盾が象徴的に表現されていたように思えてなりません。

新入生歓迎コンパは、コンパとの出会いというばかりでなく、寮歌や讃歌、また練習中からは想いも及ばぬ先輩諸兄の本性との触合いの中での部との出会いであり、大学との出会いであるという大きな意味もっています。一つの意味から云えば、良き出会いであり真実の認識であり、又他の貴い意味から云えば、それは随

落の経験と云えるように思います。私達が高校時代に抱いた大学への期待は、あくまで高校生としての束縛の中で抱かれた期待であって、やがては大学そのものによって裏切られなければなりません。そうした大学への失望の中にあつた私達は、コンパを通じていわば高校生根性といったものからの解放を経験したように思います。ただ公然と酒を飲むという停らない何か別の大きな自由をそこに感じたように思います。しかし解放はされたものの、同時に自分の過去の足場を失ない、それ迄の期待を容易に捨去ることも出来ませんから、その解放感も多かれ少かれ矛盾を含んだものでした。私達はその矛盾の解決を知らぬまま、ただただ解放感に溺れ、酒を飲むことの中に一時凌ぎの解決策を見出そうとしていました。そこでは、コンパは現実からの逃避場となり、互いの慰安会となつてしまっています。コンパ自体が目的となり救いとなるということ、私達の墮落であると共にコンパの意義の喪失に違いありません。何故ならコンパこそそうした矛盾の解決の場でなければならぬ筈です。

コンパの正しいあり方を考え、真の意義の回復を思う時、私達は現実に置かれた矛盾を直視しなければなりません。言換れば、あの和室のあの言葉、酒宴の席にこそふさわしい「禁酒労働」の言葉の下に私達自身を置いてみるより他にはないように思います。酒のまずくなるようなことを書いてしまったのでしたら謝ります。

## コムパについて

### 二年目 阪上 泉

一年間に我部で行なうコンパの量は、大・小合せると大変な量になるであらう。何故にこんなにもコムパを行なうのでありましようか。酒と対話に尽きるであらう。

まず酒から、酒は百薬の長といわれるものであります。人は酒を飲むとき、現在自分の置かれてゐる現状をふりかえるものであります。一人氷下魚などを食いながら酒をのむとき、何かを感じながら飲み、多人数においては現状を批判し、またぐちりながら、そしてそこには、その個人本来の姿が浮き彫りにされて来るものであります。そして、そこにおいて普段自分の感情の中に殺してしまつた何かを取り出しそこで発散させてしまうのであります。もしコムパから酒を取ってしまったら、そこには重く、いやな気が白々とした会話しかありません。もしそこに重く、いやなものがあったとしてもそれは表面だけのものではない、自分自身のこと、クラブのことを話し合えるのであります。たまには酒

乱の奴も居ます。泣く奴もいるであらう。しかしそれはその個人の持つてゐる一つの側面であります。それを知る事が出来るのは酒があるからこそです。人は言うてありましよう。そんな所でしか自分の本質を表出できないのかと。それはその通りであります。しかし人は弱いものであります。かりに強かつたとしても酔つていない時のみ本質を表わすものでもありません。一つの目的に対して人間が集まつたとき、私は思うに、互いに理解することがその集団をより発展させるものであると思つてあります。

また対話については前述のごとく一つの集団、集団として成立するため必要なものであります。集団は一つの統一の、またいくつかの目的の為に一つの規制が必要であります。それは上下関係でもあります。しかしながらこの集団を作り上げてゐるのは個々の人間であります。もし規制と目的のみであればそれは機械であります。機械は自からが発展することは絶対にありません。

人間は発展していくものであります。その人間がその集団に属したのはその発展の一過程としてであります。その集団にそういう発展がないのであればその集団は意味を持ちません。人間が人間として互いに相対して行く場が必要であります。相対して行くことは妥協ではありません。人間として下の者を又、上の者を認識することをあります。このようにして対話することは必要であります。

コムパにおける対話は以上書いたように堅苦しいものではありません。もっと気楽なものではありますが、そんな中にも前述したような意味のことは見出し得るものと思つてあります。もしそれが見



い出せなかつたら今後の発展はないでしょう。しかし、まず私の記憶する限りにおいてはそんなことはないように思われます。酒はコムバにおいて対話を引き出してくれる触媒であり点火剤でもあります。一人コムバで他人の話しを聞くのもいいでしょう。また口角泡を飛ばして激論するもの大いに結構、酒を酌交わして多めにやるのが青春の一時期にありこれからも、あり続けることを願うものです。

### 日高合宿

一年目 西田篤司

### 当番日誌より

5月5日(土) 半沢先生御退官記念馬術大会

疲れた。(水野)

いささかの不満を残して、無事終わった。

(若松)

ぐやちい~~~~ (江口)

昼の弁当、うまかった。(荒井)

北大馬術部では、毎年、一年目対象の、夏休み一週間、日高の北大実験牧場にて、農作業を手伝いながら騎乗する合宿を、行っている。私達も、七月十五日から七月二十一日まで、一週間の合宿を行なった。天候にも恵まれ、普段、味わったことの無い濃くてうまい牛乳など楽しい思いでもあるし、好天の為に暑く疲れた作業、受験勉強ダレの体でのトレーニング等、つらい思いもある。その生活については、私が合宿中、面白半分につけていた日誌より抜萃してその実体を、伝えたいと思う。実は、この日誌を、この紙面を借りて完全公開せよとの要望もあったのだが、くだらない面も多いので、その辺は多少カットした。

### 日高地獄合宿日誌

一日目、七月十五日 晴れ、暑い。

午前十一時十五分、ついに到着。空は青く、あま木々は緑、一見 天国と感ちがいのほどにすばらしい地獄の第一印象。十一時半より昼飯、久し振りで財布と相談しないで飯が食べた。あややはりここは天国ではなからうか……。午後一時より馬を集め囲

いに入れる。作業が終つての休み、五目ならべと、将棋の花ざかり。兄強し。喜ぶこと頻り。四時よりトレニング。走る、走る、ひたすら走る。六キロとか、七キロとか。K君つぶれる。もうゴール前だった。トップグループが宿舎の玄関先で休んでいると、彼が彼方の道をヒョロヒョロ走って来ると、その時彼はユーターンをして戻り始めたのだ。私達は彼が何か落し物をして拾いに行ったのだと思つたのだ。しかし、彼の話しによると、もうその頃は目の前が真黄色で、意識が無かつたのだそう。その後かなり時間がたつてから、彼は、全く別の方角から、ヒョロヒョロと走つて来て、パツタリ乾草の山の上に倒れる。どうやら彼は軽い日射病のようでした。宿舎に帰つてからも、

「俺は死ぬぞー。足がしびれてきた。急救車、呼んでくれー。」  
一同啞然。しかし、K君が、関西弁で言うのと、どうも冗談に聞こえるのだ。そのうち、彼があげられはじめる。

「俺は死ぬ——。」ドタン、ドタン。

「死ぬ——。」  
これには、まいった。実にすごい迫力であつた。皆、しばし、ボー然。そのうち彼は医者に行つた。

次に掲げる言葉はくだらなくもあるが、まあ一見に値すると  
思う。もっとも、私としてはK君にあれだけ焦らされた腹い  
せに、書く感もあるが。

《K君名言集》

「死ぬ前にジュースが飲みたい……。」

水を飲んでから、

「……死ぬ前は 水が欲しくナルンヤ。」

これをまじめに、言うのだ。真実味をこめて。こちらもヒヤッ。

「……ああ、俺も十八歳で……。」

病院にて。大したことはないとのこと。

「俺、死なないかも……。」

「……ああ俺、いい経験をした……。……死の瀬戸際で……。」

K君は点滴をするため、一晩病院に泊まるそう。

(あ、今星が流れた……。不吉……。ナノダ。A君談)

I兄、皆が推めたにもかかわらず、先に風呂に入らず。石ケン  
を忘れたから？ 女の子が先に入つたから？

二日目 七月十六日 晴れ ぐわあーと暑い。

五時四十五分起床、六時から七時までトレニング。柔軟体操  
後、ランニング。昨日より、歩度落ちる。八時より騎乗。(の予定  
定だった。)しかし馬がつかまらないのだ。山の中まで分けいっ  
て馬を探すのだが、嗚呼馬は何処に？人は何処に？はたまた出口  
は何処なのか？ (何故、米國がヘトコンに敗けたかがわかつた。)

一時間半程、馬との馬鹿し合いの後騎乗。その第一印象。

クソ、ダバ駄馬ダ。十一時頃より作業。昼まで新厩舎にて乾  
草積み。昼頃K君。宿舎に帰る。残念ながら帰札とのこと。

一時から五時まで午前と同様に作業。しかし、トラクターが草  
地に乾草を取りに行く間五分から十分、休めるのだ。その時の微  
風の心地良いことノ。その後のトラクターの来る音の頭に来ることノ

《合宿名言》

「筋肉痛なんてものはネー。やりゃー直るんだよ。だから走りゃ  
ーいんだよ。」(I兄談)これだけを読めば別に何ということは

ないが実はこの当人が筋肉痛で筆者に足をもませ、ヒィヒィ言っていたのである。

三日目 七月十七日 晴れ 午前ソヨソヨ 午後ぐわあー。

今日は、騎乗の際、鞭を持たせてくれる。といっても木の枝。皆、競馬さながら、ストレス解消とばかり、パチパチひっぱたく。しかし、駆歩が持続できない。あぶみがぬげる。

作業は昨日と同様。今日の午後は、モロに暑かった。作業後、腕立て伏せをやらせる鬼もいるし……。夕飯のフルーツボンチがうまかった。

四日目 七月十八日 晴れのちくもり

午前中騎乗前に作業、山積されている乾草をトラクターでくずし、我々がフォークでバラまく。戦車の様をトラクター、大迫力騎乗後、昼食まで三十分程の時間、休みになるかな、という期待は甘く、作業。午後からは、既車にて乾草つめ。

今日は、曇っていたので涼しく、割と作業は楽。昼飯前にK兄、E兄、さっそうと実にきれいな（相対的に）格好で到着。それ以後I兄は、帰れることの喜びに満ちあふれ、顔の筋肉、緩みっぱなし。精神的緊張が緩んだ為か、それまでの疲労が、どっと出た様子。「ああ、疲れた。」実感をこめて独白。

（P兄ロー、何が帰れるだ、アホー。全員の気持を筆者がかわって。）

五日目 七月十九日 曇り

落馬者なし。（これは記録中の記録）

以後、記録は続くが、五日、六日となってくると、作業には大

分慣れてきたし、そう暑くはないものの、累積された疲労が、心身共に影響を及ぼし始め、これ以上書くと筆者の人間性を疑われるのでこの辺でカットする。

この合宿の目的としては、馬術における技術的な面と、馬術部生活という両面より挙げる事ができよう。前者については、駆歩のスピードとその反動に慣れること。後者については、清々しい自然の中で、一致協力して作業をすることによって、相互理解を深め団結心を培うことであつた様に思う。この両面の目的を今の段階で振り返ってみるならば、両者ともかなり達成されていたようだ。実際、私達一年目が、あの合宿の時程馬にのり、駆け回るといふことは、考えられない。腰が痛くなり、軽速歩をとるのが辛い程だった。又、相互理解（言葉は堅苦しいが）という面でも実に楽しい雰囲気、特に、付き添の三年目諸兄の普段見せぬ一面を、かいま見ることができて有意義であつた。一例を挙げよう。

E兄談（六日目）

「俺、一度でいいから女の子のヌードを写してみたいよ。」

「ヌードは情緒だよ。西田にはこれがわかんないのか？ガキだなあ。」

K兄談（六日目）

「……俺なあ、昨日の夢は、中央線に乗ってヨー。女が俺の○をさわりにくるんだヨ。その中で……」

（後は兄の現在の立場を考えてカット。）

同兄談（七日目）

（兄のいびきがすごいと、もっぱらの評判、隣りで寝ていた、

A 兄、ボヤク事頻り。兄、しらばっくれる。恵廻時代の工兄の苦勞がわかる。それでも)

「え、本当か？ お前、本当に確かめたのか？ 枕元に顔を寄せて聞いたのか？」

(兄の体形からいって、間違いないのだ！)

まだまだ、楽しい事、苦しい事、数限りなくあった。しかしながら、今、思い返し。一番心に残るのは、あの青い空、カンカン照り、濃い牛乳、うまい飯、桑の実、そして既の音である。

七日目 七月二十一日 曇り 時折 霧雨

いよいよ帰る。最後の仕事。

トラックに乗り込み、一路下界へ。霧雨が降る。嗚呼、霧雨が降る。山は、別離の涙を見せまいと雲中に没し、馬はいつもの如く、ひっそりと茂みの陰に寄り添い、そして車は、着実に、走る。つづれ坂を下る。車が止まる。もう、終りだ。

バス停で、皆が見送る中を、霧雨の中を、車は、また雲上の地獄へと、つづれ坂を、着実に、着実に、登る、登る。

高木先生御夫妻、小栗コーチ、それから農場のおじさん達  
どうも色々々々、お世話いただき、有り難とう御座いました。

合宿について

二年目 阿部 一哉 哉

合宿の報告を書くにも、時がたってしまった、記憶もさだかでない、書けないわけです。合宿がどうあるべきか書こうにも、考えをまとめたことがないので書けません。思いつきを書いて、ばけの皮がはがれるから書けないのです。

ただ、合宿は、作業のための合宿から、練習能力をあげるための合宿にするのが、ほんとうのよい気がします。かしこくなるための合宿でありたいと思います。

## 卒部生自己紹介。他己紹介

卒部に際して皆、言いたい放題のことを言っています。但し、初めに自己紹介。後に他己紹介を載せています。

### 南 部 孝 一 兄

一九四九年 北九州市八幡区出身

家族 父・母・祖母・妹二人

身長一七一cm 体重六二Kg

視力 右〇・三 左〇・二 乱視+軽い近視

性質、極めて温厚且つ従順なれど時により頑固、狂暴性を発揮することあり。本人と致しましては、ごく普通の性質だと考えております。

学力、優秀ならざるも不可なし。故郷では期待のホープとして、当地札幌の知る人の間においてはきわめて不真面目な一学生として通っております。

女運 まったく縁なきものとして、しっかりと自覚しております。(冗談ダヨコレハ)

以上を要約致しますと、人並みに恋や学問に悩みやみかつ食欲おう盛で、いたって健康かつ明朗などこにでもいるような平凡な一学生であると自分では考えております。

以上の通り相違ありません。

馬を可愛がる事ではおそらくクラブ一であつたろう兄、それを行きすぎと考えた一時の私ではあつたが、結局、兄のおかげでクラブ全馬の馬体管理が向上した事は誰も否定できないであろう。気がいが馬と言われたりヒト・猫のようにおとなしくさせたのは将に兄の愛情だったのであります。北日本大会のスティールで小さな千里馬がバンケットからはい上れなかつた時、落馬と記録されても馬からおりてチョンを助けたあの姿が今でも目に浮ぶのであります。

馬を凡てとする人、はたまた勉学の徒。硬派、あるいは軟派。やさしい人、恐い人。男しか相手にしない、いや常に女を求めている。彼は常にこれらの両側面を、備えているのです。彼は……、知る人ぞ知る、変身忍者なのです……。

### 側 近 彰 兄

「コン、コン。」

「オリヤ。」

彼は昔、その庵を恵廻寮にかまえていました。今は寮を追い出されて一人寂しくアパート住いである。一人の方が都合の良いことがあるのかも知れません。その彼の部屋の前に立つと、ドアのうちつけられてある階鉄にまず目がいきます。そして寮生時代の名札が。私はドアをノックする前に、一度大きく息をして、無意識のうちにこれからおこる事に身がまえてしまっている自分に気がつきませす。よし、と思ひノック。

「コン、コン。」

「オリーヤ。」

時には耳の鼓膜も破れよとばかりに、恵迪時代のくせでどなるので、すから訪問者には至極迷惑な話です。知らない人は氣をつけましょう。

「言うとかんといけんのんは酒が好きなことじゃのう。底なしじやあねえんじやが、オトコ同士の酒ならどこまでもつき合うてくれるんじやが。ウイスキーよりも日本酒のコップ酒が似合うのう。なんでいきよんか知りやあせんが文学部の独文科へ行きよんじやが。「イッヒ・リーベ・デッヒ」なんて言うたことがあるんじやろうか？しゃあけどオトコらしいから案外もてるかもしんんでえ。この先何になるんか知りやあせんが小学校のしえんしえいにでもなつたらニッポンのガキもちつたあましになるかもしれんのう。それがええでノリチカさんよ。」

## 現役部員自己・他己紹介

部員同士、適当におだてたり、けなしたり自己紹介ではオーバーに自分を売り込んでいます。但し、自己紹介が初めに、他己紹介が後に載せています。

## 景山博文兄

三年目

私のスキな歌手—歐陽非非。私のスキな場所—ベトナム。私のやりたいこと—寝ること。私がスキな漫画家—パロン吉元。私のスキな映画—「男と女」。私のスキな雑誌—アンアン……ヒドイネ、私のキライなもの—わたくし

兄は今季の主将であり、これから一年多くの苦勞を背負って行く、イエス—キリストの様な人です。一見軟派風、そして根も軟派。その兄がどうまちがったか察察にいます。変ですな。

最近兄から「へっへっ」という笑いが聞えなくなりました。なにをかくそう兄も、去年の南部兄に続いてついに年男。やけこの年は新しい転換期なのでしょう。部の責任、自己鍛練、そして残された一年、がんばりましょう。

### 吉野勝之兄

三年目

大阪府茨木高校の出身です。生まれながらの甘党で、バナナ・ケーキ・アイスクリーム・アンミツ・ミツマメなどが大好物。趣味は、馬に乗ることの他に、なんだかんだと頭をふり絞って物を創る事が好きである。それから、忘れてならないのがサイクリング、自然の風物に肌でふれる事を好む。ところがだ、最近、その俺の大事な、まだ月賦も払い終わっていない自転車を盗んだ奴がいるのだ。だれだノ出て来い。

長年の夢がかなって、農学部 of 林学科へ移行しました。将来は清く正しく美しく生きたいと思っております。迄う御期待。

大阪生まれ。人間関係の根本は「信頼」であり、人と人との「和」にあると主張する。その言葉が彼を象徴している。

明朗でサワヤカだ。そして優しい。気のいいところも見せるから、例の彼女を嫁さんにもらったら、敷かれるかも知れない。しかし、彼は「男」なのだ。そこがいいんだよ。

今年副将を務められるそうで誠に御苦勞様な事だと存じ上げます。一見細い目にスラリとしており、優しい感を他人に与えますが、芯は強いようだと思っております。主将を側面から助け、かつ頭を柔らかくし、時には鬼と憎まれる位に部員を取り締って下さい。憎まれたところで高々一年間ではありませんか。私が拝見致しますところ、主将に憶するところなく意見を述べるのはあなた様位しかいないのではないかと又そうなっていたかなくて

は、私共と致しましても困ってしまっているのでございます。視野を広く持ち、どうか馬術部を栄光へと導いて下さい。

### 相川宗蔵兄

三年目

東京生まれの東京育ち、繊細なフィリリングとハードな容姿でせまるまれに見る都会感覚派。名前は相川宗蔵。嫌いなものは煙草、女。なまーんて書くと非難がわくけれども、実際その通りなんである。繊細なところはさておくとしても、ハードな容姿は見ればわかる。酒は一升過ぎたら嫌いになるし、煙草は付き合ひ程度だし、女には縁がないときてはこれ全て好きでない。正に真正銘の都会感覚派である。今は農学部農学科に行つてつつましやかに暮らしている。

先ず頭に浮かぶのがコンバの時の寮歌 前口上である。実にうまい。寮歌を歌いやすい声なのであろうか？ 自分の部屋では、コーヒー豆をひいて飲むのだからかなりうるさい。それも色々な種類をそろえてあるからにくい。酒はよく飲む。強い。こういったことにはかなりつき合ひもよろしい。何かという顔を出す御人である。

ヘタなことはしゃべれない人である。後々まで憶えていて、時々、ドキッとさせられることがある。よけいなことはしゃべるまいと思ふ。だが不思議なことに、この人といるとしゃべってしまうのである。腹の中を見透かされているのではないかと思ふ。しなしみのもてる雰囲気をもった人である。

彼の名前と、その風貌のイカメンサについては、とやかく言まい。幌北庄のコキタナイ一室にて、部員にコーヒーを惜しげも無く振舞う様は、まるで仏様である。彼と羊蹄との掛け合は、三河凌才のそれである。「ヨウコォー、ヨウコォー……：パァカァホォー。」馬匹として、馬の馬体管理に非常に気を配っています。

## 江口州志兄

### 三年目

生れは長崎県で、高等も長崎北高。単身、北海道へ乗り込んで来た次第です。しかし、なぜ北海道へ来たかったのか、今になってわからなくなりました。高等の時は、北大へ行きたいと言ったら、皆に珍らしがられたので、なんかかんかと理由をつけて、自分を弁護していたようです。でも、今になってあの時の自分の気持ちにどうしてもガテンがいかない。やはり、月日を感じます。

そして、小生ももう四年生です。あと一年、精一杯やっていきたいと思っしていますが、しかし、こんな小生が馬術部に三年間も在部できたなんて今もって不思議なくらいです。今思えば、馬術というものに関心をもち出したのは一年目の後半です。その時はほんとうに馬術というものがわかりませんでした。(今は以前にもましてわからないことばかりですけれど)でも、それだからこそやりがいがあったのでしょう。今は別に後悔はしていません。これまで、なんとかクラブも勉学の方もやってきましたが、四年生になつていそがしくなるでしよう。でも、なんとかやれる自信は持っているつもりです。

おちつきと安定を感じる今日このごろ。人間で、変わりつづけるものらしいけど、その人がその人たるゆえんのは、だんだんあらわれてくるし、それを、なんだか、このごろに、完全に自分のものとして、確立せられたみたい。一人一人をよく眺めていいんだよ、いけないなだよ、と、ことばにたいどに、おしえてくれはって、なんやら、おかあちゃんみたい、です。ゴメンナサイ。

小生たち野蛮人とは少々ハダが会いにくい感ある学者風。ともすれば酒、女に酔い、おぼれる世代の中で黙々と生きる姿はさすがしさをおぼえます。

今年は四年目。あと一年、あと一年と言っていますが、正念場をこころえている。

最近下宿を変え、新しい生活をはじめたようですが、野蛮人あまり染まらず純血のまま最後の一年がんばれ。

かばんを小脇にかかえ、頭髪を振り乱して練習に走ってくる姿がいつも浮かびます。これがエグッチャンです。

## 佐伯久美子姉

### 三年目

① 昭和二十七年十二月十一日、四国の玄関、香川県の丸亀市に生まれる。ここは小さな城下町。残る塩田、昔からの港。そして、うちわの町です。お米とお酒のおいしい所でもある。

② 北大女子寮に住みついておよそ三年。かなり真面目に優雅にぐうたらに暮らしている。もう一年くらい居すわる予定。

③ 農学部畜産学科二年。遅刻ばかりしているが講義は好き。



④ 親しい友——不器用ながら、なぜか多い。信友——不器用ながら、なだかいる。嬉しい。悪友——かなり多し。旧来の友　かなりしつこく続いている。仲間あり。寮友あり。ルームメイトあり。級友あり。同志あり。飲み友だちあり。ペンパルあり。おさななじみあり。ボーイフレンド、恋人、共にあり。かなり恵まれてゐる幸福な人間。

⑤ 146・47・83・60・85

⑥ 長所　たくさんありすぎて書けない。

短所　たくさんありすぎて書けない。強いて言えば、自己表現過剰ぎみのこと。

我が馬術部の女房役を一手に引き受けているような人である。(他の女子部員には失敬ノ)部室のこまごまとした整理、作業の終わった後のお菓子と熱いお茶。男子部員の中には「お嫁さんをもらうのだったらこんな人がいいな。」と密かに心を寄せている人もいるのではないかしら。(ちょっと言いすぎたかな?)とにかく良妻賢母型の典型といった感じの女性である。でも内に秘めたる情熱は……………。

今年の四年生は五人残りました。最近では珍らしいことです。そして、女性では彼女だけが残りました。なにか、売れ残ったというようなニュアンスがありますが、御勘弁を。でも、よくぞここまで。彼女の性格はいまさら述べる必要はありません。四圍の女の特質でしょう。がまん強いのでしょう。それにもまして、控えめです。影で部のためにいろいろを雑用をやってくれました。

(知る人ぞ知る)彼女は、最近、馬に乗りません。でも、馬が好きをようです。いや、動物そのものが好きなのでしょう。時々、彼女がああ優しい目で、馬を見ている時、すばらしさを感じます。安堵感を感じます。彼女が、部にいて良かったと思います。またそういう部でなければなんの魅力もないような気がします。部はあと一年ですが、勉学と共に合わせてがんばって下さい。

S君曰く「それにしても佐伯さんというのはいい女房になるなあ。」そうなんです。彼女こそ往々にし方の時代から今日まで受け継がれて来た日本女性のあるべき姿なのです。よかったです。本当によかったです。石油危機だとかいう今日の様子を世知辛い世の中に、彼女の様子を大和撫子が一輪咲いているというところがわかっただけで、私はうれいのです。他の女子部員このぐらいいいことが書いて欲しいだろう。少しは見習え。バカ。

M君曰く「でも佐伯さん最近めっきりきれいになったとか。」彼女もそろそろお年頃というところか。

### 水野豊香兄

二年目

滋賀県立彦根東高等学校出身

獣医学部　二年目　水野豊香

この苦しい生活が、卒業してみればほんとにすばらしい思い出になるのでしょうか、わかりません。

半日ねばって、「燃えよドラゴン」を3回見、興奮さめやらず、

柔道でできたガニマタでかまえ、「トリヤー」

日高合宿にスケッチブックを持参。ひとり黙念絵心を味わう。オカリナがいいとも言う。

だれかさんところから、おみやげにモルトを選び、学部からは牛肉を運ぶ

俠氣と情のからみあい。やるね、奴も。

また認め終えぬほとぼりの、薄褐色の絨毯の、隅から漂う芳香に、恨み悔みは多けれど……。酔った時彼が唄う歌の一節である。この男の好きな煙草「朝日」、好きな酒「超特撰金滴二級」

我が馬術部二年目の中では最優秀なる成績で、現在ではエリートの集りである獣医学部へと移行したのである。その為恩恵を受けた者の多かつた四十八年初冬であった。筆者も牛肉と馬肉のすき焼きを賞味した一人であるからだ。

又この男、男の操を守る会を真先に脱退し反旗をひるがえした張本人である。ユーさんよっかり勉強せにゃあかんで。

### 本村洋文兄

### 二年目

月日の過つのは早いもの、ついこの間、新入生歓迎コンパで「ヨコシクお願いします」と言ったこの僕も、もうすぐ三年目。今マネージャーをしています、この言わば裏方役を立派に務めあげると同時に、表でも働きたいと望んでいる野望多き一青年であります。

一見、こう軟弱そうで、ヤングなんとかの広告に出てくる人の

ように足が長く、話す時のその音声が甘く、女であれば誰でも色目を使いたくなるような人なのに、何故かまったく女性にはモチない。どうしてなの教えて!! この人も何故か授業には出ないで黒いカバンを持って、あっちへ行ったり、こっちへ行ったり、まるで蟻のごとく動き廻っている。よく身体が保つものだと感心するばかりであります。マネージャーっていうのは本当に大変であります。本村君!! でも授業に出ないで留年しちゃうよ。今後の御健勝を祈ります。

### 添田昌一兄

### 二年目

こういう試みには売り込むものであろう。どういふ訳か農・畜に進み、どういふ訳か馬に乗っている。大学に入って初めて馬と出会い、俺は馬に生まれた方が幸せではなかったか(いやあんなにこきつかわれるのはゴメンダ)など思っている。馬術部に入り、大学生活を送り、精神的にも肉体的にも強くなったと思う。以前の生活では考えも及ばなかった人物や環境に囲まれて生きていたのである。

だが淡々として毎日を過ごすことに、時としてためらい酒を飲む。だが次の日はまだ酔いがさめやらぬまま馬に乗っている俺である。

頼りないようで、どことなく頼りがいのあるお兄様(おじ様?)です。年のせいだ、とかいう、うわさもありませんが、彼が活動しはじめたら、年なんか、何のその。あっという間に、仕事をかた

ずけてしまおう。ロマンチストのスーパーマンです。ロマンチストといいますが、彼も最近では、恋は恋、馬術は馬術。これからもクラブの最先端で、活躍が期待される、彼です。

私のあなただけの印象を述べさせていただきますと、一見都会的センスを持ちあわせているようでなく、落ち着いているようで落ち着いていず、お堅いようでないような、しっかりしているようでそうでないといったヌーボーとした感が致します。又時々生意気ダナと感じさせるような所もあります。がしかし、かなり一生懸命やっているなというふうにも感じております。要するにですね、もっとピリッと締まったところを見せて欲しいですね。それに謙虚に自分を省りみることも時には必要ではないでしょうか。自惚れはケガのもとですよ。頑張ってください。期待しております。

## 阪上 泉兄

二年目

私、生れも育ちも東京でございます。神田川で産湯をつかい……。ではあります、枯葉が舞うのを見ては人生を憂い、雪が降り来るのを見て詩を誦んじ、又、春に花の香りが野を包むを感じては恋に憧れる。そんな自分をいつも想像し、ああ俺は孤高だと独り虚空に目を向けている。そんな孤高の哲人と（いや、これはいいすぎ、ロマンチストぐらいだな!!）ならんことを夢見て、風邪を引いた人……それが私なのであります。

彼はとってもいい人です。彼こそ男の中の男だと思います。あ

んなに心が大きくて、からだも大きくて、口も大きい人はちょっとないでしょう。あの変化に富んだ笑い声。私は以前の笑いの方が彼らしくて好きでした。彼は何でも真剣に考える人です。笑い方を変えたのも悩んだことでしょう。男は失恋すると強くなると思います。彼は最近また強くなりました。あんなに何人も強くなる人は珍しいと思います。これからはがんばってほしいと思います。

## 尾崎弘康兄

二年目

色男、金と力はなかりけり。とは良く言ったもので、私に、びつたりの言葉ではないかと常日頃思っています。ところが今の世の中は、どういふ訳か、金と力がないとなると、女の子もあまり欲迎しないようで、私としては非常に辛い立場に追い込まれているのです。その点昔は打算的な女の子は少なかったようで、昔は良かったですね。こんなことを書くと増々世の女性達から見放されそうですので、私の将来の暗澹たる様を案じ、もうやめます。

まだ成年に達しない「ヤクルト少年」も、もう酒もタバコも覚えたのだ。でも、あまり関係ないみたい。

「カムイさん」と呼びかけつつ、よく馬の世話をやっている。髪を洗った直後の顔を見たことある？ アッシュラ風で、凄いいいか、可愛いといういか……。でも、そんなこともやっぱり関係ないみたい。

林学科に移頂した。すべてはこれから。もうすぐはたち。

眼鏡の奥にキラリと光る精悍な目、風になびく長めの黒髪。くわえ煙草がよく似合う——。というように小説のようにうまくいかぬのがこの世なら、この世で懸命に生きている姿こそ美しいのではないだろうかというよりな人です。二年目の貫祿もようやくついて来た感じですし、勉学の方も、林学科きっての秀才という噂も有り、頼しい限り。カムイさんと兄とのコンビもきまってる感じ。頭張れ尾崎兄ノ

### 柴沼 俊兄

二年目

傲慢、高慢、過自負、自惚、見栄坊、それらを三度の食事と共に、体内に流し込む。が、それらの表出に怯え、全てのエネルギーをそれらを隠蔽することに注ぎ尽くす。そしてポロポロに疲困し果てたあげくそそくさと蒲団にもぐり込み、そって嗚咽する日々。

彼は常に思っている。「ボンチはもう嫌だ。」と。しかし、彼はそうしなければ、飯の食上げになって死んでしまう哀れな悲しい大根役者なのである。

理学部の化学第2学科へ移行しました。彼の学科は実験実験で相当に忙しい様子。最近好きな手料理も作らない様で、めつきりアカデミックになりました。乾草運びの際、事故を起こして相手の車のドアを、ぶち壊しましたが。示談を五分五分にもっていくところなど、なかなかたいした蕪度胸というか、図々しいというか、見あげたもんです。

兄は相川兄と兄弟ではノ

初めてクラブへはいった私はこう思いました。サイズから体力もよく似ているのです。この兄弟、働き者兄弟です。二人ともすぐ土方として生活していける。そんな生活力生命力の強さを持っています。この人、馬術部になくはならない人です。

しかし時々、人にわからない様な事を言って、みんなを驚かせる。なんとなく、影を持っているアランIIドロンの様——同大笑い——。人生に対する思いをめぐらせている時、兄はなやんでいるのです。しかし多くは語りません。それだからこそ、時々発する言葉がみんなを驚かせるのですね。

### 阿部一哉兄

二年目

昭和二十八年六月、岩手は一ノ関に生れる。百姓のこせがれとしての運命を背負う。幼年時代、幼稚園なるものを知らず、東京が日本でいちばん遠いところと思う。小学校時代、ベビーブームの終り者としての運命、ガキ大将になれず。もっぱら、草野球と、木登り、プロレスゴッコで暮す。中学時代、全生徒で一五〇人ぐらいの学校、もんもんと過す。高校時代、頭が先走りきみ。大学時代、白紙の状態が続く。

さあ今こそ 立て 立つのだ。(?)

我々北大馬術部は、不潔で破れた服をトレードマークにしているのではない。たまたま、風呂に入ったり、食費を切り詰めてモダンなシャツを買ったときなどは、髭を剃り、髪に櫛を入れた

りして、たとえ空しい結果に終わろうとも、一年に何回か大きなイメージチェンジを図るものである。しかし彼は、この一年、自らの風体を一度たりとも変えてはいない。無頓着からくるのか、中身に自信があるのか、センスが人並みを外れているのか、そこいらへんはトンと分らないが、とにかく彼はそれを貫き、かつ大変きまっているのである。生活面に於ても彼は自分のやりたいことを行動的にやっていく男である。小説より哲学の好きを彼。自転車を書と成し、街を出る彼。クラブを生活の一部とし、自分に於ける馬術の位置を考え、自らの生活を築いていく彼を見守ってやっけて下さい。

チベットからの使者、そのたくましい生活力にはただただ、圧倒されるばかりである。無口でとりつくしまがない感があるが、なかなか話してみると楽しい。

時として見せるその行動力には、目を見はるばかり。コンバの会計などオオザッパだが歯切れが良く評判が良い。

黙々の自分の道を行くといった感じ。風呂の帰りに、一ッパイヒッカケて、まだ満されずに又、何かを食いにいくという。もちろん食事の後であるというから、何か力強い感がある。

オヌン デキルナ。

## 荒川尚也兄

### 二年目

何を考えているのかわからないようなきらきらした瞳がひどく印象的を男です。一度彼は地球人ではないのではと思ったことも

ありました。そのくらい異郷的雰囲気を感じさせます。彼を見ているとついしつこくからんでみたくなるのですが、のらりくらりとつかみどころがなく、どこまで本當かわからなくなりす。でもまじめな話になるとびっくりするほどしつかりした深い考えを持っています。最近少し生気がないようだけど、疲れているのかな。

正確に云って訳のわからぬ兄である。多くは単純なる頭脳構成を持つ部員の中にあつて、兄は幾らか人並の複雑性を持合せているのかも知れない。人は兄の京都育ちが信じられぬというけれど兄の濃やかさ、柔らかさ、就中兄の訳のわからなさ等の中に、それらしい情緒の見出せぬことも無い。人並のところのあればこそ人並に恋もする。悩みもする。それが人並に到らぬ他の部員を悩ませもする。部員の唯一の誇りとすべき酒に於ても兄は部のレベルを越えている。焼酎を何杯かひっかけてその夜勉学に励んだと云うから聞く方が白らけてしまふ。羨やむまい羨やむまいとは思えども実に悩ましげな、訳のわからぬ兄である。

彼は高校時代六〇キロのベンチプレスを持ち上げていたが、現在は衰えて……え……その……四〇キロのとある生き物一か支えられないのであります。人生は計画通りにはいかない。どんななハブニングがあるか。誰にもわからない。彼はその渦の中で精一杯生きていく悩み多き二〇才であります。

## 常田和子姉

### 二年目

一時は十人以上もいた女子も現在は五人になってしまいました。そのうち二年目は私と若松さんだけ。彼女と二人なるとかがんばっています。

ところで、昨年の部報の文芸欄の文芸欄に掲せられた私の文について、誤解があるようなので一言。あの内容は、北勇に対する熱い胸のうちを吐露したものです。蛇足ながら気になりましたので。

紹介というのは他人がした方が当を得ているようなので、あとはお願ひします。

女の子らしい女の子と言ったら失礼になるかな？ もうりっぱな女性をつかまえて。でも笑ったらあどけない顔はとて二〇代には見えない。さわやかという言葉がぴったりの人です。

## 若松光子姉

### 二年目

歩くときの一瞬宙に浮いた方の足にも、重力がかかっていることに気づいていなかったときは、ちゃんと歩行運動をしていたのに、足をあげたとたん、急に重力を感じた時以来、バランスを崩してまともに運動ができなくなった、のに、近ごろ、重力のかかる意味がわかりそりな気配なので、おもさは感じて、おもい、おもいと不平をいわなくなりました。もう、黒におしつぶされたり、山になりたいと思うことも、なくなりました。

大阪出身の姉は、千里馬と〇〇兄といっしょにいる時が一番幸せそうな表情をします。それで姉はやはり女性でありました。失礼。しかし、姉の大阪弁は一種独特の味を持ち、野郎共の心を慰さめる力を有しているようです。姉よ、一層頑張ってください。一年くらいドッペッテもかまへん、かまへん。

全てを知り尽くした目を顔中に置いても、世の中に全力で当りし、それでも常に微笑を絶やさずにいるけなげな人間を感じさせる才女。

しかし、その一見罪のなさそうな微笑こそ、彼女の全てを隠匿する処世の術なのである。私は、その微笑を打破できず、本質を述べることができない。ただ、その一瞬の間隙から垣間見たものは、彼女の深海より生出る気泡の如きの願望の強さと、練磨された恐ろしさと、女であるということである。

## 西田篤司兄

### 一年目

彼は、まだ若干十九歳の子供である。彼の言動の凡てはそこから発し、そこに終っているのである。話しを好む事も、勉強したいようなふりをする事も、また、馬に乗ることも。彼がもし、大人になれたなら、おそらく、その日から大きな変化をするだろうと思える。なれたならの話したが。彼も、そう望んでいるようである。

数少ない札幌人の一人ではあるが、馬術部の悪の巢である北二

十條界隈に棲息して、ときどき帰省をしては、我々の舌を染しませてくれる貴重な存在である。東京に行ってしまった彼女の話をしている時より、コンパで酒がまわってきた時の顔のほろが彼の本性を表わしているであろう。目がどっかどすわり、相手の顔から二十センチメートル位離れた所に焦点を合わせ、目、口、手、足（？）をもつて相手を圧倒する迫力である。その強迫的な積極性は、この部報の原稿集めにも表われ、我々を恐怖のどん底に落とし入れるのである。でも忘れてならないのは彼のやさしさである。若さを感じさせる中にも頼りがいがあり、正統なことに對する協力には労を惜しまないといった性格には救われる。「少しぐらい原稿が遅れても許してくれるだろう。」我々のこんな果ない望みなど、すぐに打ち砕いてしまふ彼である。軟弱になるなよ。

彼によく似た工学部の教授であられる親父さんの息子。札幌に家があるが、別に居を構える金のない金持。たまに家へ帰ると、脱皮をするのか、人膚になり、英国王室御用達する紅茶を携えてちよっとした紳士になって帰って来る。蚊取り線香を買いに行つて、その店の主人に家庭教師を依頼されるといふ程のまじめ人間。追記すれば、最近、首になつたようであるが、それ位のこととは動じない豪快かつ勇敢な男。彼こそ、日本を沈没から救ひ、左京を奈落の底に沈没させる男であろう。皮肉ではない。

## 荒井 隆兄

一年目

私、みんながなんと言おうと、かわいいかわい隆くんなので、いつもどこか遠くの空を見ているような、ロマン的な男なのであります。かつて入部当時は、非常にきれいなかつこうをしていて、みんなから羨望の目でみられたものですが、最近は何の人にあわせてきたないかつこうをしています。

この私は大の短気。すぐおこります。そして本気でおこります。これから先、馬に乗っていくのにはこれではこまるかも。

現在の私の不満は、この美貌にもかかわらず、女の子が一人も寄つてこない事でありませう。全国のみなさん、この不合理は自弓党の悪政からくるのです。田中角栄が悪い。そうです彼が私に近よる女の子を自分の女にしてしまうのです。

文類にいながら、ドッベルドッベルと一人で騒いでいやる。彼がドッベルなら俺だつて必らずドッベルよ、ジョーダンジャナイ。そう彼が騒ぐにも訳はあつた。

以前彼は「ニセ学生」もしくは「エセ学生」と呼ばれていた。更に彼はコンパに無くてはならない存在にまで出世し、鬼かと思われたほど恐い方を一升びん片手に圧倒したこともあつたほどだつた。そのころなら、なるほどなづけるのである。ところが最近の彼を見ると、「飲めなくなつちやつたんだヨ。ホントダッテバ。」とかなんとか、乙にすましていゝし、彼の部屋を訪ねたときには必らず、机の前に座っている（か競馬情報をあさつていゝ）のである。馬術部にあつて文化生活を営む者の一人。

今年神戸からやってまいりました、弱輩者であります、よろしくお見知りおきのほどを。僕の通っていた高校にも不思議な事に馬術部がありました、そこで一応三年間馬の背中に揺られながら暮らしました。一度はこの経験を生かして全日本、いや世界へ羽撃く日を夢見たこともありましたがこの頃何か先が見えてきたように思われ、自分という人間の器のなさを痛感している次第であります。でも「今に見ているほくだって。見上げるような大木に。」という小学校の時の校長先生が言われたことばを胸の奥に秘め、これから四年間自分を馬術に賭けてみたいと思っております。どうぞよろしく。

現役にしてはやけに落ち着いている。いい体格、そこから出るしぶい声、何といても名前がカッコイイ。コンバの席などでは（本来馬術ではあるべきことではないが）ギターを持たせ、タクローの歌なんぞ歌わせると最高にうまい。来年はリサイタルとか。高校時代から馬に乗っていたというだけあり、俺なんぞよりはずっとうまい。（少々誉めすぎた）

「鬼のはずのブホー委員はどうした？」「何い、もう帰ったあ。俺の原稿（期日遅れ）も受け取らずに、オ母チャンのところに帰ってしまったのか。せっかくこっちに來て八ヶも減ったと喜んでいたので、又神戸でブクブクになって帰ってくるのでは。」

やや太めの彼。神戸高校の出身。我が部の一年目です。高校時

代、馬に乗っていたそうで、たのもしい限りです。また、北大馬術部員で、過去四十年のうち、馬術情報におのれの名を載せた者はそうありません。それを彼は、高校時代に成し挙げたのです。おそるべき奴。でも、彼が馬の事を話す時、あのふっくらした顔がいきいきしてきます。見ていて、こちらが嬉しくなります。そんな彼でも、やはり悩みはあるのでしよう。体重のことを聞くと、女の子でもないのに、口をもごもごさせて、はつきりしないのです。でも、上級生にとってしごきがいのある彼です。でも、二年生として、馬術部員として一生懸命やってくれるでしよう。

## 佐藤 豊兄

## 一年目

生れは長崎。札幌に來てからは、人呼んでバチブロ。今、バチンコで稼いでステレオを買うつもりです。十九才。独身、子供なしという自分では品行方正な青年だと自負していますが、他人様はなかなか認めて下さいません。非常に残念です。

彼の現役らしからぬ風貌とその話し方。おやじさんの建てた会社をぶっこわして一から始めたいなどと、夢はでっかい九州男児月賦でコタツとテレビを買いました。ほしいものはすべて手に入りました。あとはただ……だけなのです。お互いがんばらうね。

同じ九州は長崎出身ながら、江口兄とは水と油。もち上げて、兄が大江健三郎なら、彼は石原慎太郎。とは思っていたが、なかどろして、その昔、両家は同じ、アイスクリーム屋だけあつ



て渡る魂しい一つりみえる。パチンコ、酒に、女の子、墮ちては  
みたが心のさげび、「何んかが、ワシを呼んでいる。」できる。

### 平野雅裕兄

#### 一年目

自己紹介を書けたなんて、嫌ですよ、ボク。  
ボクって内気なんですよね、恥かしくって。

彼は北大でも数少ない検定合格者の一人です。そんな彼ですか  
ら、我々なんかより、非常に落ち着いた感じをうけます。以前に  
馬に乗っていたそうで、春の頃は、上手なやつが入ってきたとい  
うことで二年生には刺激になりました。

顔に似合わない声で歌を歌いますので、コンパの時は酒をどん  
どん飲ませるべきでしょう。

### 佐野淳文兄

#### 一年目

神奈川県立鎌倉高等学校卒。昭和二十七年麦秋十一日小樽にて  
出生。以後札幌・武蔵野・藤沢・京都を経て、札幌は夢多き恵廻  
寮に、しばしば青春の宿りを求むる。今、僕は恐しい悪魔に取り付  
かかっている。悪魔という悪魔である。それは、朝を夕を、授業  
中に、読書中に僕を襲い、正常を、僕の思索、進学活動を妨げる。

学ぶために学べよ！ 自分の体験を意識化せよ！ 自ら学ぶこと  
を棄てた者に他人を教育する権利はない！ こんな戒めの言葉も  
やがては空になり、今日も蒲団に潜り込む。

ヒゲにとらわれてはなりません。あなたにも、彼の、あの秘め  
たる美と、純粹さが、感じられていることと思います。本人も  
気づかぬくらいに、小さな部分に、それゆえ凝縮されてあらわれ  
ているのだから、見おとしそうになるけれど、でも、シロだけは  
知っているみたいです。それはね、ぼくを見つめるときの、あの  
人の目だよ、と、いうのかもしれない。

この男の容貌だけを見れば偉大な哲学者、又は革命家、果して  
はイエス・キリストを思わせるものがある。それもこれもあのあ  
ごのほうほうのひげが大きな役割を果している。でもそのひげを  
剃った時の顔のカワイイこと。そこにひげを伸ばしている秘密が  
あるのかも？ しかし何と言ってもあの野性味のある感じはほん  
とくに素敵！ 「ジュンちゃん、こっち向いて〜」。

### 横沢敏夫兄

#### 一年目

入部当初、「お前ドッから来た。」「和寒デス。」「そりか、  
ワッサムか。」以来九ヶ月、私奴を名前で呼ぶ者とそうでない者  
と半々、いや「ワッサム」と呼ばれる方が多いかもしれない。

真面目そうで不真面目、トツキやすいが陰険で、勤勉そうで非常に怠慢なのです。「近頃のオガタン不足には参ったなあ、燃料が無くて困る。」などと、理屈をつけて部屋では常に布団にくるまっているが、実は燃料をど有っても無くても同じなのである。

そして、(実際にお会いして証明したいのですが)私奴は音痴の傑物なのです。「オイ、ワッサム。」「そう攻めるなって、俺が似ているのか、東海林さんが似ているのか知らないけれど、音楽的でない音波を発し続けるのはツライんだよ。」あと三月すると後輩を持つ身か。更なる傑物の入部を請う。

出身地名ワッサムが入部当初より彼の別称となっている。この地名いづれアイヌの言葉から来ているのでしょうけれど、それを「和寒」と翻訳したところなど、この極寒の地にあつてその幾らかでも和げかशीといった願ひ、祈りが籠められているように思う。そして彼は正にそうした祈りの中で育つた人という気がしてならない。彼ほど温和な者はいない。彼の腹を立てた姿など見ることは出来ない。馬に蹴られようが咬れようが「はい、大丈夫です。」彼の奇妙な微笑は他人をも和ませる魅力がある。彼の下宿には彼の食つたピワだという種が小さな芽を出している。それを大事に育てている、そんな彼であるけれど、しかし、もう一つ覇気が欲しい。

体つきに彼の性格が出ているような、常に背すじを伸ばし一歩一歩、着実に、正確に地球を踏みしめる。その示すが如く、表面には出さないが、かなりり一徹物。時々、ドジをやるけど、リヒトとはよいカプブルの様に感じます。でもせめて馬上に居る時ぐらゐは、その硬さを解いてもよいものです。

燃料節約の近日、オガ炭ストーブで協力しているのは立派なものです。

### 石川淳子姉

#### 一年目

外の空気を、思う存分に吸いたくて、今年、初めて、静岡の温室から、とびだしてきました。でも、私って、鈍感なんですね。まだ、温室にいるつもりで、時々、ドジを踏んでしまふのです。一年間の同棲生活を卒業し、来年こそは、独立生活を。と、意気込んでいた私ですが、それもやはり、前途多難である疑いが、濃いようです。

クラブの中で女性を捜すことの、この難かしさよ、神は何故に女性独自の精神を創造をさらなかつたのでありましょう。あのバラ色に輝くホホ、妖しげに微笑むあの口元、その口元より零れ出る真珠の並び、あくそれは美であり芸術であります。その美が芸術が何んと口を開いた時の恐ろしきことよ。それは美が芸術が持つべき言葉ではありえないそれは野人の叫び。石川嬢よ、常に女性であつて下さい。(女性を守る会 会員)

人間が好き。何を考えているかわからないから。何を言いたすかわからないから。そして、人間と人間がぶつかり合った時、そこから何が生まれるかわからないから。

でもそのぶつかり合いを避けて通りたい時もある。

だから、人間と馬のいる馬術部に入った。両方とも一偏に知ろうと欲ばっている私。これからもよろしく。

とても女らしい人です。彼女のしなやかな指と、ときたま発する美しい声へ相当、改まった所へ出ない限り、この美声に出会うことはないのです。つまり、日常は……なのです。は、きっと、いかなる男性をも、悩殺することでしょう。また、彼女は、とても歌が好きで、そのレパートリーも、計り知れないものである。そして、その実力の程は、帯広の合宿で、いやという程、知らされました。名付けて、ジュークロック。ただし、このジュークロックは、歌うだけではなく、ディスクジョッキーも、備え付けてあるので、絶対、退屈しません。何はともかく、次回のコンパで、一度、彼女に歌ってもらおうのが、よいでしょう。多忙にまみれて、歌を忘れたカナリアにならないで、と願う私です。

彼女は、良いお嫁さんになることでしょう。他の女子部員には悪いが、彼女は、他の女子部員に欲しい。女性としての良い所を凡て持っているのです。だから馬術部の女としては、少々物足りなく思われるかもしれませんが。でも、それでいいのです。酒も、

煙草も、のまなくていいのです。コンパで乱れなくていいのです。それが普通なんだし、男の子は、そんな女の子が好きなのです。早く結婚する事です。

## 先輩寄稿

ここは、卒業生の方々からの御手紙と原稿のへ  
ージです。

懐しい先輩、同輩、後輩の寄稿です。

尚、御多忙中、多数の方々より、寄稿頂きました。  
した事、この紙面にて厚く御礼申し上げます。

鎌田正人

昭和三十年卒

御無沙汰致して申し訳ありません。道大会で皆さんにお目にか  
かり、又お世話になって以来さっぱり馬にも乗らずに過して居り  
ます。

馬術部も次第に馬の成績の良くなって来た事を喜んで居ります。  
乗馬について色々の事が言われて居る事と思いますが、大学四年  
間の間にどれだけ乗に馬に乗れるようになるか、そしてその間少  
しても馬を動かす技術を身につけるかという事が目標にならない  
でしょうか。自転車に乗るのでもなんとかベダルを踏めるのから、  
曲乗りまで様々ですが、これは乗っている人の平衡感覚の程度に  
よっての相違と考えられます。四年間色々な練習が必要でしょう  
が平衡感覚を良くするためにどんな練習が必要か皆さんで考えて  
みて下さい。

もう一つ、良く調教された馬に人形を乗せて障碍飛越が出来る

か。否、良く調教された馬に良い騎手でなければ良い障碍飛越は  
決して出来ない。是非良い騎手になって下さい。

来年も御健闘を祈ります。

敬具

吉本 正

昭和二十八年卒

内容の豊かな部報を拝見しては当時のなつかしい思い出をたど  
っております。私が馬術部に属したのは二年足らずの短かい期間  
だったと思いますが、札幌競馬場のアルバイト、第一農場の厩舎  
で泊り込みの馬当番（夜中によくロバの鳴き声で目をさませせら  
れたことなど）、障害を飛べなくて情けなかつたことなど数々に  
思い出します。

卒業後、仙台で数年、農耕馬に乗りましたがその後馬ともお  
別れし、もっぱら豚とすもやをとっております。

馬術部には何のお手伝いも出来ないで今日まで参りましたこと  
をお詫びいたし、部の発展をお祈りいたします。

去年から中山競馬場の近くに参りましたので馬との接触が多く  
あることを期待しております。

勝田代子郎

部の御発展を衷心より祈ります。

三十数年前憧れた幌都での馬生活は今尚、なつかしく時折り激  
務の余暇に想い出して居ります。幣方お蔭で元氣一杯乍ら昨今の

様変わり、世相に対処すべく日夜、忙殺されて居ります。

部員諸兄も二度とない学生生活を有意義に勉学にスポーツに、大いに、情熱を以て、努力、活躍されん事を祈ります。

### 齋藤善一

前略。

毎年、部報を載き、有難う御座居ます。

北大馬術部の尙一層の御活躍を期待しております。弘前大学馬術部も、部員諸君の努力でようやく部報第二号が出せる様になりました。いろいろな大会でお世話になると思いますが、よろしくお願い致します。

御健斗を祈ります。

草々

### 加藤正昭

四十年度卒

北武号の調子はどうですか。北隼号の学生自馬での活躍おめでとうございました。来年の活躍を祈ります。

### 梶村哲世

四十六年度卒

昨年は則近君の活躍ぶりじっくり見せてもらいました。下級生諸君の則近・北隼に対する労をおしまない態度にもうれしさを感しました。東京O.B会の方々にもお礼を言っておいて下さい。昨年の十二月から春田さんの紹介で馬に乗り始めました。やはり、

朝早い練習はきついですね。今年一年東京の大学に勉強に行く事になり。結構忙しくなりそうです。チョンをはじめ諸馬によろしく。

### 降旗正忠氏

工学部電子工学科43年

「寒月懸れる針葉樹林

櫓の音凍りて物皆寒く……」

寮歌を口ずさみながらの帰宅する今日このごろです。私を含め、北大人はいささかあっさりしすぎているのではと思います。大いに頑張ってください。

### 荒木伸也氏

十一月中旬八ヶ月の大西洋の航海より三崎港に帰港しました。これからは石油問題でマグロ船は大きな困難にぶつかりました。来年の春頃には北海道へ落着こうかと思っております。七四年度の馬術部の御発展をお祈りします。

### こぶし

東園基文 (9年卒)

昨日東京O.B会の乗馬会が池内武夫さんのご好意により馬事公苑で催されました。ご家族連れの方も沢山おられて、皆さん本当に楽しそうでした。その中で千葉幹夫さんの調教したアサマリウというすばらしいアングロアラブに乗っていた池田統洋君の乗

馬振りが、ひととき目立って美事でした。八木沢君の話では八百鞍位のキャリヤだということでしたが、痼症のある馬をよくあるかせておられました。ですが戦前にやかましく馬術をたゞきこまれた者の眼からすると、こぶしが気になるのです。これは決して池田君に限ったことではありません。近頃は中指薬指の関節のたるんだ、まるで脱ぎすてた軍手のようなぶざまなこぶしのなんと多いことでしょう。こぶしは出来るだけこじんまりと、丁度ジャンケンをするときの様に軽く握る感じが望ましいのです。馬にハミを味わゝせるためにそのこぶしをニギニギすることもあるのです。指の関節をたるませて、軽くハミを受けさせていると思うのは誤りです。ハミとこぶしとの連携にはもつと微妙さが要求されるからです。また馬術にぶかっこうは許されません。伏せたこぶしもしまらない姿といえましよう。こぶし位をにざと考える人はそれだけの馬乗りになれません。

それから近頃の学生の障害競技を見て思うことは、こぶしの高い人の多いことです。こういう人に限ってマルタンガールを付けています。皆さんも競技会でよく見かけられることと思いますが、あれはおかしいですね。マルタンをつけてソウラン節を踊るように靦を自分のヘソより高くたくし上げる人。あれでは馬に顔を上げなさいと教えているようなもので、あんなことでは立派な障害馬が出来る筈はありません。また騎手の安定もそこをわれます。その点ジョッキーを見習うべきだと思います。よくよくの馬でない限りこぶしを低く使えば馬は頭を下げてきて前下方に引かれるこぶしを感じるようになります。そうした乗り方をすれば見る人も頭を下げることでしょう。

お説教めいてしまつて恐縮をがら、こぶしと題するおそまつでした。  
四九・三・二五

### 同好会近況

ここ一年間の同好会の状況についてお知らせいたします。前会長の中沢道郎先生が三月に御退官されましたので、五月に皆様にお集まりいただき御相談の結果、馬術部同様河田啓一郎先生に会長をお願いすることとなり、先生には快より御承諾いただきました。それに伴ない事務局を今迄の片寄さんから新たに速藤さんにお願ひし、住所が北大歯学部細菌学校教室遠藤裕子気付に移りました。

会費の値上げが検討されました、今年度より年間五〇〇〇円とになりました。その内訳は会費二〇〇〇円、乗馬費三〇〇〇円で、前者は事務、通信費、連盟分担金、スポーツ傷害保険金などに、後者は乗馬用具の購入、馬術部への援助などにあてられます。値上げの根拠は騎乗者にはスポーツ傷害保険の加入が義務づけられその加入金を会費に含めたこと、馬術部への援助をもつと増やすべきであること、他の乗馬クラブに比べてまだ安いことです。

同好会の騎乗時間に変更があり、以前のように土曜日に一時間半乗れるようになりました。前より職員の中では日曜日だとわざわざ自宅から出かけてこなくてはならないけれど土曜日だと勤務が終つてから乗れるから便利であるとか、もつと乗れる日が多い方がよいとかの声がありましたので馬術部へ同好会より申し入れを行いました。二、三のやりとりの後に上のような形に落着いた

次第です。日旺日は従来どおり部員との合同練習ですが、その中で一定時間、教頭を同好会で乗ることになっています。なお土旺日は同好会だけの騎乗ですので、馬体管理上の問題から指導者が必ずつくような馬術部より要請があり、現在岡田、山野、八木、小栗、片寄、市川の諸氏がこれにあたっております。

最近、競馬ブームと相前後しながらレジャースポーツとしての乗馬も盛んになりこの札幌でも乗馬クラブが数ヶ所できてきているようですが、北大の中でも御多聞にもれず潜在的入会希望者がかなりいるように思われます。しかしながら、指導者の時間的都合や多忙のため潜在的希望者どころか会員の初心者にも十分に指導できる体制ではないように思います。会員の数がふえますとそれだけ馬術部への援助も増えるわけでその意味からも指導者の養成が急がれます。また土旺日の騎乗は今の現役諸君には経験のないことですのでスムーズに定着させていくのも重要な課題であると思われまます。そして同好会の質量ともにレベルアップがはかられ土旺日の午後は馬場で現役諸君と馬術論議でも交わされるようになるといいと思うんですが……。(文責市川)

# 北海道大学馬術部名簿

## 歴代部長

氏名		住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
永井 一夫	初代部長	札幌市南2条西12丁目	060	011 211-2435	北大名譽教授	
高松 信夫	第二代部長	東京都世田谷区松原6丁目36-8	156	03 322-6752	玉川大教授	
太奈 康光	第四代部長	函館市湯川町2の3	042	0138	函館高専校長	
松本 久善	第五代部長	物故				
半沢 道郎	第六代部長	札幌市北6条西12丁目	060	221-2288	北大農学部名誉教授	
河田啓一郎	現部長	" 北区北24西13	065	711-7470	北大獣医学部教授	内 5232

## 特別後援会員

氏名		住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
野間口英喜		東京都杉区永福2-36-19	166	03 321-7617	太田区羽田空港2の8の1東京航 厨食品(株) 日航ホテル社長 川崎日航ホテル社長	571-4911
滝沢 政雄		東京都目黒区目黒1-1目黒台マンションA-501	153		国策観光開発(株)取締役社長	24-5431
原島 つる		札幌市北2条西27丁目	063	011 621-1451	原島洋装院院長	
庄内 貞夫		" 白石中央53の3	062	011 861-2504	歯科医	
武田 忠幸		" 南6条西20丁目	063	011 561-3286	北都ハイヤー、北都バス社長	711-7214



氏名	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
小野 忠	札幌市北18条西5丁目	065	011 721-1526	北大モータース社長	
片野 高	" 北18条西6丁目 静山荘	065		北大農学部大学院	
佐合 義弘	" 札幌市西区手稲西野410番地	063		札幌市民生協協同組合理事	
高橋留次郎			662-9693	日本中央競馬会	
加藤 和男	東京都太田区南馬込6丁目29番-1号	143	03 751-4601	フシマン株式会社	
田中 昭志	札幌市琴似4条5丁目国鉄宿舍7号	068	011 731-8489	札幌鉄道管理局	
岡沢 尹大	(在カナダ)				

後援会員(卒業生)

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
中野友二郎	昭4 農農	東京都多摩市桜ヶ丘3丁目33の4	192-02		科学教育研修センター	
平山 常介	4 工機	横浜市鶴見区獅子ヶ谷町1222の19	230	045	日本海事業興業	
中谷 勝紀	5 工機	杉並区桃井1-15-23	167	370-3450	ヤンマー船舶機器(株)	542-0211
間 克市	6 農畜	千葉県鎌ヶ谷市初富522	273-01		地方競馬全国協会参与	
岩垣 駿夫	6 農農	神奈川県川崎市多摩区生田6983-173	214	0557 48-9530	東京農工大農学部教授	
河崎 秋三	6 農畜	八王子市高倉町1552	192		千葉県小林牧場	
藤居金太郎	7 農化	(在ブラジル・サンパウロ)			漁業	
永松 四郎	7 農畜	太田区北千束1-58-9	144	03 717-3484	永松商事	
半沢 道郎	8 理化	札幌市北6条西12丁目	060	011 221-2286	北大農学部名誉教授	

武田 朝男	8	農畜	品川区旗ノ台 6-1-2	142	03 781-1097	日本製酪協同組合	264-8421 ~ 4
東園 基文 (7主)	9	農農	目黒区五本木 3-30-1	153	711-8877	宮内庁侍従職参事	400-0451
田畑 武夫	10	医	札幌市南5条西2丁目	060	511-8733	田畑産婦人科医院院長	
植村 勘一 (8主)	10	農畜	神奈川県相模原市相武台団地 2丁目 2-1-31	228	0427 51-7299	久保田建設KK顧問 世田谷区大原1丁目13-6	467-2361
本田 桓康	10	工機	東京都港区六本木 7-2-2-402	106	405-6867	プレス工業KK常務取締役	044 26-2580
久葉 昇	10	農畜	岐阜県各務原市那加織田町 148	504	0583 82-5632	岐阜大農学部教授	
加藤 英夫	11	医	清水市下野字大坪 290-126	424	0543	清水簡易保険診療所 清水市入江町1丁目14-12	66-1279
脇田代子郎 (10主)	11	農化	神奈川県藤沢市辻堂西海岸 6366	251	0466	三菱化成工業常務取締役 千代田区丸ノ内三菱ビルディング	212-1570
大道 明德	11	理化	東京都狛江市覚東 320-6	182	428-4817	大迫技術士事務所	480-9717
高杉 直幹 (9主)	11	理化	札幌市北7条西13丁目	060	251-3720	北星大教授	
吉見 一郎	11	農教	東京都狛江市小尼立 620	182	489-0491	雪印乳業KK常務取締役	357-3111
渋谷 周平	11	農畜	東京都渋谷区代々木 1-22	151		日本アイスクリーム協会(社)	
森山 武雄	12	医	青森県南津軽郡浪岡町国立岩木療養所	038-13		国立岩木療養所所長	
滋賀 秀明 (11主)	12	医	港区白金台 5-3-20	108	44-1-7844	大同製鋼KK東京診療所所長	901-4169
小村 達夫	13	農生	岡山県吉備郡足守町足守 861	701-14		岡山大理学部教授	
山下 正亮 (12主)	13	農畜	札幌市白石区本通 818-135	062	861-5667	酪農学園大教授	
石井 昌長	13	農化	千葉県船橋市夏見台町夏見台団地 14-10	273	0433 62-9785	アルコール海運倉庫KK	
小笠原義頭	13	工電	川崎市多摩区宿河原 2223	214	044 82-3609	旭電気工業KK	
樋本 勝登	13	農経	東京都杉並区西荻北 202708 ライオンズマン ション西荻第2D-608	167	395-3548	中央技能検定協会理事	
松平 悌	13	農農	神奈川県秦野市鶴巻 963-18	257	0463 77-2116	成城プリン・プラザ	484-6781
黒沢 良雄	13	農経	茅ヶ崎市浜竹 4-0-30	253	0467 70-8676	日本長期信用銀行	211-5111

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
小田 昇	14 農畜	東京都目黒区柿の木坂3-4-18	152	424-8666	秀興不動産社長	
池内 武夫 (13主)	14 農畜	東京都世田谷区若林4-22-5	154	414-0361	日本中央競馬会理事	591-5251
中尾 敦司	15 工鉱	船橋市西習志野2丁目23-10	274		大日本鉱業KK	211-2671
西村 雅吉 (14主)	15 理化	函館市松陰町1-3	040	0138 51-1624	北大水産学部教授(水産化学科) 函館市港町	41-0131
木谷清喜貞	16 農実	金沢市片町2-2 20号木谷ビル	920	0762 21-5041	瓦土礎	
石井 和彦 (15主)	16 農畜	鳥取市湖山町1960-258 合同宿舎RCKI-201	680		鳥取大農学部教授	
河原 清作	16 工土	小樽市忍路町塩谷村	048-25		自営	
熊沢 洸	16 農実	札幌市北区北13条西3丁目 公団北13条アパート701	065	742-0392		
関 義人	16 医	秋田県湯沢市西松沢392	012		関内科小児科医院	
高木 史郎	16 工鉱	茨城県東茨城郡茨城町大字駒渡1244	311-31		波崎高等学校校長	
林 健爾	16 農実	札幌市手稲福井49-13	063	661-9707	ホクレン米穀事業部	
半沢 宏	16 工機	札幌市北6条西12丁目	060	261-7455	北大工学部教授	内 2191
伊関 悦郎	16 工鉱	函館市宮前町213	040		函館水産高校	
門池 世夫	16 農実	名古屋市千種区丸山町3-24	464		旭化学工業KK	
福光 幸彦	17 医	札幌市農平区平岸3の14	062	511-1848	福光延寿堂院小児科	
岡田 光天 (16主)	17 工木	札幌市南7条西22丁目	060	561-4750	札幌市役所建設局長	211-2500
石川 恒	17 農畜	札幌市北24条西16丁目	065	721-0053	北大獣医学部教授	内 5231
白取 善三	17 農実	弘前市大字薬師堂熊本19の2	038-03		大成軽ブロックKK社長	

小林 五郎	17	工電	神奈川県中郡大磯町東町2の64	255		沖電気工業KK特殊機器開発部次長	
山根 乙彦	17	農畜	鳥取市湯所町2の422	680		鳥取大農学部教授	
前田 正義	18	農実	名古屋市昭和区菊岡町2-5	466		雪印乳業名古屋マーガリン工場長	
大戸 進	18	農林	千葉県市川市菅野2-21-21	272		三井木材KK酒志野工場長	
小池 栄一	18	工土	札幌市藻岩下475	060	581-2290	北海道電力札幌支店土木課長	
平井 宏和	18	工電	東京都町田市玉川学園8-18-9	194	0427 26-6231	日本電気衛星通信開発室	044 41-1111
安部 孝	19	工電	// 小金井貫井北町3-19-5	184	0423 81-4100	高見沢電気製作所	
坂井 弘	19	農化	Hyderabad-30A.P. India (在インド)			AICRIP-Rajendranager	
田口 暢茂	19	医	札幌市北22条東18丁目	065	781-3621	道立千歳病院	
稲葉 忠一	19	農化	大阪府高槻市天神町2の16の15	569	0726 5-2759	日本油脂KK	
福岡 邦泰	19	農農	夕張郡長沼町錦町公宅		01262 2-0124	空知支庁長	
大手 英夫	19	理化	東京都新宿区西大久保2-219	160	365-4523	東邦シートフレームKK	272-2811
富塚 治郎	20	農畜	東京都福生市能川福生住宅537	198	0425-57 7107	東京都畜産試験場長	0428 31-2171
岸田幸三郎	20	農化	大阪市東淀川区山口町145-1	533		自営	
羽島 栄治	20	土木	名古屋市千種区朝日ヶ丘29	464	052 771-8518	日本鉄道建設公団名古屋支社	052 211-1451
小林 止英	20	農畜	東京都杉並区阿佐ヶ谷北3-26-10	166	337-3196	東京都経済局農材部畜産課長	212-5111 内 2883
木全 幹雄	21	農化	東京都杉並区清水1の6-8	167		自衛隊陸上幕僚監部	
山崎 治雄	21	工治	東大阪市西堤623狩勝工業	577		狩勝工業KK 大阪市城東区放出町2179	
宇津見千之助	21	農畜	栃木県小山市中央町2-6-1	323			
上野 新次	22	農農	新潟県東蒲原郡津川町2区県立津川高校	959-44		県立津川高校	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
和田 晴	22 農畜	東京都渋谷区富ヶ谷2丁目2-13	151	467-2815	北海道東京事務所参事	581-3411 内 300
宮崎 利昭	22 工機	東京都港区高輪1-5-33-312	108		三井物産事業部港区西新橋1-2-9	
武田 祐幸	22 理地	横浜市磯子区洋光台1-28-6	235	045 773-1581	国際航業KK地質部長	262-6221
田之上家久	26 農水	不明	181		日本放射線同位元素協会	
後藤 義英	28 農獣	札幌市円山西町2097	068	621-0962	札幌市環境衛生事業所長	
齊藤 善一	28 農畜	弘前市若党町79	036		弘前大農学部教授	
鈴木 敏夫	28 農畜	虻田郡洞爺村字洞爺町四町内公住	049-58		洞爺高校	
渡植貞一郎	28 農畜	名古屋市千種区不老町名古屋大学農学部 畜産科	464		名古屋大農学部	
蔦野 保	28 農畜	札幌市農平区羊ヶ丘北農試宿舎G-5	061-01		北海道農業試験場草地開発部第5 研究室長	851-9141
永井 重翁	28 農獣	水沢市新小路2番地雪印乳業KK水沢工場	023		雪印乳業KK水沢工場	
梶谷 晴男	28 農水産	大阪府生野区新今里町5の17	544	06 753-0387	大蔵エンジニアリング(株) 西宮市津門西口町9-15	0798 33-5008
吉本 正	28 農畜	千葉県松戸市定元648	271	0473 63-1221	千葉大園芸学部松戸市松戸648	
古谷 昌司 (26.27主)	28 農畜	浦和市別所3-38-10	336	0488 61-5073	古谷製菓KK技術部	0488 31-5873
下飯坂 隆	28 農畜	東京都中野区白鷺2-17-3 和田方	165	385-3269	日本軽種馬登録協会	429-5101
佐藤 敬	28 農畜	川崎市岡上510-28	215		雪印乳業KK技術部	268-3111 内 588
福島 務	29 医	福島市三河町7-17	960	0245 34-7223	福島医大産婦人科教授	0245-23- 1111内 360
阿部晃一郎	30 工敏	愛媛県越智郡宮窪町四坂島堂の端26	792-01		住友金属鉱山	
鎌田 正人 (28.29主)	30 農畜獣	浦河郡浦河町西幌別	057	01462 3-284	KK 鎌田牧場	
田中 浩	30 工冶	大阪府東区北浜3 大阪神鋼ビル内 神戸製鋼溶接棒技術サービス課	541		神戸製鋼KK	

正富 宏之	3 0	理動	美咲市東 5 条南 7 丁目	072		専修大学美咲農工短大	
齊藤 成俊	3 1	農経	札幌市北 1 条西 3 0 丁目 円山公宅 3 号	068	621-4770	北海道信用農工連	
佐伯 和夫 (旧石塚)	3 1	獣	白老郡白老町萩野第三石山	059-08		昭和工業 K K	
大久保利彦 (3 0 主)	3 1	獣	札幌市東区本町 1 条 2 丁目	065		雪印乳業 K K 北海道支社酪農課 札幌市苗穂町 6 丁目 3 6 - 1 0 8	741-1111
加藤昌太郎	3 1	理物	国分寺西町けやき台 3 2 - 1 0 3	185	0423 741-1111	(財団法人)日本総合研究所科学部 次長 千代田区平河町 2 - 1 6 - 1 5	03-265- 2371 内 356
加藤 元	3 1	獣	東京都杉並区久我山 3 - 7 - 2 7	168	334-1286	(北野ビル) ダクダク動物愛護病院	344-3536
千田 哲生	3 1	獣	東京都世田谷区弦巻 5 - 2 6 - 3 - 3 0 2	154	425-3462	中央競馬会競走馬保健研究所研究 二課長	429-2311
岡本 洸	3 1	農生	草加市松原 4 丁目 D 5 8 - 2 0 4	340	0489 23-9907	十条製紙 K K 東京事業所	
荒川 清	3 2	経	静内郡静内町字古川町 1 7 2	056			
榎本 幸人	3 2	理植	兵庫県津久郡淡路町岩屋神戸大学理学部 岩屋臨海実験所	656-23		神戸大理学部岩屋臨海実験所	
岡部 満雄	3 2	農畜	札幌市西区琴似八軒 5 条東 5 丁目道公宅 2 0 6	062		道農務部畜産課肉牛振興係長	231-4111
齊藤 実	3 2	経		930		不二越鋼材工業 K K	
宮沢 寛	3 2	農林産	逗子市山ノ根 3 - 1 2 - 1 0	249	0468 71-2487	日本揮発油建設部	045 731-1261
伊藤 亮	3 3	獣	岩手県岩手郡滝沢村菓子岩手種畜牧場 菓子牧場	020-01		農林省岩手種畜牧場菓子牧場	
池田 環	3 3	医薬	札幌市中央区大通西 2 3 丁目円山ビル 6 0 1	063	621-4251 円山ハウス		
乾 直道	3 3	理動	藤沢市辻堂新町 2 丁目 4 - 2 2	251	0466 36-9162	癌研究所病理部	418-0111 内 472
栗原 康	3 3	工鉱	東久留米市大門町 2 - 3 - 6 - 4 0 3	180-03	0424 72-9064	中小企業庁鉱山石炭局	511-1511
渡辺 俊弘	3 3	工応化	上尾市大字上字堤下 3 5 9 上尾シラコバト 公園ア パート 1 7 - 4 0 1	362		北炭化成工業 K K	
柴田 久男	3 4	工電	札幌市手稲町西野 9 3 7	063	661-8709	北海道電力火力部火力工事課	
今田 哲	3 4	農化	兵庫県西宮市甲東園 2 - 8 5 武田薬品研究所	662		武田薬品 K K	

氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
生田 勝一 (33主)	34 経	習志野市袖ヶ浦3-4-5-202	275	0474 74-5206	読売新聞社地方部	242-1111 内 3333
菅原 照雄	34 文哲				毎日新聞社北海道支社	
土井 敦	34 農畜	札幌市北2条西27丁目	063		ホクレン牛乳課 北4西1北農会館 牛乳共販課	251-1905 261-8525
山本 智	34 水	樺戸郡浦臼町字浦臼内14区	061-06		浦臼高校	
栗津健太郎	34 水	札幌市西区発寒834	063	661-1092	銀座屋(製パン業)	
村山 哲	34 経	埼玉県新座市道場1丁目3-10	325		本田技研工業	
樋口 正明 (32主)	34 法法	東京都世田谷上馬5-23-8	154	424-9496	東京都衛生局医務部	212-5111 内 2582~4
千葉 幹夫	34 獣	東京都世田谷区弦巻5-26-4-206	158	426-1858	中央競馬会馬事公苑普及課長	429-5101
中村 美幸	34 経経	東京都中野区鷺宮6-31-9	165	999-2443		
佐伯 雄二	35 農畜	群馬県館林市大字成島2544森永住宅31	374		森永乳業	
本橋 幹久	35 農畜	(在サンパウロ)				
奥野 静子 (旧片山)	35 文英	札幌市北2条西23丁目	063	611-8414		
小長谷善高	35 水	長崎市西坂町1番地 NHK長崎放送局	852		NHK長崎放送局-TV放送局	
田中 紀介	35 農林産	静岡県清水市宮代町6	424		富士合板KK研究所	清水 34-1271
長谷川邦夫	35 法法	立川市栄町5-28-1 公社250	190	0425 35-7461	岩崎通信機KK経理部	
門奈 駿	35 医	茅ヶ崎市旭ヶ丘13-4	253	0467 82-5744	国際興業航空サービス部	265-3661
森本 梯次 (34主)	35 農林産	埼玉県八潮市8条1567八潮団地 18-504	340	0489 95-0951	自営	600-5330
稲垣 修一	36 理化	愛知県知多郡阿久比町白沢みのかけ10の10	470-22		大同製鋼KK	
佐藤 典子 (旧佐藤)	36 医	(在アメリカ)			北大病院第2内科	

高林 嬉古 (旧高階)	36	医	横浜市磯子区岡村町238	235	045 751-4431	虎ノ門病院	583-6871
河原 紀夫	36	理地	八王子市館町1821-148	192	0426 61-4382	アジア航測KK	429-2151
湯浅 正之	31	農畜	船橋市坪井町600-59	274	0474 65-3742	伊藤忠商事KK畜産課	662-5111
吉田 亨	36	工衛	八王子市打越町715-208	192		高砂熱学工業KK技術部	251-7121
千葉 祐記 (36主)	37	農畜	小平市喜手町860-1 小平団地 2-4-405	160		雪印乳業KK販売促進部調査課	
広岡 暢夫	37	農畜	保谷市ひばりヶ丘2-11-9	188		全販連	279-0411
森 弘津	37	工精	名古屋市北区辻町2の36 大隅鉄工所 第一寮	462		大隅鉄工所	
四柳 智久	37	医薬	(米田留学中)			東京大大学院(薬学部)	
木塚 信次	37	農畜	横浜市戸塚区名瀬町784-10	244	045 531-5468	湘南食品KK研究室主任	045 891-1921
伊藤 公一	37	医	虻田郡俱知安町北4条東1丁目 俱知安厚生病院	044		俱知安厚生病院	
大場 善明 (35主)	37	文史	東京都足立区栗原2-6-14-104	123	883-8245	読売新聞広告部	242-1111 内4134
鶴見 好博	37	理化	東京都葛飾区金町5-19-3	125	600-2186	三菱瓦斯化学KK	600-2131
小島 杏介	37	水	横浜市神奈川区菅田町2872	221		淀橋保健所	368-6186
小山 毅	37	教	世田谷区南鳥山2-6-8-106	157	300-4775	専修大文学部	044 95-7131
市川 瑞彦 (37主)	38	理物	札幌市北区北31条西6丁目藤美ハウス	065	731-1634	北大教養部物理学教室助手	内2691, 5427
小出 秀通	38	医	大阪市阿倍野区美章園1-8-24	545			
宮崎 健	38	文露	横浜市北区日吉町128産経日吉住宅	222	044 63-2501	夕刊フジ	
玉沢 一晴	38	医薬	埼玉県南埼玉郡白岡町大字上野田1013の2	349-02	(0488) 82-3436	山之内製薬KK中央研究所	460-2171
岡田 征至	38	法	札幌市中央区大通西27丁目 拓銀円山アパート	063		北海道拓殖銀行事務部 札幌市南8条西8丁目	521-4111
志水 一允	38	農林産	横浜市港南区日野町5791藤ヶ沢住宅 6-408	222	045 841-5479	農林省林業試験場	711-5171



氏名	卒業年度	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
清水 洋	38	農畜 (在オキナワ)	233		農林省畜産局食肉鶏卵課	在オキナワ
原 重一	38	農農 北区赤羽台4-17-18-1103	228	908-0503	交通公社調査部	内 3575 211-3211
堀川 芳男	38	農畜 東京都中野区上高田2-16-9	164	385-8685	KK ソニーオーディオビデオ取締役	
実吉 峯郎	38	医薬 (在カナダ)	150	461-5550	国立ガンセンター研究所	
新原 輝久	39	理地 東京都北多摩郡狗江町泉1284	182		国際航業KK	
中村セツ子 (旧田中)	38	農工 東京都世田谷区奥沢6-24-14	158	702-1365		
恩田 正臣	39	農畜 群馬県勢多郡富士見村小暮2425 群馬県畜産試験場	371-01		農林省群馬畜産試験場	027288 7又12
横沢喜美子 (旧入江)	39	薬 東京都杉並区清水3丁目15の2	167			
小林 則子 (旧寺江)	39	農畜 札幌市北36条東6丁目	065		天使女子大	
高木 佑太	39	農畜 横浜市港区南綱島町500-4	222		台糖フェイザーKK	
小島 武	39	医薬 神戸市兵庫区山田町上谷上字上の開地 42の30	651-12		鐘ヶ淵化学KK	
荒木 伸也	39	水 鎌倉市十二所98十二所アパート	248		自家営業	
三浦清一郎	39	教 文京区根津2の18の5	113		東京都台東区上野公園12-43 国立社会教育研修所	03 823-0241
田村 雅英	39	工合 立川市柏町4-51-1柏町団地9-306	190	0425 85-1670	小西六写真工業KK 日野工場管材課	0425 83-1521
八木 正己 (38主)	40	理生 札幌市白石区もみじ台北3丁目2の1 N2の306	061-01	897-2109	札幌市役所公園課	2111-2532
野田 行文	40	獣 多摩市諏訪2-1-5-803	192		中外製薬総合研究所	987-7111
大木 誠示	40	理数 埼玉県入間郡富士見町大字鶴馬2824	354		ユニックKK	
吉田 賢一 (旧御坊田)	40	工治	241		日本揮発油KK	
守屋 正	40	工精 東京都大田区田園調布2-40第一桜ヶ丘寮	145		三菱重工KK東京製作所	

萩原 雅典	4 0 経	八王子小安町 2-32, B-202	192	0426 42-0974	日立製作所中央研究所	0423 23-1111
滝沢南海雄 (39主)	4 0 理植	旭川市北門町16丁目 北海道立林産試験場公宅55号	070		日立製作所武蔵野工場	
松永 武彦	4 0 工電子	東京都小平市学園西町1211日立一ツ橋 社宅308	187		日立製作所武蔵野工場	
水野 佑亮	4 0 理化	札幌市北29条西5丁目 めぐみ荘	065	751-1803	北大結核研究所助手	内 5586
横田 肇	4 0 農化	東京都東村山市久米川町4-1496	189		明治乳業KK研究所	
菅野 弘	4 0 農畜	室蘭市幸町119 胆振支庁	051		胆振支庁農務課畜産係	
大沢 竜子 (旧 牧)	4 0 薬薬	新潟市関屋町2-42	951			
滝沢 迪子	4 0 文独文	(在ドイツ)			北大文学部助手	
松尾 英彦	4 1 水産	高松市太田下町2677の3	583		日魯漁業	
八木多賀子 (旧八木)	4 1 文哲	札幌市白石区もみじ台北3丁目2の1 N2の306	061-01	897-2109		
桜田 慧子 (旧大堀)	4 1 法法	札幌市白石区本通6丁目南	062		北大法学部助手 退会	
黒沢 道雄	4 1 工機	千葉県八千代市八千代台東1の29の2 藤倉電線八代台アパート402号	351		藤倉電線	
高野 文彰	4 2 農農	千葉県松戸市松戸1155 (在アメリカ) コマツマンション201		0478 65-8281		
小栗 紀彦 (40主)	4 2 農畜	札幌市北21条西13丁目合同宿舍新川 住宅518-53	063	741-7335	北大農学部助手	内 2576
近藤喜十郎	4 2 文史	名古屋市中区大須3丁目31-23	460		経営コンサルタント産業社会学 研究室	052 732-0335
高橋 昭夫	4 2 獣	野付郡別海町西春別駅前西町	086-03		別海農共中西別家畜診療所	
八木沢守正	4 2 理生	東京都目黒区大橋1-8-5 目黒第5コー ポラス2FL205号	153	462-1854	協和醸酵(財)微生物化学研究所	441-4173
山村 勝	4 2 農林	山形市緑町4-9-5 布施方	990	0238 22-8010	山形県農林部林務課	
加藤 正昭 (41主)	4 2 工衛	帯広市大通り8丁目10	080		加藤家具店	
田中 倬	4 4 医			682-0567		

氏名	卒業年次	住 所	郵便番号	電 話	勤 務 先	電 話
阿部 勝彦	4 3	農林	東京都杉並区阿佐ヶ谷北5丁目11-19	166	337-7735	
五十嵐 章 (42主)	4 3	法	浦和市駒場1丁目10	070		
池田 統洋	4 3	工機	埼玉県上尾市原市6の965	362	0487 74-2051	581-7311
入江 圭	4 3	工衛	東京都世田谷区成城町2丁目6番地13号	157	416-7531	212-5111 内 4722
高倉 宏輔	4 3	獣	横浜市磯子区原町11-1 動物検疫所磯子寮	253		747-0267
降旗 正忠	4 3	工電	千葉県船橋市山手2-3-34 三菱電機船橋寮	273	0474 31-5320	
狩野 和子 (旧仙波)	4 3	教	小樽市桂岡町274	047-02		
山本 絃明	4 3	経	大阪府交野市大字私部2206-63	576		
浜岡 秀洋	4 3	工機	大阪市寝屋川市東大和6-5 浜明男方	572		
斉藤 勝雄	4 4	農機	札幌市澄川12	062	831-6281	
田中 力	4 4	獣	岩手県花巻市高木第20地 割雇用促進住宅 3号棟303 中山競馬場 第一寮	025		
春田 恭彦 (43主)	4 4	農畜	市川市若宮3-41-7	272	0493 35-0504	0473 34-2222
村井 弘一	4 4	農畜	北見市三輪町443 山崎団地	090		
山本 進	4 4	水化	河東郡音更町中音更東土狩	080-04		
寺崎 弘恭	4 4		大阪府豊中市刀根山町4-98 近藤方	560		
今井 雅子	4 5	農化	札幌市北3条西15丁目	060	531-1621	
小野 政則	4 5	農林	静岡市川合118-10	420	0542 61-0311	
加藤 公敏	4 5	理化	札幌市北18条西5丁目 五月荘	065	711-6844	北大理学部
橋口 庸	4 5	医	札幌市北18条西5丁目 五月荘	065	711-6844	北大医学部学生

佐藤 豊	2	理類	北区北15条西2丁目 奥村方	(711-3973)	長崎県長崎市上町6-6
佐野 淳之	2	理類	北区北17条西8丁目 恵迪寮	(742-7333)	神奈川県藤沢市鵠沼松ヶ岡1-10-12
武田 容子	2	臨床検査 技師学校	北区北27条西7丁目879の22 樋口荘	(711-5670)	夕張市清水沢住の江町23
西田 篤司	2	理類	北区北20条西7丁目 田村方	(711-4852)	札幌市北区新琴似5条8丁目488
平野 雅裕	2	文類	中央区南11条西23丁目		東京都目黒区南1-4-8
横沢 敏夫	2	理類	北区北20条西7丁目 幌北荘	(742-0658)	上川郡和寒町字中和480

## 編集後記

今年こそは三月中に部報の発行を、と意を決して編集にあたった結果がこのように大幅な延期となり、今となってはもっと「鬼ノ」と呼ばれるくらいにきびしくしても良かったのではないかとただ後悔するばかりであります。

しかし何はともあれ今年も無事、部報を発行することができました。つきましては部長の河田先生をはじめ、寄稿など御協力を頂いた先輩諸氏、また原稿書きに大いに頭を悩ませられた部員諸兄には深く感謝致しますと共に発行がおくれましたことをお詫び致します。

なお若干の部員諸兄には再三の原稿請求にもかかわらず、堂々と我が道を行かれたその勇氣に心から賛評をお送りしたいと思えます。

部報が完成すると我々編集員一同にも春が来るのです。嗚呼！長い冬だった。

印刷するばかりになった原稿をみると、ウシシ、顔の筋肉がたるんでくるノダノ

(仏の)編集委員

桑田 壮平  
佐藤 豊  
西田 篤司  
石川 淳子

部報 第一九号

昭和四十九年五月 発行

発行者 北海道大学馬術部

札幌市北区北十七条西六丁目

北大体育会内

編集者 部報編集委員会

印刷所 北大生協プリント部

非売品

乗馬用長靴

スキー・スケート・登山靴

各種靴製造と販売

札幌加盟店

**三浦靴店**

札幌市南一条西八丁目八番地

代 (231)0901

Coffee

味とかおりを  
創る店



サッポロ北区北11西4

TEL 741-2345

741-3174

4  
う  
い

サッポロ北8西4

でんわ 742-7680

**COFFEE & SNACK**



南1西17医大前

T (621) 0701

栗津健太郎(34年卒)

医 薬 品 卸



ホシ伊藤株式会社

本 社 札幌市中央区南8条西14丁目1397番地

支 店 帯広・釧路・北見・函館・旭川

空知・室蘭・苫小牧・岩見沢・小樽

各 種 飼 料 取 扱

渡 部 商 店

TEL 711-7034

# 亭北軒

モツラ

札幌市北16条西4丁目  
TEL (711) 6450

フロンテアライディングパーク

## フロンテア乗馬クラブ

- 野外コース、遠乗コースが自慢です
- かやぶき屋根の合宿施設が出来ました

案内所 札幌市北6条西6丁目 TEL 711-9427  
馬場 札幌市郊外厚田村入口 TEL 01336/23858

クリーンサッポロ!!自動車公害追放整備

### 札幌陸運局指定民間車検工場

## 北大モーターズ

札幌市北区北十八条西五丁目

721-1526



北海道名物

ジンギスカン専門の店

# 義 経 本 店

毎度御引立有難う御座居ます。60名迄のコンパ、宴会が出来ますので御利用願います。

札幌市北18条西5丁目

TEL 721-1723

義経本店

# 太 田 装 蹄 所

札幌市東区東苗穂三八番の一六二

日本中央競馬会

# 札幌競馬場

札幌市北14条西19丁目  
TEL (721)0461~5

場長 西村 勤

